

福岡市埋蔵文化財調査報告書第685集

いるべ
入部 XI

－東入部遺跡群第2次調査報告(3)－

2001

福岡市教育委員会

IRU BE
入 部 XI

—東入部遺跡群第2次調査報告(3)—



2001

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は、昭和62年度から平成7年度にかけて実施された早良区入部地区の県営圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成3年度の東入部遺跡群第2次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地元改良区をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例　　言

1 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、第2次調査（1991年度）3回目の報告である。今年度は前年度に引き続き8区の調査に関わるもので、前年度報告の弥生時代の掘立柱建物と竪穴住居、また整理中の弥生時代の墳墓・祭祀を除いた弥生時代～近世の遺構を対象とした。

1 県営入部地区圃場整備に伴う発掘調査の報告としてはこれまで以下の10冊が刊行されている。本書はこれを引き継ぎ、11冊目にあたることから書名を『入部X』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

『入部I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集	1990
『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集	1991
『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集	1992
『入部IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集	1993
『入部V』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集	1995
『入部VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集	1996
『入部VII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集	1997
『入部VIII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第557集	1998
『入部IX』福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集	1999
『入部X』福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集	2000

1 本報告に用いた遺構実測図は濱石哲也、池田祐司、長家伸、榎本義嗣、屋山洋、英豪之、黒田和生が作成し、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、長家が撮影した。なお空中・航空写真是有限会社空中写真企画（檀睦夫）による。

1 出土遺物の実測は濱石、長家、林出憲三が行った。写真撮影は林田が行った。

1 図版22の鉄器のX線撮影は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎、片多雅樹による。

1 本書に関わる製図は濱石、林田があたった。

1 本書の作成には他に樋口久子、星野明子が関わった。

1 本書に用いた方位は磁北である。

1 遺構番号は東入部遺跡群第2次調査全体での4桁の通し番号で、8区では0021～0240、0411～0550、0616～0700、0901～1099、1140～2379が相当する（欠番あり）。遺構の種類に応じて頭に次の略号をつけた。SB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居）、SD（溝）、SK（土坑）、SX（祭祀遺構等）。なお甕棺墓はK、土壙墓・木棺墓はD、ピットはPを略号とする。

1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1 本書の作成作業は国庫補助を受けて行った。また、作成事業は埋蔵文化財課（課長 山崎純男、第1係長 山口謙治、第2係長 力武卓治）が担当した。

1 執筆はIII-3を長家、III-4-3のSK1213出土遺物の項を林出、他は濱石が担当した。

1 編集は長家の協力を得て濱石が行った。

本文目次

	本文頁
I はじめに.....	7
1. 調査の経緯.....	7
2. 調査組織.....	7
II 東入部遺跡群第2次調査.....	10
1. 遺跡の位置.....	10
2. 調査の概要.....	10
III 8区の調査.....	11
1. 概要.....	11
2. 弥生時代の遺構と遺物－集落.....	12
1) 堀立柱建物.....	12
2) 壴穴住居.....	12
3) 土坑.....	14
4) 溝状遺構.....	65
5) その他の出土遺物.....	87
3. 古墳時代の遺構と遺物.....	69
1) 0501号古墳.....	69
2) 0502号古墳.....	74
3) 0503号古墳.....	77
4) 0504号古墳.....	78
5) 0505号古墳.....	84
6) 土坑.....	87
7) 溝状遺構.....	87
8) その他の出土遺物.....	89
4. 古代以降の遺構と遺物.....	89
1) 堀立柱建物.....	89
2) 壴穴住居.....	92
3) 土坑.....	92
4) 溝状遺構.....	104
5) その他の出土遺物.....	104

図版目次

図版1	1 8区北側（上空から）	2 8区南側（上空から）	
図版2	1 8区南西側（北東から）	2 8区南西側（北から）	
図版3	1 8区北側（南から）	2 8区西北側（北から）	
図版4	1 SK0411（南から） 4 SK0417（南東から）	2 SK0412（南西から） 5 SK0422（東から）	3 SK0416（東から） 6 SK0479（北西から）
図版5	1 SK0483（北から） 4 SK0524（北から）	2 SK0485（北から） 5 SK0525（北から）	3 SK0515（北から） 6 SK0526（南から）
図版6	1 SK0530（西から） 4 SK0534（北から）	2 SK0532（北から） 5 SK0542（東から）	3 SK0533（東から） 6 SK0637（西から）
図版7	1 SK0648（西から） 4 SK0656（北から）	2 SK0654（北から） 5 SK0664（西から）	3 SK0655（北から） 6 SK0665（北から）
図版8	1 SK0671（北から） 4 SK0677（西から）	2 SK0672（東から） 5 SK0909（南東から）	3 SK0675（北から） 6 SK1218（南東から）
図版9	1 SK1365（西から） 4 SK1750（北から）	2 SK1372（北から） 5 SK1969（東から）	3 SK1583（西から） 6 SK2000（東から）
図版10	1. 0501・0503号古墳（上空から）	2 0502・0504・0505古墳（上空から）	
図版11	1 0501号古墳（東から）	2 0502号古墳（東から）	
図版12	1 0503号古墳（北から）	2 0505号古墳（西上空から）	
図版13	1 0501号古墳埋葬主体部（西から） 3 同前（開棺後、北から） 5 0504号古墳周溝（東から）	2 0503号古墳埋葬主体部（開棺前、北から） 4 同前（開棺後、西から） 6 0504号古墳周溝遺物出土状況（東から）	
図版14	1 SX0995（南から） 3 SX0418（西から） 5 SK0520（西から）	2 0505号古墳埋葬主体部抜き跡部分（南から） 4 SX0418遺物出土状況（北から） 6 SK0661（南から）	
図版15	1 SK0687（西から） 4 SC0976（南から）	2 SB0231（西から） 5 SC1957（南から）	3 SB0233（北から） 6 同前（北から）
図版16	1 SK0413（西から） 4 SK0478（北から）	2 SK0415（南から） 5 SK0486（東から）	3 SK0434（北から） 6 SK0497（南から）
図版17	1 SK0511（西から） 4 SK0622（北から）	2 SK0514（北から） 5 SK1213（上面、西から）	3 SK0621（南東から） 6 同前（完掘後、東から）
図版18	出土遺物I		
図版19	出土遺物II		
図版20	出土遺物III		
図版21	出土遺物IV		
図版22	出土遺物V		

挿図目次

本文頁

第1図	入部園場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1/50,000）	8
第2図	入部園場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1/10,000）	9
第3図	東入部遺跡群および第2次調査地点（縮尺1/3,000）	折り込み
第4図	第2次調査グリッド配置図（縮尺1/2,000）	12
第5図	弥生時代遺構分布略図（縮尺1/500）	13
第6図	SK0411・0412・0416・0417・0422・0436・0479・0483・0485実測図（縮尺1/40）	16
第7図	SK0411出土遺物実測図（縮尺1/3）	17
第8図	SK0416出土遺物実測図（縮尺1/3）	18
第9図	SK0417出土遺物実測図（縮尺1/3）	19
第10図	SK0422・0436・0479・0484出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	20
第11図	SK0515・0524・0525・0526・0528実測図（縮尺1/40）	21
第12図	SK0524・0525・0526・0528出土遺物実測図（縮尺1/3）	23
第13図	SK0530・0532・0533・0534・0535・0536・0537実測図（縮尺1/40）	24
第14図	SK0530・0532・0533出土遺物実測図（縮尺1/3）	26
第15図	SK0534・0536・0537出土遺物実測図（縮尺1/3）	27
第16図	SK0541・0542・0543・0544・0620・0637実測図（縮尺1/40）	28
第17図	SK0541出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	29
第18図	SK0542出土遺物実測図1（縮尺1/3）	30
第19図	SK0542出土遺物実測図2（縮尺1/3）	31
第20図	SK0542出土遺物実測図3（縮尺1/3）	32
第21図	SK0543・0544・0620・0637出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	33
第22図	SK0648・0654・0655・0656実測図（縮尺1/40）	35
第23図	SK0648・0654出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	36
第24図	SK0655出土遺物実測図1（縮尺1/3）	37
第25図	SK0655出土遺物実測図2（縮尺1/2, 1/3）	38
第26図	SK0663・0664・0665・0671・0672実測図（縮尺1/40）	39
第27図	SK0663出土遺物実測図（縮尺1/3）	40
第28図	SK0664・0665出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	42
第29図	SK0671出土遺物実測図（縮尺1/3）	43
第30図	SK0675・0677・0906・0907・0909・0974・1158実測図（縮尺1/40）	44
第31図	SK0675・0677・0691出土遺物実測図（縮尺1/3）	45
第32図	SK0906・0909・0974・0982・1158出土遺物実測図（縮尺1/3）	46
第33図	SK1218・1219・1261・1281・1334・1344・1350・1364実測図（縮尺1/40）	48
第34図	SK1218・1219・1261出土遺物実測図（縮尺1/3）	49
第35図	SK1281・1344・1350出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	50
第36図	SK1365・1367・1371・1372・1397・1440・1444実測図（縮尺1/40）	52
第37図	SK1365・1367出土遺物実測図（縮尺1/3）	53
第38図	SK1372・1397・1440出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	54
第39図	SK1456・1457・1583・1750・1767・1812・1814・1824・1969実測図（縮尺1/40）	55
第40図	SK1456・1457・1583・1750・1767・1812出土遺物実測図（縮尺1/3）	57
第41図	SK1814・1824出土遺物実測図（縮尺1/3）	58
第42図	SK1968出土遺物実測図（縮尺1/3）	59
第43図	SK1984・1989・2000・2019・2023・2024・2060実測図（縮尺1/40）	60
第44図	SK1989・2019・2023・2024・2060出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	61
第45図	SK2066・2076・2083・2330・2363・2366・2367実測図（縮尺1/40）	62
第46図	SK2076・2083・2090・2137・2162・2280・2330・2366出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	64
第47図	その他の出土遺物1（縮尺1/2, 1/3）	66
第48図	その他の出土遺物2（縮尺1/2）	67
第49図	その他の出土遺物3（縮尺1/2）	68

第50図	古墳時代遺構分布略図（縮尺1/500）	70
第51図	0501号古墳全体図（縮尺1/100）	71
第52図	0501号古墳主体部実測図（縮尺1/30）	72
第53図	0501号古墳出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	72
第54図	0502号古墳全体図（縮尺1/150）	73
第55図	0502号古墳周溝土層実測図（縮尺1/40）	74
第56図	0502号古墳主体部実測図（縮尺1/60）	74
第57図	0502号古墳出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	75
第58図	0503号古墳全体図（縮尺1/100）	76
第59図	0503号古墳主体部実測図（縮尺1/30）	77
第60図	0503号古墳出土遺物実測図（縮尺1/3）	78
第61図	0504号古墳全体図（縮尺1/150）	79
第62図	0504号古墳主体部実測図（縮尺1/60）	79
第63図	0504号古墳周溝遺物出土状況、SX0995実測図（縮尺1/30, 1/40）	80
第64図	0504号古墳出土遺物実測図（縮尺1/2）	81
第65図	0505号古墳全体図（縮尺1/150）	82
第66図	0505号古墳周溝上層実測図（縮尺1/40）	82
第67図	0505号古墳主体部実測図（縮尺1/60）	83
第68図	0505号古墳出土遺物実測図1（縮尺1/3）	84
第69図	0505号古墳出土遺物実測図2（縮尺1/2）	85
第70図	SX0418・SK0520・0549・0973・0661・0687実測図（縮尺1/30, 1/40）	86
第71図	SD0443・0971実測図（縮尺1/40）	88
第72図	SK0661・0687, SD0443他出土遺物（縮尺1/3）	88
第73図	古代以降の遺構分布略図（縮尺1/500）	90
第74図	SB0231・0232・0233・0234・0235・0236実測図（縮尺1/100）	91
第75図	SC0976・1957実測図（縮尺1/80）	93
第76図	SK0413・0415・0432・0433・0434実測図（縮尺1/40）	94
第77図	SK0478・0486・0497・0511・0514・0531・0621・0622・0624・0970実測図（縮尺1/40）	95
第78図	SK1213・1247・2037実測図（縮尺1/40）	96
第79図	SK1213出土遺物実測図1（縮尺1/3）	98
第80図	SK1213出土遺物実測図2（縮尺1/3）	99
第81図	SK1213出土遺物実測図3（縮尺1/3）	100
第82図	SK1213出土遺物実測図4（縮尺1/3）	101
第83図	SK1213出土遺物実測図5（縮尺1/2, 1/3）	102
第84図	SD0492実測図（縮尺1/40）	103
第85図	SD0492、その他の出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	104

表 目 次

本文頁

第1表	入部園場整備地区内発掘調査年度別一覧	7
第2表	東入部遺跡群調査一覧	10
第3表	東入部遺跡群第2次調査地区一覧	11
第4表	弥生時代掘立柱建物一覧	14
第5表	弥生時代堅穴住居一覧	15

付 図

東入部遺跡群第2次調査8区遺構配置図（縮尺1/200）

I はじめに

1. 調査の経緯

1985年、福岡市早良区人字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から8ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な計画であった。

事業計画地内には重留、四箇船石、四箇占川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の8遺跡群と坪塚古墳が知られており、1986年3月に行った試掘調査でも弥生時代と中世を主体とした遺構がほぼ事業地内全域に広がっていることが確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議をもち、当該年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基づき一部設計変更をはかるなど、調査対象面積を最小にする方針をとった。発掘調査は1987年度から1995年度まで9ヶ年にわたって実施した（第1表）。

本書は、1991年度に実施した東入部遺跡群第2次調査の本報告である。ただ整理の都合上、前年度に引き続き8区の遺構・遺物の一部について報告する。

2. 調査組織

事業主体 福岡県農林事務所農地整備部歴史課、福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市入部土地改良区

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 柳田純孝、折尾学、荒巻輝勝（前任） 山崎純男

第1係長 飛高憲雄、横山邦雄、二宮忠司（前任） 山口謙治

第2係長 柳沢一男、塙屋勝利、山崎純男、山口謙治（前任） 力武卓治

庶務 中山昭則、内野保基（前任） 御手洗清（文化財整備課管理係）

調査担当 清石哲也（現埋蔵文化財センター） 長家伸 池田祐司 櫻本義嗣

調査補助 堀山洋（現埋蔵文化財課） 加藤隆也（同） 英豪之 黒田和生

整理補助 林田憲三（埋蔵文化財課調査員） 井上かおり

調査にあたっては県農林事務所、市農業土木課、入部土地改良区（鍋山弥三理事長）のご指導・協力を得た。なお入部地区県営圃場整備事業は、平成12年7月28日めでたく竣工式を迎えた。

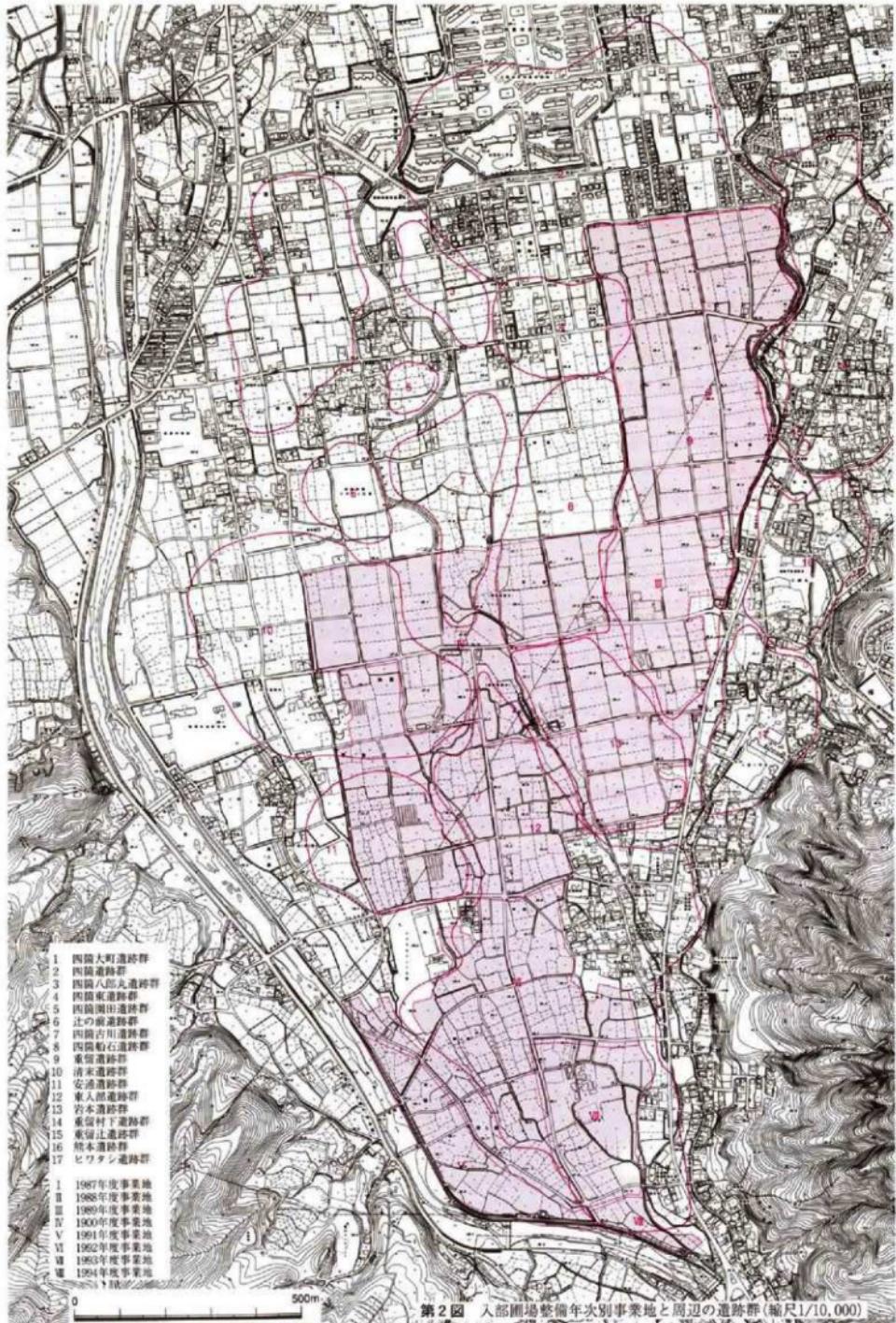
次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡群
1	1987(昭和62)	5.0ha	12,500m ²	1988. 1. 6～1988. 3. 31	重留
2	1988(昭和63)	15.2ha	15,000m ²	1988. 6. 21～1989. 4. 7	重留（2次）・坪塚古墳
3	1989(平成元)	15.9ha	16,200m ²	1989. 8. 1～1990. 3. 26	重留（3次）・岩本・四箇船石
4	1990(平成2)	15.2ha	22,294m ²	1990. 7. 18～1991. 3. 8	清末（2次）・岩本（2次）・四箇船石（2次）・東入部・四箇古村
5	1991(平成3)	21.7ha	34,381m ²	1991. 5. 13～1992. 3. 5	清末（3次）・東入部（2次）・安通
6	1992(平成4)	14.0ha	13,832m ²	1992. 5. 20～1993. 1. 31	東入部（3次）
7	1993(平成5)	6.0ha	17,000m ²	1993. 5. 1～1994. 2. 28	東入部（7次）
8	1994(平成6)	1.8ha	5,000m ²	1994. 7. 7～1994. 11. 25	東入部（10次）
9	1995(平成7)（暗渠排水）	2,800m ²		1995. 10. 4～1996. 2. 21	東入部（11次）

第1表 入部圃場整備事業地区内発掘調査年度別一覧



- 1 吉武遺跡群 6 四箇遺跡群 11 西新町遺跡
 2 大田遺跡 7 拝冢古墳 12 五島山古墳
 3 羽根戸遺跡 8 有田遺跡群 13 八六町ツイジ遺跡
 4 桑地遺跡 9 原遺跡群 14 宮ノ前遺跡
 5 田村遺跡群 10 藤崎遺跡群 15 野方中原遺跡
- 遺跡群
 ●遺跡
 ▨古墳
 アミ部が開場整備事業地

第1図 入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡 (縮尺1/50,000)



第2図 入部圃場整備年別事業地と周辺の造跡群(縮尺1/10,000)

II 東入部遺跡群第2次調査

1. 遺跡の位置

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、標高592mの油山西麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で実施された（第1・2図）。今回報告する東入部遺跡群は、事業地内の遺跡群のなかでは最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の冲積地を占地する。東西約700m、南北約1200mの広大な遺跡群で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡群が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭隘地となる。標高は遺跡群の1次調査北端で29m、3次調査地点で33~37m、南端にあたる10次調査地点で39mをはかる。

この東入部遺跡群では、今年度までに12次にわたる発掘調査が行われてきた（第2表）。その内容は縄文時代の包含層、弥生時代の集落と墳墓、古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の官衙的建物群、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡などきわめて豊富なものであった。それはこの遺跡群が、弥生時代以降早良平野内での一大拠点であることを示している。

2. 調査の概要

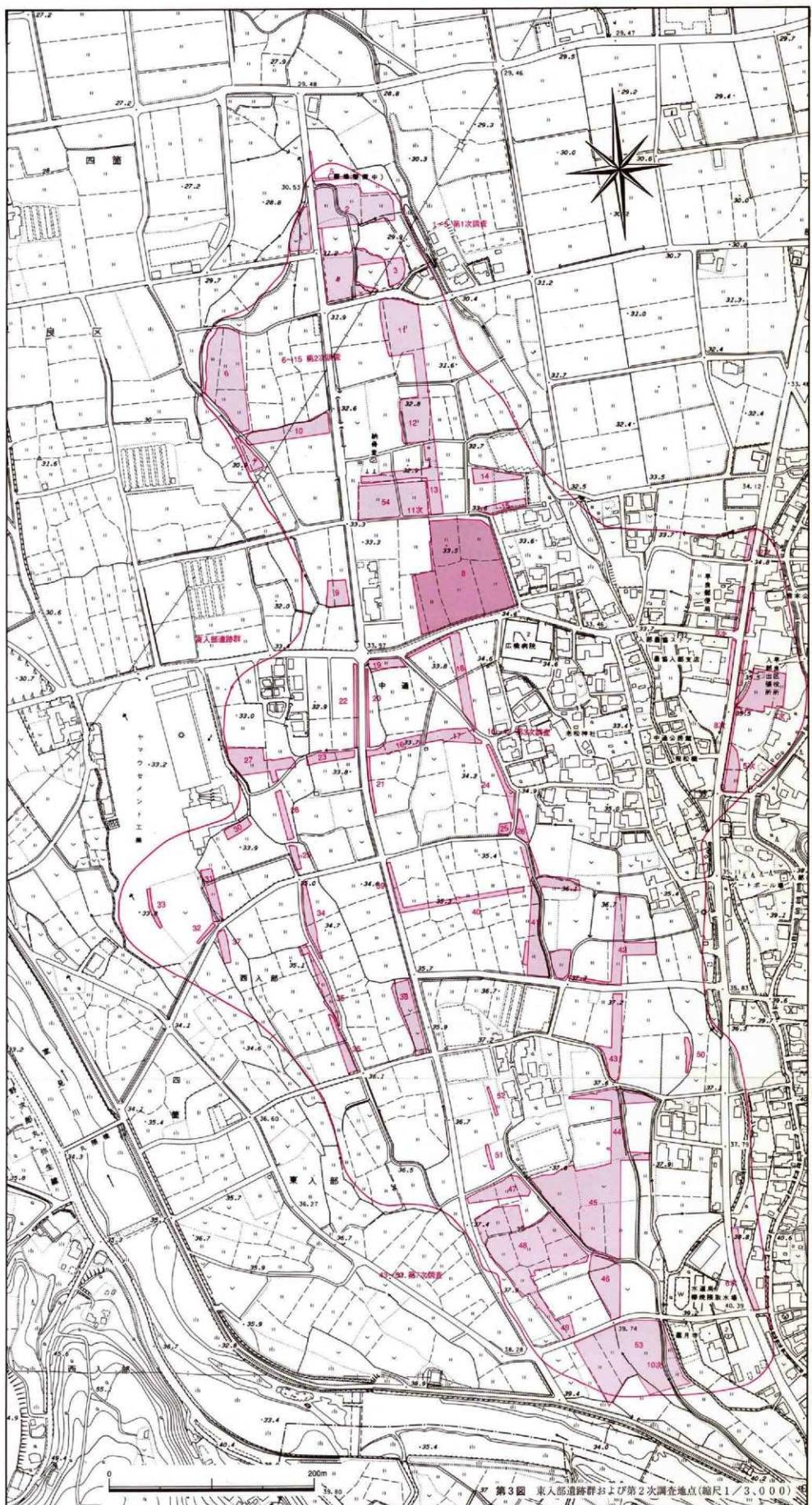
1991年度の事業地の総面積は21.7ヘクタールに及び、1991年4月2日から5月10日まで詳細分布調査の結果、発掘調査を要する面積は工事対象地の約60%、102,400m²にも達した。課では事業者と数回の調整会議をもち、主に田面の盛土の設計変更により、調査対象面積を34,381m²まで縮小した。

このうち東入部遺跡群の調査面積は16,271m²で、1次調査に続き6区～15区に分け、5月13日から6区の表土剥ぎを開始した。その後7区、さらに8月から8区へと進んだ。8区では櫛棺墓などからの副葬品の発見が相次ぎ、11月16日には現地説明会を開催し、遺跡と出土遺物を一般に公開した。8区の調査は翌年2月まで継続した。一方、10月から9～15区の調査にも着手し、2月末に終了した。3月5日に1991年度の発掘調査をすべてを完了した。

なお1991年度の調査対象であった安通遺跡群と清末遺跡群、および東入部遺跡群6区・7区・9区・10区についてはすでに本報告を行っている。

次数	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間	調査地番	調査原因	報告
1	9074	HGI-1	5,453m ²	1990. 7.18～1991. 3. 8	東入部1943他	圃場整備	557集・613集
2	9165	HGI-2	16,271m ²	1991. 5.13～1992. 3. 5	東入部1378他	圃場整備	613集・652集・本報告
3	9216	HGI-3	12,832m ²	1992. 5.20～1993. 1.31	東入部1274他	圃場整備	485集
4	9208	HGI-4	1,319m ²	1992. 5. 8～1992. 8.10	東入部329-1他	公民政建設等	381集
5	9226	HGI-5	351m ²	1992. 5.13～1992. 8.20	東入部329-1他	下水道工事等	382集
6	9227	HGI-6	380m ²	1992. 8. 9～1992. 9. 4	東入部399-7他	道路拡幅	383集
7	9312	HGI-7	17,000m ²	1993. 5. 1～1994. 2.28	東入部1172他	圃場整備	516集・557集
8	9348	HGI-8	175m ²	1993.11. 9～1993.11.26	東入部329-21他	道路拡幅	421集
9	9418	HGI-9	145m ²	1994. 5.25～1994. 6.28	東入部336-2他	道路拡幅	421集
10	9427	HGI-10	5,003m ²	1994. 7. 7～1994.11.25	東入部1098-2他	圃場整備	485集
11	9529	HGI-11	2,800m ²	1995.10. 4～1996. 2.14	東入部1365他	圃場整備	
12	9722	HGI-12	30m ²	1997. 6. 5～1997. 6. 7	東入部1450-1	道路改良	年報12

第2表 東入部遺跡群調査一覧



第3図 東入部道路群および第2次調査地点(縮尺1/3,000)

III 8区の調査

1. 概要

東入部遺跡群は、荒平山の西麓から西北方向に延びる舌状の丘陵上に広がる遺跡群で、第2次調査地点はその中央から北半部にはば相当する。調査対象が広範囲にわたったため、6～15区にわけて発掘を行った（第3表）。

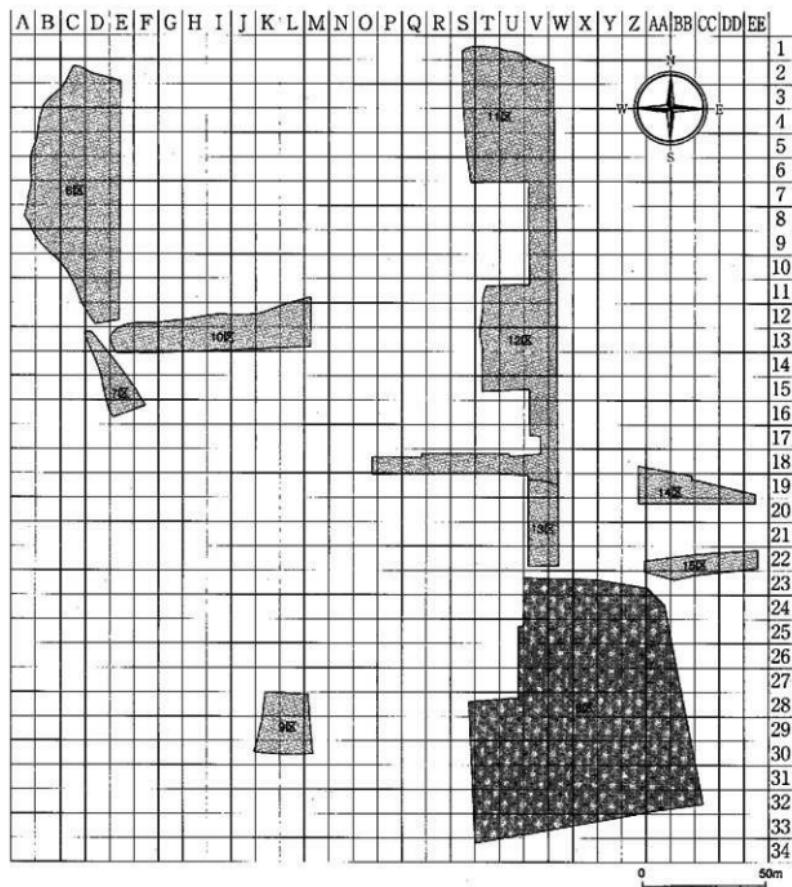
8区は丘陵中央の尾根線上から西側斜面にあたるが、調査時には全体に水田が営まれ、北側で標高33m、南側で33.5mとはば平坦な状況を呈していた。この調査区では弥生時代の集落・墓地・古墳、奈良・鎌倉時代の集落を主に確認した。弥生時代集落は中期を中心とし、塹穴住居と掘立柱建物あわせて40数棟からなる。墓地は集落の東側に接し、甕棺墓・土壙墓・木棺墓あわせて160数基からなり、その一部は南北2ヶ所に方形区画墓を形成する。その時期は前期末から後期初頭に及び、銅劍、銅鉗、鐵製武器などの副葬品が出土した。また祭祀土器が区画溝などから大量に出土した。古墳は5基検出した。いずれも円墳で、埋葬主体部は木棺・塹穴式石室各1基、横穴式石室2基、不明1基である。これらの古墳は、中世の時期にその墳丘を破壊されている。古代・中世の集落は掘立柱建物を主体とするが、密度は薄い。

8区の報告は今回で2度目であるが、下記の項目のように、弥生時代の墓地関係を除いた遺構・遺物についてとどまった。なお、既報告の弥生時代掘立柱建物、塹穴住居についても、本文中に項目を立てその概要を示した。

- 8区報告項目
- 1 弥生時代の集落
 - 1) 掘立柱建物（既報告）
 - 2) 塹穴住居（既報告）
 - 3) 土坑（本報告）
 - 4) その他（本報告）
 - 2 弥生時代の墓地（未報告）
 - 3 古墳および古墳時代の遺構（本報告）
 - 4 古代・中世の集落（本報告）

区	調査対象面積	調査面積	調査原因	備考	報告
6	3,344m ²	3,207.28m ²	排水路・田面		613集
7	240m ²	245.34m ²	排水路・田面		613集
8	6,172m ²	7,177.98m ²	用水路・排水路・道路・田面	弥生時代墓地は埋め戻し保存	652集・本報告
9	491m ²	505.08m ²	排水路・田面		613集
10	—	1,178.56m ²	田面		613集
11	2,410m ²	2,242.50m ²	用水路・排水路・道路・田面	上面遺構のみ調査。下面は保存	
12	2,268m ²	2,334.12m ²	用水路・排水路・道路・田面		
13	432m ²	401.86m ²	用水路・排水路・道路		
14	644m ²	460.30m ²	用水路・田面		
15	270m ²	316.90m ²	道路		
計	16,271m ²	18,069.92m ²			

第3表 東入部遺跡群第2次調査地区一覧



第4図 第2次調査グリッド配置図（縮尺1/2,000）

2. 弥生時代の遺構と遺物—集落

1) 掘立柱建物

SB0211～SB0223の13棟を検出した。このうちSB0223は柱列（檼？）。建物方位はSB0223が北から4°西にふれる他は、北から10°～23°東にふれている。掘立柱建物の多くは整理の段階で確認したものである。いずれも中期の所産である。各棟の規模など概要については第4表に示した。

2) 壁穴住居

調査区内で円形住居14基 (SC0538、0952、0983、1140、1140A、1155、1156、1200、1220、1221、



第5図 弥生時代遺構分布略図 (縮尺1/500)

番号	区	規模 (間)	棟向	建物方位	梁(cm)		床面積 (m ²)	備考
					全長	柱間(北から)		
SB0211	V-28	1×4	南北	N-10°-E	300	1500 375の等間	45.00	SC0640・1300を切る
SB0212	U-30	1×4	南北	N-12°-E	215	1185 290・300・285・310	25.47	SC1146Aを切り、SB0214・0222に切られる
SB0213	T-30	1×4	南北	N-11.5°-E	350	805 250・280・275	28.17	SC1140・1140A・1373を切る
SB0214	U-30	1×3	南北	N-10°-E	350	800 400の等間	28.00	SB0212, SC0952を切る
SB0215	T-29	1×2	南北	N-13.5°-E	320	500 250の等間	16.00	SC1336・2122を切り、SB0220に切られる
SB0216	V-23	1×2	南北	N-19.5°-E	260	530 265の等間	13.78	SC2020・2120を切る
SB0217	T-28	1×2	南北	N-23°-E	285	450 225の等間	12.82	
SB0218	U-28	1×2	南北	N-10°-E	240	380 190の等間	9.12	SC1792を切る
SB0219	U-28	1×2	南北	N-10°-E	190	250 125の等間	4.75	SC1792に切られる
SB0220	T-29	1×1	東西	N-14°-E	150	450	11.25	SB0215, SC1363を切る
SB0221	U-32	1×1	東西	N-14°-E	210	350	7.35	SB0223を切る
SB0222	U-31	2×3	南北	N-12°-E	420	210 300・300・275	36.75	SB0212を切る
SB0223	U-32	3	東西	N-86°-E	実長920	柱間西から355・285・280		SB0221に切られる。

第4表 弥生時代掘立柱建物一覧

1360、1500、1520、2051)、方形住居31基 (SC0527、0529、0539、0540、0546、0547、0640、0662、0963、0964、0965、1157、1222、1240、1332、1361、1362、1363、1368、1369、1370、1373、1700、1792、1800、1836、1972、2020、2047、2120、2122) のあわせて45基を検出した。前期末から中期末にかけての所産である。各堅穴住居の規模など概要については第5表に示した。

3) 土坑

123基確認した。堅穴住居、溝、柱穴、ピットを除いた遺構を土坑としており、その形態は様々である。貯蔵穴とみられる遺構もあるが、その多くの用途は判断しがたい。また、まとめきれなかった建物等の大型柱穴を含む可能性もある。ここでは遺物を出土した土坑を中心に88基を取り上げた。

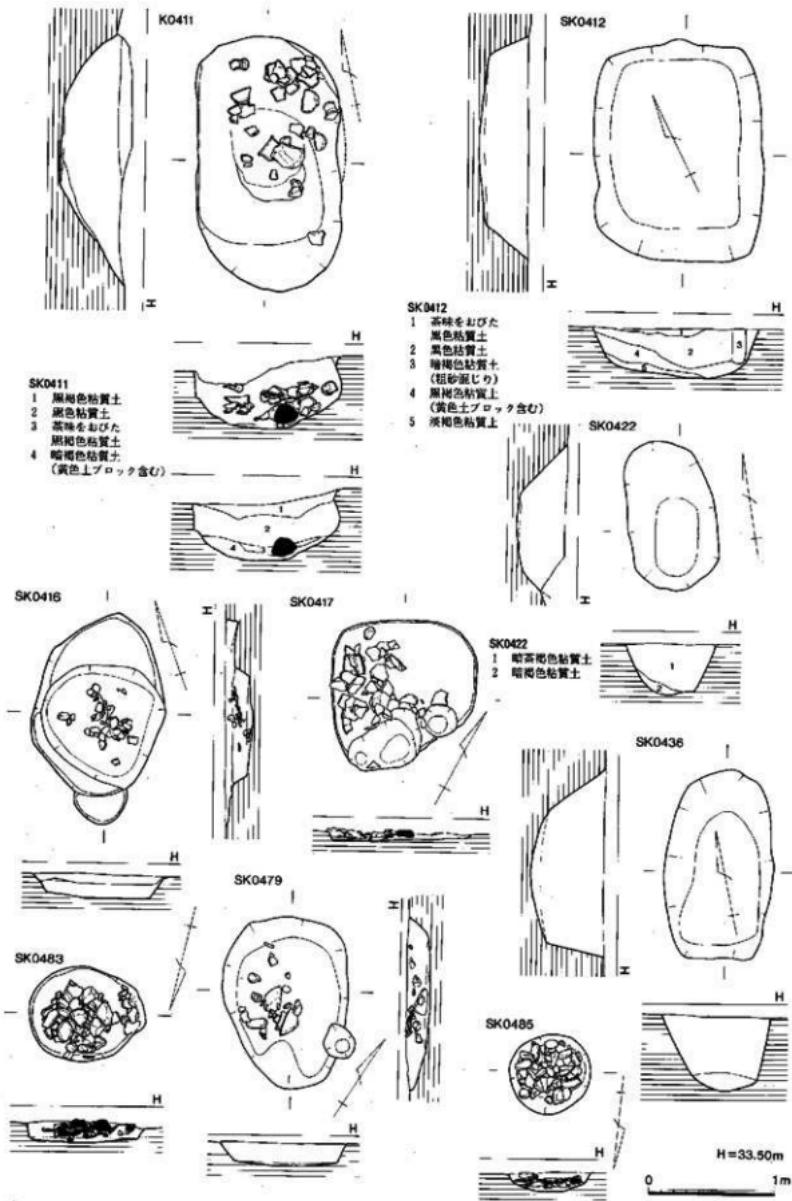
SK0411 (第6図・図版4) X-32区。長軸をほぼ南北にとする隅丸反方形土坑で、長さ2.01m、幅1.15m、深さ57cm。南北両側壁は緩やかに傾斜して底面へ向かうが、東西両側壁はオーバーハング気味となる。底面は径0.6m前後の円形状となる。覆土は4層に分かれ、このうち第2層に多くの遺物が含まれていた。0501号古墳周溝に切られる。

出土遺物 (第7図1~6) 1~5は甕。1は口径27.8cm、器高35.0cm。口縁は短い逆L字状、胴部は上位でわずかに膨らみ、底部は外に張った厚みのある上げ底となる。外面は綴刷毛目、内面は指押さえの後ナデ調整で仕上げる。赤みをおびた黄褐色を呈し、胴外面中位から上に煤が、また内面には炭化物が付着する。2は如意形状口縁の甕を、胴中位で打ち欠いたもの。器台などとして再利用したものか。口径22.3cm、高さ11.0cm。口唇は角張る。外面は細かい斜刷毛目、内面は指ナデの後ナデ調整を行う。胎土には砂粒が多量に混じり、主に淡赤褐色を呈し、外面には部分的に煤が付着する。3~5は底部。台形状の厚い上げ底で、3・4の外面は刷毛目、内面はナデ、5の外面はナデ調整を行う。淡赤褐色を主に呈し、3・4の外面には煤、内面には炭化物が付着する。いずれの甕も胎土に多量の砂粒が混じる。6は甕の底部。わずかに上げ底となる。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。胎土には砂粒が多く、淡灰褐色を呈する。いずれも第2層からの出土である。

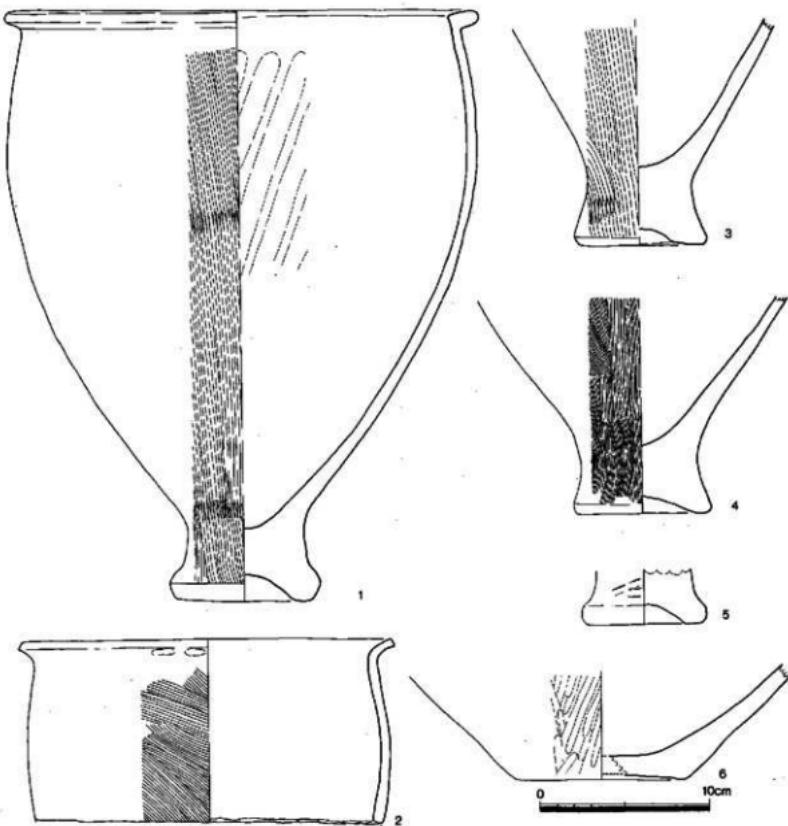
SK0412 (第6図・図版4) X-33区、SK0411の南2mに位置する。長軸を北東-南西にとる長方

番号	区	平面形態	平面規模 (m)	壁高 (cm)	主柱穴 (本)	炉形態	床面積 (af)	備考
SC0538	AA-24	円形	(径5.2)	35			(21)	東北側調査区外、SC0539を切る
SC0952	V-30	円形	9.3×9.0	20	11	隅丸長方形	63	
SC0983	W-23	円形	7.15×6.9	34	10	楕円形	36	
SC1140	T-30	円形	径9.2	24	9	長方形	60	SC1140Aに切られる
SC1140A	T-30	円形	径8.2	24	9	楕円形	50	SC1140を切る
SC1155	S-29	円形	(径9.2)	38			(63)	西側調査区外、SC1156を切る
SC1156	T-32	円形	(径7.2)	30			(34)	西側調査区外、SC1155に切られる
SC1200	T-32	円形	(径6.6)	30			(32)	西側調査区外
SC1220	T-31	円形	9.1×(8.6)	34			(61)	西側調査区外、SC1200と重複、SC1240に切られる
SC1221	T-33	円形	(径10.0)	16			(70)	西側調査区外
SC1350	T-31	円形		34				大半が西側調査区外、SC1220と重複
SC1500	V-25	円形	径6.55	15	7	楕円形	31	
SC1520	W-26	円形	6.7×6.3	3	8	楕円形	33	
SC2051	V-26	円形	(径7.0)	0	9	楕円形	(38)	側壁は削平、炉・柱穴が残る
SC0527	AA-24	隅丸長方形	4.0×2.37	45			7	SK0537・0543に切られる
SC0529	Z-24	隅丸長方形	4.12×2.45	46			9	
SC0539	Z-23	長方形						未記
SC0540	Z-24	不整長方形	4.3×3.6	20				SK0541・0542を切り、SK0536に切られる
SC0546	X-24	隅丸長方形	2.99×2.05	36			5	
SC0547	Y-24	隅丸長方形	(3.75+)×2.72	17		円形	11	SX0200, K0116, D0493に切られる
SC0640	V-29	長方形	3.3×2.25	5	2	楕円形	7	
SC0662	U-33	長方形	5.2×2.7	45		楕円形	12	
SC0963	AA-28	隅丸長方形	3.42×(2.38+)	16			6	
SC0964	AA-26	長方形	3.70×2.4	19	4		7	
SC0965	AA-25	長方形	3.23×2.0	43			5	
SC1157	T-30	長方形	(2.20+)×2.24	20		楕円形		SC1156に切られる
SC1222	T-33			24				大半が西南側調査区外
SC1240	T-31	長方形	4.0×2.45	40			8	SC1220を切る
SC1332	U-32	隅丸長方形	2.7×2.46	28			6	
SC1361	T-31	長方形	3.86×(1.2+)	70				西側調査区外
SC1362	T-29	不整方形	3.45×3.0	18			9	SC1155・1363を切る
SC1363	T-29	隅丸長方形	(2.90+)×2.18	25				SC1362に切られる
SC1368	U-28	隅丸長方形	3.98×3.20	20			10	
SC1369	S-28			27				大半が北側調査区外
SC1370	T-28	長方形	(3.45+)×2.87	40				北側調査区外
SC1373	T-29	隅丸長方形	(2.55+)×1.85	36				
SC1700	U-31	隅丸方形	2.62×2.48	15	4		6	
SC1792	U-28	不整長方形	3.3×2.17	19			5	
SC1800	V-27	隅丸長方形	4.95×(2.4+)	5	2	楕円形		北側削平、SB0211に切られる
SC1836	T-29	隅丸長方形	3.0×2.3	20			5	SC2120に切れる
SC1972	V-24	隅丸長方形	3.06×2.12	23			6	SC1500を切る
SC2020	V-23	隅丸長方形	2.7×1.95	65			4	
SC2047	U-25	隅丸長方形	3.4×(1.3+)	18				西側調査区外
SC2120	V-24	長方形	3.9×(2.1+)	60				西側調査区外、SB0216に切られる
SC2122	T-29	隅丸長方形	(3.0)×1.9	35	2			SC1836を切る

第5表 弥生時代竪穴住居一覧



第6図 SK0411・0412・0416・0417・0422・0436・0479・0483・0485実測図 (縮尺1/40)

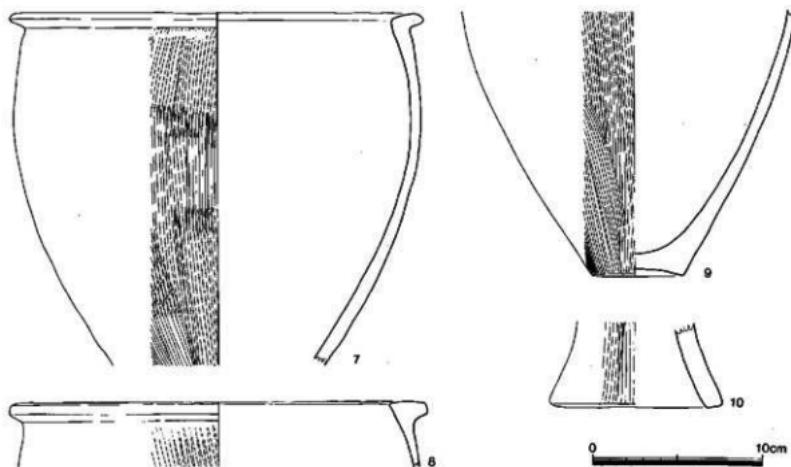


第7図 SK0411出土遺物実測図（縮尺1/3）

形土坑で、長さ1.75m、幅1.32m、深さ39cm。底面は長さ1.33m、幅1.01mの長方形となる。覆土は5層に分かれ、断面三角口縁の甕、広口壺などが出土したが、実測した物はない。

SK0416（第6図・図版4）W-29区。SC0983が埋まつた上に作られた長軸を北東-南西にとる梢円形状の土坑である。長さ1.75m、幅1.32m、深さ39cm。底面は、南北両側壁の深さ5cm付近で平坦面を設け、その中央部が円形状に一段深くなり、長さ1.46m、幅1.01mの底面となる。検出面から底面までの深さは22cm。覆土は黒褐色粘質土。

出土遺物（第8図7～10）7～9は甕。7は外への引き出しが短く、上面が内傾する逆L字状の口縁部をもつ甕で、胴部の上位に最大径をとる。外面は綫刷毛目、内面はナデ調整。くすんだ赤褐色を呈し、外面最大径部分から上に煤が付着する。8は短い逆L字状口縁の小片。口唇部は角張る。外面は刷毛目、内面は摩滅するがナデ調整か。9は胴中位から底部にかけて残存する。底部は上げ底。外面刷毛目調整、内面は摩滅する。淡赤褐色を呈し、外面には煤、内底には炭化物が付着する。以上



第8図 SK0416出土遺物実測図（縮尺1/3）

の壺の胎土には砂粒を多く含む。10は薄手の器台片。外面は刷毛目、内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、淡赤褐色を呈する。いずれも覆土から出土。

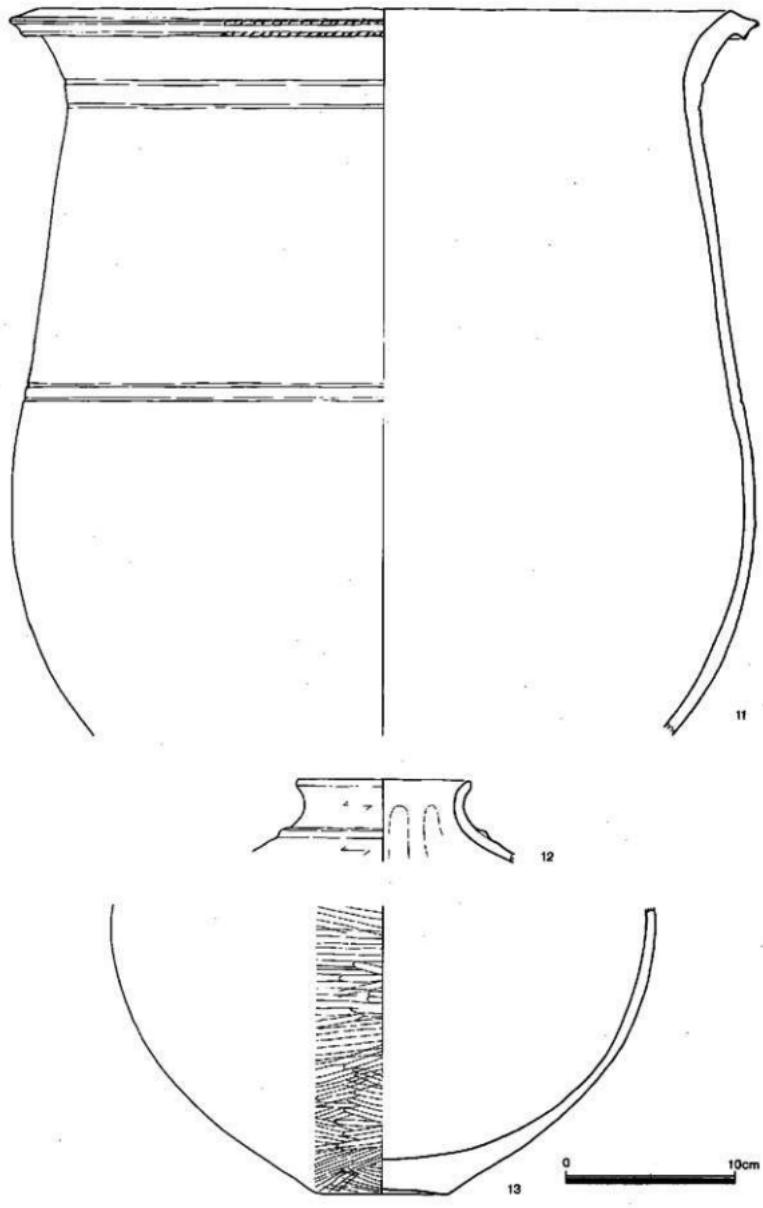
SK0417（第6図・図版4）W-29区、SK0416と同様SC0983の上面で検出した。南側を2つのピットに切られるが、やや東西に広い方形状の土坑である。東西幅1.12m、深さは10cm未満と浅い。覆土は暗褐色土。坑内の西側から南側にかけて土器が集中して出土した。

出土遺物（第9図11～13）11は大壺。張りの小さい胴部から頸部が直線的にのび、上位で丸味をもって反転し、垂れ下がり気味の口縁部となる。口縁端部は角張り、ヘラによる刻目をその上下同時に施す。外面口縁下と胴部との境には、それぞれヘラによる2条の沈線がめぐる。内外面とも板状工具を主に用いたナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多く、暗褐色～明褐色を呈する。外面胴部最大径部分には大きな黒斑がみられる。12・13は壺。12は短く外反する口縁部片で、胴部との境には低い三角突帯をがめぐる。口縁部内面から外面にかけては横のヘラ研磨、内面は指押さえナデを行うが、全体に摩滅気味である。胎土には砂粒が多く、淡黄褐色を呈する。13は張りの大きな胴部とわずかに上げ底の底部をもつ。外面は横のヘラ研磨、内面は摩滅。胎土には砂粒が多く、外面は黒塗り、内面は黄褐色を呈する。同一個体と思われる胴部上位片には三角突帯がめぐっている。出土したのは11・13の破片がほとんどであった。

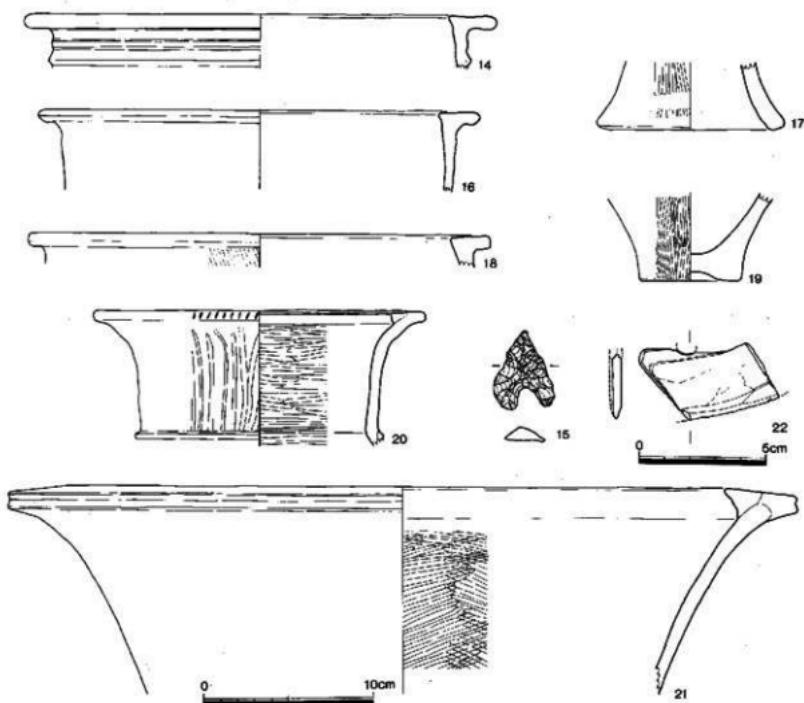
SK0422（第6図・図版4）W-31区。長軸をほぼ南北にとる楕円形土坑で、長さ1.19m、幅0.70m、深さ40cm。東西断面はU字形。覆土は2層に分かれるが、第1層がほとんどを占める。

出土遺物（第10図14・15）14は逆L字状口縁の壺。口縁端部は丸く、口縁下には1条の三角突帯がめぐる。残存部は外面は横ナデ、胴部内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、淡赤褐色を呈する。15は黒曜石の剥片を用いた有脚の石鎧。図裏面は剥片面を多く残す。長さ3.15cm、幅2.4cm、重量2g。ともに覆土からの出土である。

SK0436（第6図）W-32区。長軸をほぼ南北にとる楕円形土坑で、南側壁は直線気味になる。長



第9図 SK0417出土遺物実測図（縮尺1/3）



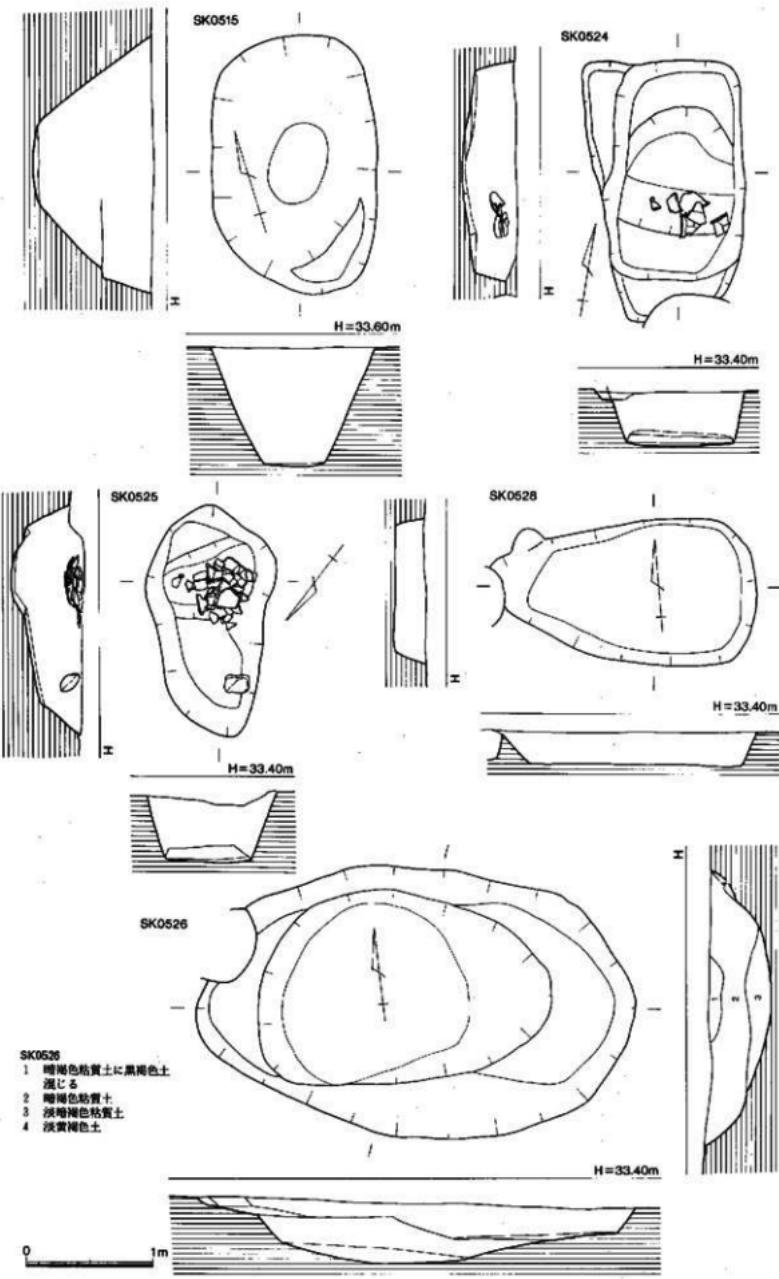
第10図 SK0422・0436・0479・0484出土遺物実測図（縮尺15・22は1/2, その他は1/3）

さ1.19m、幅0.70m、東西断面はU字形となり、深さ60cmをはかる。

出土遺物（第10図16・17）16は逆L字状口縁の甕。内外面ともナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多く、淡赤褐色を呈する。17は薄手の器台片。外面は縦の刷毛目、内面は横ナデ調整。胎土には砂粒が混じり、淡赤褐色を主に呈する。

SK0479（第6図・図版4）W-29区。長軸を北西-南東にとる楕円形状土坑で、長さ1.37m、幅0.99m、深さ18cm。底面はほぼ平坦である。SK0968を切る。

出土遺物（第10図18~21）18・19は甕。18は短い逆L字状口縁の甕片。口唇は角張り気味である。外面は縦刷毛目の後、横ナデ調整で仕上げる。口縁部上面から内面は横ナデ。胎土には砂粒が多く、淡赤褐色を呈する。19は上げ底の底部。外面は縦の刷毛目調整。内底には炭化物が付着する。20・21は鋤先状口縁をもつ壺。20は胴部と頸部の境に三角尖蒂がめぐる。頸部外面はヘラによる縦方向の暗文を施し、内面は横方向のヘラ研磨を行う。口縁部は横ナデ調整で、口唇部にはヘラによる刻目を入れる。胎土は砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。21は復元口径46.8cmをはかる大形の壺で、口縁内側は尖り気味になる。口縁部が横ナデ調整、頸部外面は縦方向、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げる。胎土には砂粒が混じり、暗褐色を呈する。内外面とも黒塗りの可能性が高い。いずれも底面から5~10cm浮いた状態で出土した。



第11図 SK0515・0524・0525・0526・0528実測図（縮尺1/40）

SK0483 (第6図・図版5) X-26区。長軸をほぼ東西にとる楕円形状土坑で、長さ0.90m、幅0.75m、深さ16cm。底面は平坦である。坑内中央と西側に長さ20cm未満の礫の集積がみられる。覆土は暗褐色土。甕、壺、高环の小片が少量出土したが、実測したものはない。

SK0484 Y-26区で検出した不整円形土坑で、径0.90m前後、深さ12cm。坑内西側に礫と土器片などが底面から浮いて出土した。SX0200祭祀溝を切る。

出土遺物（第10図22）頁岩質砂岩を用いた石包丁片。破損面上部には紐穴がわずかに残る。他に甕、壺の小片が少量出土した。

SK0485 (第6図・図版5) Y-26区で検出した円形土坑で、径0.64m、深さ15cm。底面は中央に向かって深くなる。覆土は暗褐色土。坑内には長さ10cm前後の小礫が充満し、その間から鋸先状口縁をもつ甕、平底の壺、鉢などの破片が少量出土したが、実測したものはない。

SK0515 (第11図・図版5) W-28区で検出した長軸を北東-南西にとる楕円形状土坑で、長さ2.06m、幅1.31m、深さ95cm。南側壁の深さ40cmに小さな平坦面を設け、底面は長さ0.66m、幅0.43mの小さな楕円形となる。東西断面はU字形に近い。覆土は暗褐色土で、拳大の礫を多く含む。中期の甕、壺片などが少量出土した。

SK0524 (第11図・図版5) Z-24区。長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形土坑で、西北から南側にかけて深さ5cm前後の浅い落ち込みと切り合う。長さ1.75m、幅1.02m。深さは32cmでいったん平坦面を作り、そこから底面中央がさらに10cm前後深くなる。覆土は暗褐色粘質土。底面から20cm程度浮いた状態で甕片などが出土した。

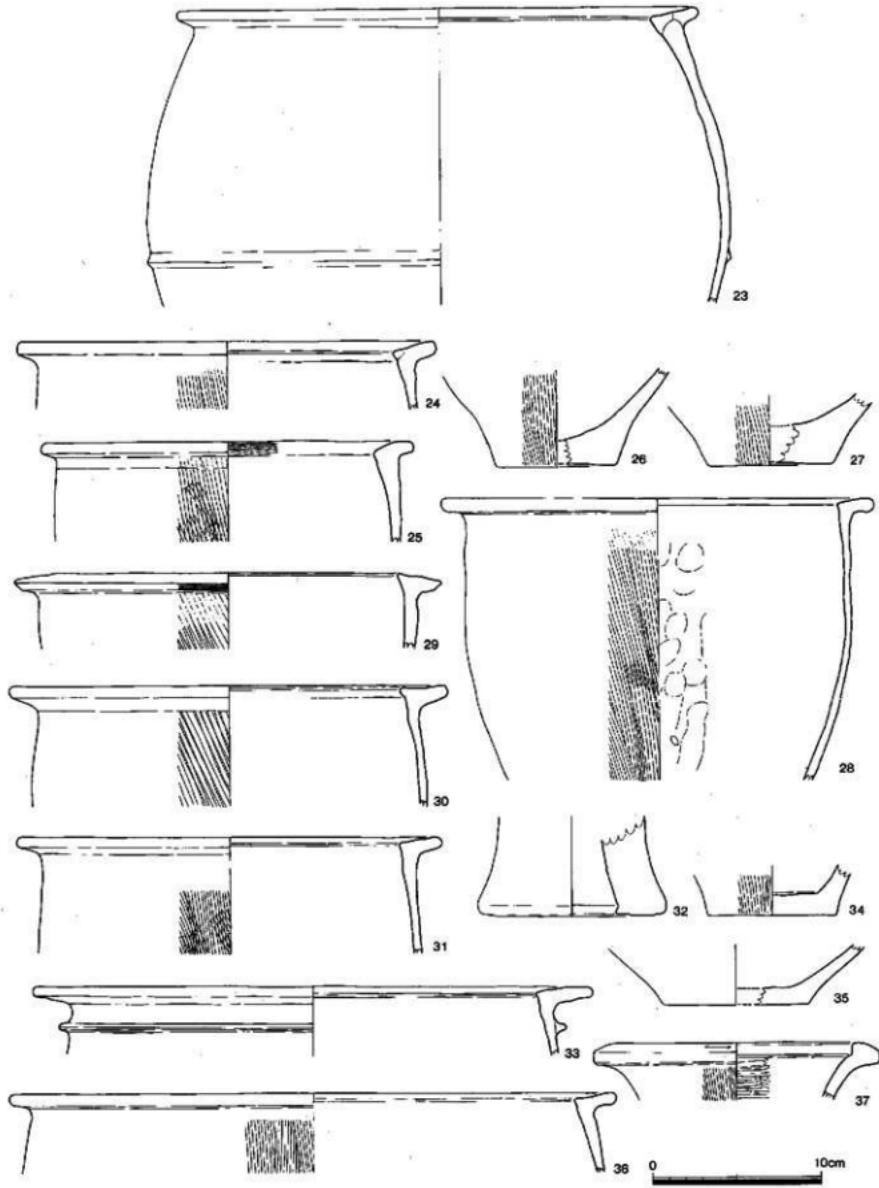
出土遺物（第12図23～27）いずれも甕である。23は復元口径30.8cmの中形甕で、口縁部は短い逆L字状となり、その上面は内傾する。胴部は張りがあり、最大径部分よりもやや下に三角突帯1条がめぐる。口縁部が横ナデ、他はヘラナデ調整。胎土には砂粒が多く、淡黄褐色を呈する。24・25は上面が内傾する逆L字状口縁片。外面は刷毛目、内面はナデ調整で主に仕上げている。26・27はやや厚みがある平底の底部。外面は刷毛目、内面はナデ調整。ともに外面には煤が付着する。24～27はいずれも胎土に砂粒が多く、黄みをおびた淡赤褐色を主に呈する。

SK0525 (第11図・図版5) Z-24区。長軸を北西-南東にとる不整楕円形土坑で、長さ1.83m、幅1.03m。深さ35cm前後で平坦面を作り、その南側寄りがさらに一段深くなり底面となる。検出面から底面までの深さ56cm。覆土は暗褐色粘質土。底面から40cmほど上で土器がまとまって出土した。

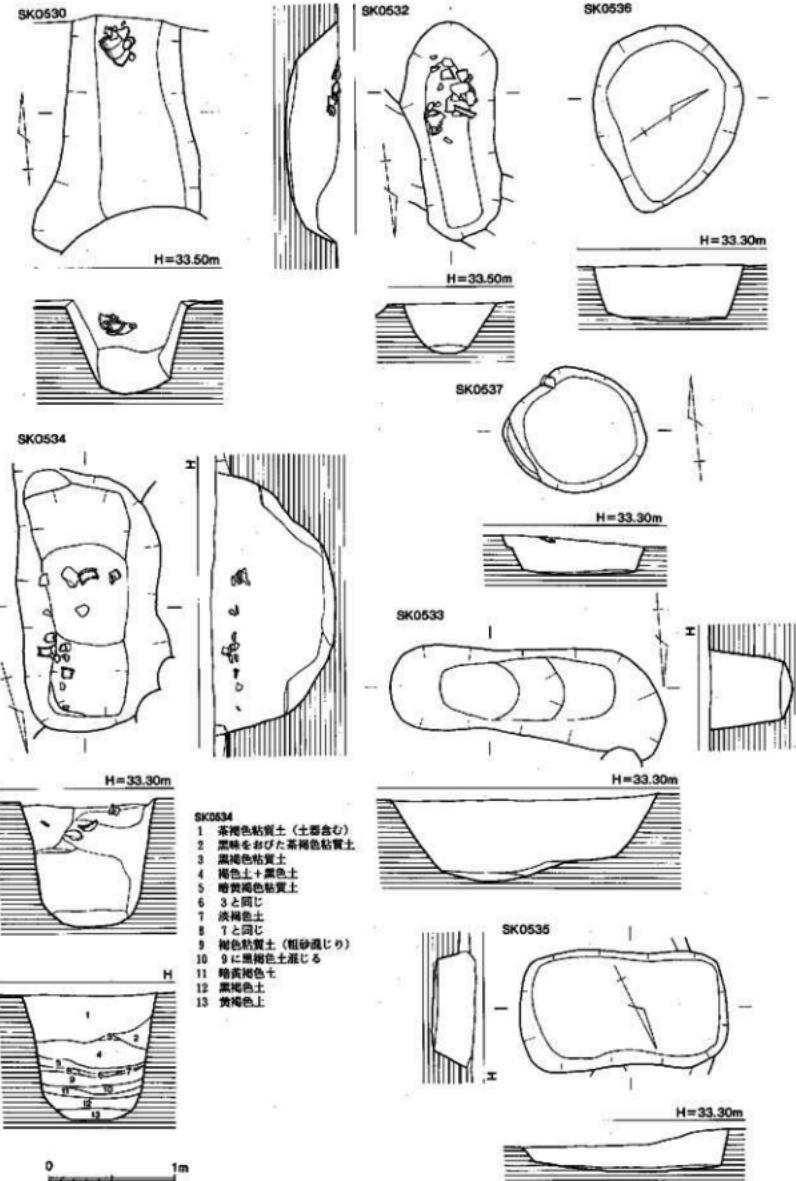
出土遺物（第12図28～32）28～31は逆L字状口縁をもつ甕。28・31の口縁上面はやや内傾し、30は上面がやや中くぼみとなる。29の口縁上面は外傾し、端部は角張る。いずれも胴部外面は継の刷毛目、内面は28が指押さえの後ナデ、他はナデ調整で仕上げる。いずれの胎土にも砂粒が多い。28の復元口径25.7cm。外面には煤が付着し、内面には初あるいは小種子の圧痕がある。32は厚手の器台。白色砂粒と微細粒が混じった胎土で、内外面ともナデ調整で仕上げている。

SK0526 (第11図・図版5) Y-23区。長軸をほぼ東西にとる楕円形状土坑で、長さ3.47m、幅2.12m。東側壁の深さ20cm前後、西側壁の深さ15cm前後に平坦面を作り、そこから一段下がって径1.30～1.50mの不整円形の底面となる。検出面から底面までの深さ48cm。覆土は4層に分かれるが、大半を占める第2・3層はほぼ同一層である。

出土遺物（第12図33～35）33・34は甕。33はわずかに上面が内傾する逆L字状の口縁部片。外面口縁直下にはやや高めの三角突帯が1条めぐる。残存部は横ナデ調整。胎土には砂粒が少なく、赤みをおびた黄褐色を呈する。口縁上面には黒斑がある。34は底部片。平底で、外面は刷毛目調整を行う。35は甕の底部。器表は全体に摩滅する。胎土には砂粒を含み、黄褐色を呈する。



第12圖 SK0524・0525・0526・0528出土遺物実測図（縮尺1/3）



第13図 SK0530・0532・0533・0534・0535・0536・0537実測図(縮尺1/40)

SK0528 (第11図) Z-24区。長軸をほぼ東西にとる橢円形状土坑で、西側に向かい幅が狭くなる。長さ2.10m前後、最大幅1.16m、深さ25cm。底面は平坦である。

出土遺物 (第12図36・37) 36は逆L字状口縁の甕で、口縁上面はやや内傾する。外面は刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整。外面には煤が付着する。胎土には砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。37は壺口縁部片。外反する口縁端は折り返され肥厚する。外面は継刷毛目の上にヘラによる縦の暗文を施し、口縁上面と頸部内面は横のヘラ研磨を行う。胎土は砂粒を含み、外面淡赤褐色を呈する。

SK0530 (第13図・図版6) Z-23区。北側が調査区外にのび、南側はSK0543に切れ全形を確認できないが、北側底面が上がり気味になり、また南側では側壁が東にまわることから南北に長軸をとる長方形形状の土坑としてとらえた。東西幅は1.10m前後、深さは74cmで、東西断面はU字形状になる。底面から45cm浮いた状態で甕などが出土した。

出土遺物 (第14図38~40) すべて甕である。38は断面三角形の口縁部、張りのない胴部、台形状の厚みのある上げ底をもつほぼ完形の甕で、口径21.5cm、器高28.5cmを有する。外面は刷毛目調整を行い、胴最大径以下には部分的に研磨状のヘラナデを施す。内面はヘラナデ。外面は暗褐色で煤が付着し、内面にも炭化物が付着する。胎土には砂粒が多い。39は38と同様の底部、焼きがあまい。外面には煤が付着する。40は台形状の厚みのある平底。外面胴部と底部の境は指押さえ、他はナデ調整で仕上げる。内底には炭化物が付着する。

SK0532 (第13図・図版6) W-33区。長軸をほぼ南北にとる橢円形状の土坑である。長さ1.73m、幅0.75m、深さ42cm。底面はほぼ平坦で、長方形に近い。覆土は炭化物の混じった黒褐色土。坑内南側上面で甕1個体が出土した。501号古墳の周溝に切られる。

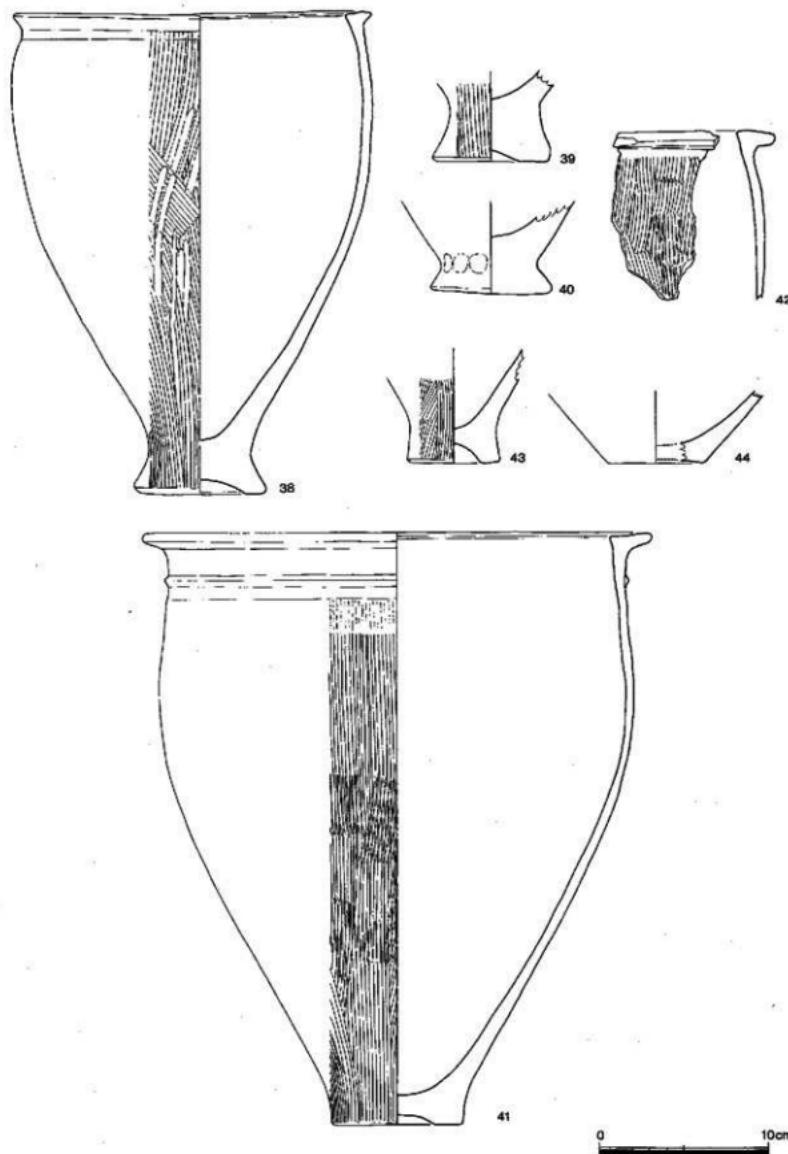
出土遺物 (第14図41) 逆L字状口縁の甕である。完形には全体の破片が残るが、各片の摩滅が著しく完全には接合ができない。口径30cm前後、器高35.0cm。口縁上面は内傾し、口縁直下には低い三角突帯がめぐる。底部は中央が上げ底となる。外面突帯から下は継刷毛目、口縁部は横ナデ調整を行うが、内面は摩滅する。胎土には砂粒が多い。外面には煤が、内底には炭化物が付着する。

SK0533 (第13図・図版6) Y-24区。東西に長軸をとる長橢円形状の土坑で、長さ2.16m、幅0.80mを有する。西側壁の深さ45cmでいったん平坦面を作り、そこから東に一段深くなり底面となる。検出面から底面までの深さは64cmで、この部分での南北断面はU字形状である。覆土は黒褐色土。

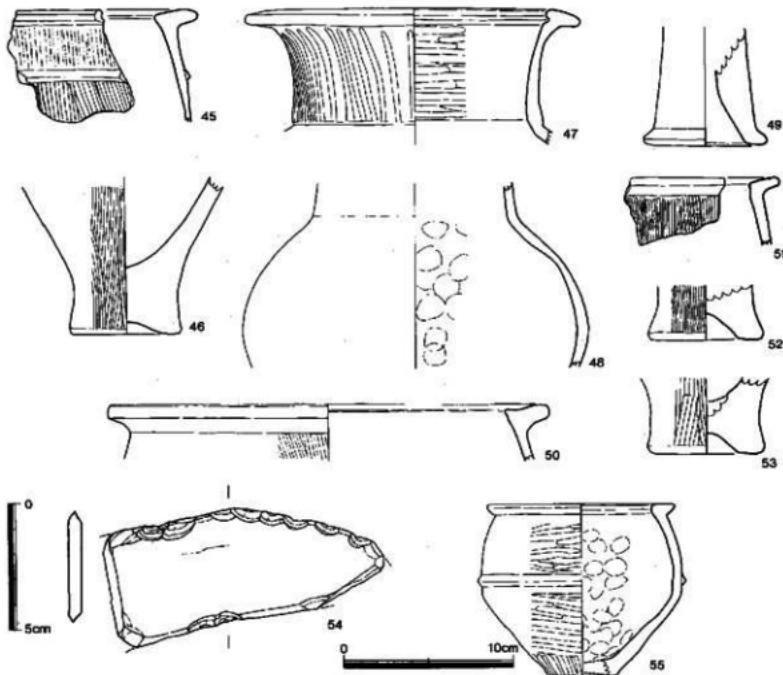
出土遺物 (第14図42~44) 42・43は甕。42は短い逆L字状口縁部をもつ。胴部外面は継刷毛目、内面はナデ、口縁部は横ナデ調整で仕上げる。43は上げ底の底部。外面は刷毛目調整を行うが、二次焼成で器表が剥落する。内底には炭化物が付着する。44はわずかに上げ底となる壺の底部。外面は摩滅、内面はナデ調整。胎土には砂粒が多い。胴部から外底にかけて黒斑がある。いずれも覆土から出土。

SK0534 (第13図・図版6) Z-23区。長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形で、長さ2.07m、幅1.08m。北側壁では深さ55cm、南側壁では深さ35cmまで傾斜が急で、その東側部分にそれぞれ小さな平坦面を作る。そこから傾斜は緩やかとなり、長さ0.80m、幅0.65mの不整長方形の底面にいたる。検出面から底面までの深さ98cm。東西断面はU字形状となる。覆土はほぼ水平堆積で、第1層から遺物がまとまって出土した。SK0535、SK0543に切られる。

出土遺物 (第15図45~49) 45・46は甕。45はやや上面が内傾する逆L字状口縁をもち、口縁下には低い三角突帯がめぐる。胴部外面は刷毛目で、突帯より上は口縁部とともに横ナデ調整を行う。内面はナデ調整。46は厚手の底部で、外底はわずかに上げ底とし、ヘラナデ調整を行う。外面は刷毛目、内面はナデ調整で炭化物が付着する。47・48は甕。47は鋤先状口縁部をもつ。頸部は直立気味で、胴部との境には段が付く。内外面とも横のヘラ研磨で、頸部外面はさらにヘラによる縦方向の暗文を施す。



第14図 SK0530・0532・0533出土遺物実測図（縮尺1/3）



第15図 SK0534・0536・0537出土遺物実測図（縮尺54は1/2, その他は1/3）

す。胎土には砂粒が多い。全体に摩滅するが、丹塗りの痕跡が認められる。48は胴の張った壺で、外面は摩滅、剥離が著しい。胴部内面は指押さえの後ナデ調整。胎土には多量の砂粒を含む。49は厚手の器台。脚端部は外に引き出す。外面はヘラナデ、内面はナデ調整。胎土には砂粒が混じる。

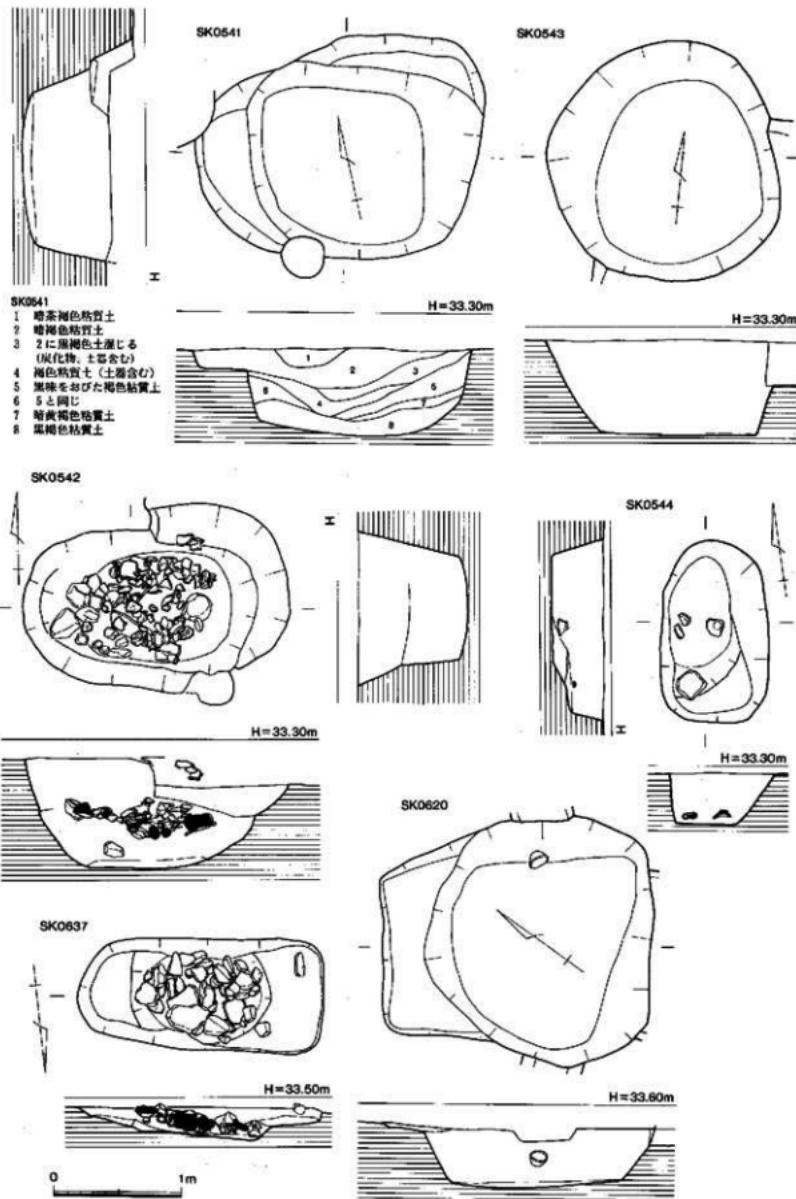
SK0535（第13図）Z-23区。SK0534の西側壁を切る長方形の土坑である。長軸をほぼ東西にとり、長さ1.62m、幅0.95m、深さ33cmをはかる。側壁はほぼ垂直、底面は平坦である。覆土から逆し字状口縁甕、厚手の器台などの破片が出土したが実測した物はない。

SK0536（第13図）Z-23区。長軸をほぼ東西にとる東側壁が尖り気味の不整脩円形土坑である。長さ1.50m、幅1.18m、深さ44cmをはかる。底面は平坦となる。SK0534・0542を切る

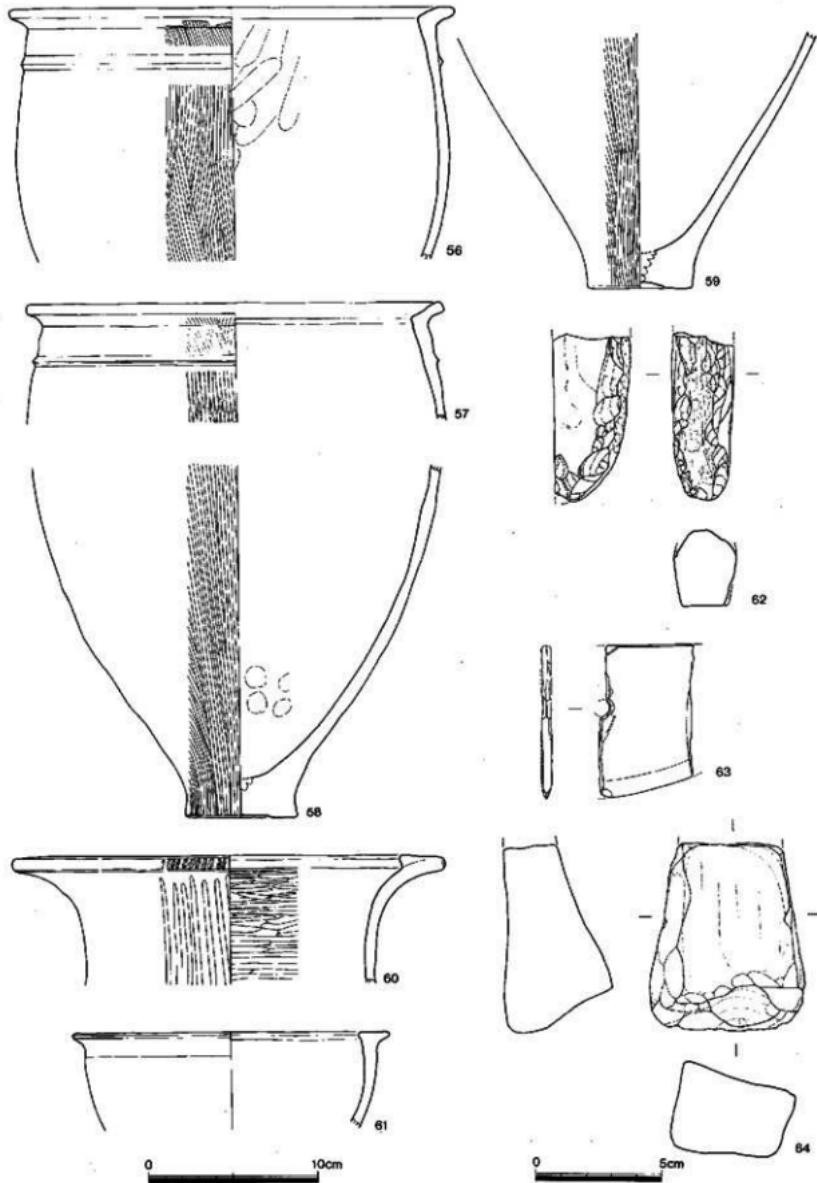
出土遺物（第15図50～54）50～53は甕。50・51は上面が内傾する逆し字状口縁片で、50の上面はさらに中くぼみとなる。胴部外面はともに刷毛目、内面はナデ調整。51の胎土は比較的精良である。52・53は底部。厚みのある上げ底で、外面は刷毛目調整を行う。53の内底には炭化物が付着する。54は石錆。刃部、背部とも二次的な剥離や欠損が著しい。残存長11.0cm、幅4.6cm。頁岩質砂岩製。いずれも覆土からの出土である。

SK0537（第13図）Z-23区。SK0530の南側に位置し、SC0529、SK0543を切る東西幅1.13m、深さ31cmの円形状土坑である。西側壁の深さ10cmに小さな平坦面を設ける。底面は平坦。

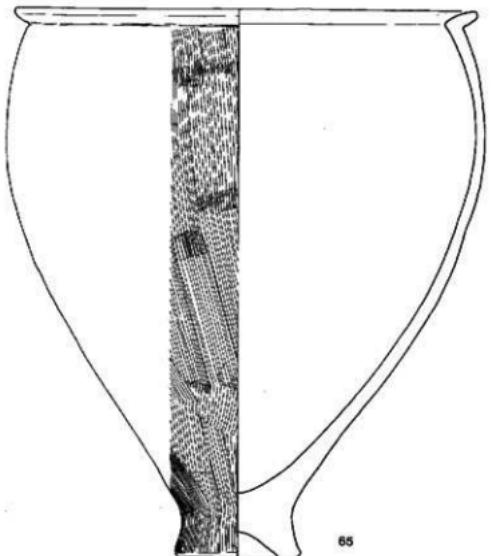
出土遺物（第15図55）復元口径11.0cm、器高10.2cmの鉢。胴部最大径部分に三角突帯がめぐり、



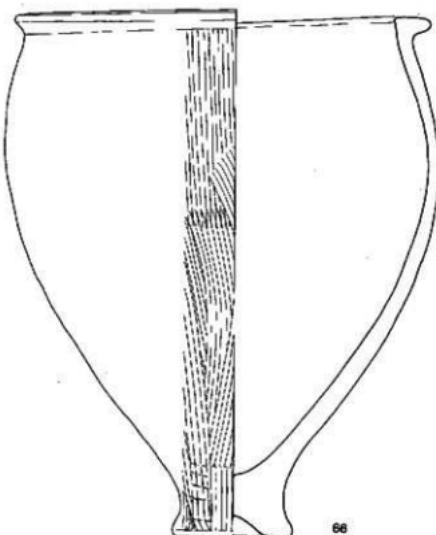
第16図 SK0541・0542・0543・0544・0620・0637実測図 (縮尺1/40)



第17図 SK0541出土遺物実測図（縮尺62～64は1/2, その他は1/3）



65



66

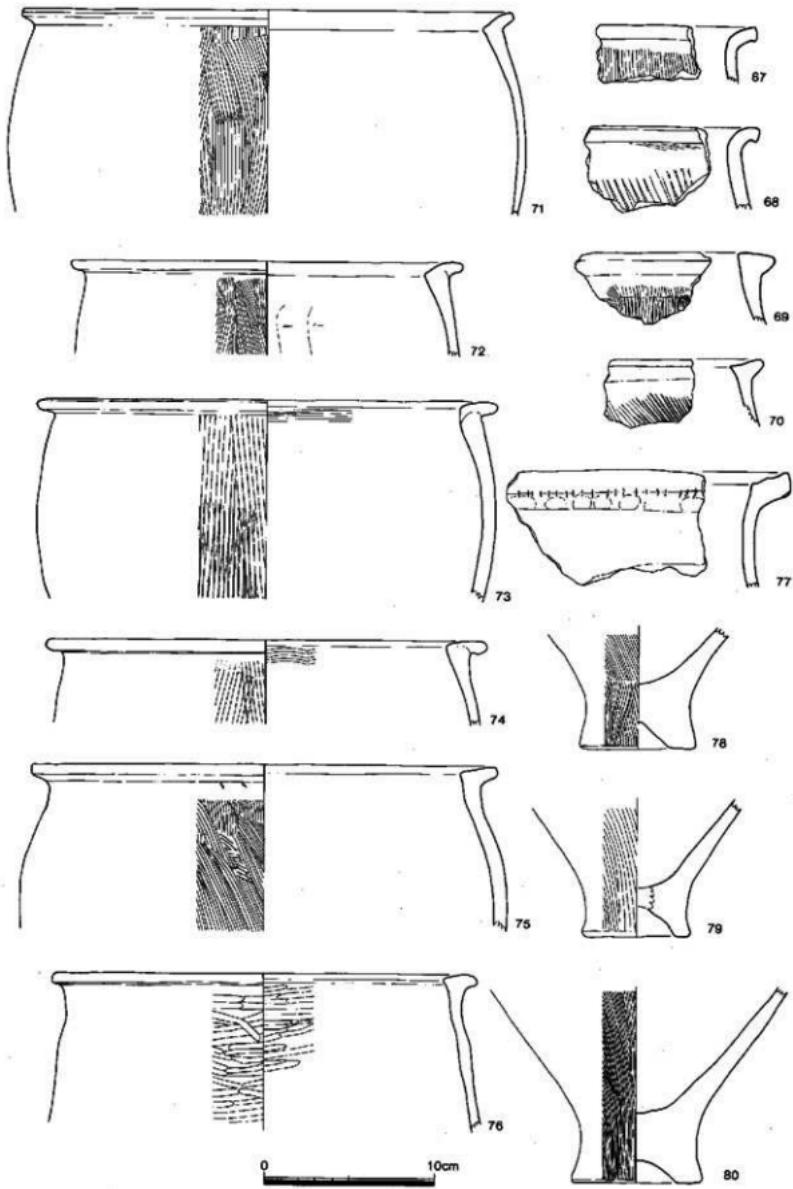
0 10cm

第18図 SK0542出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

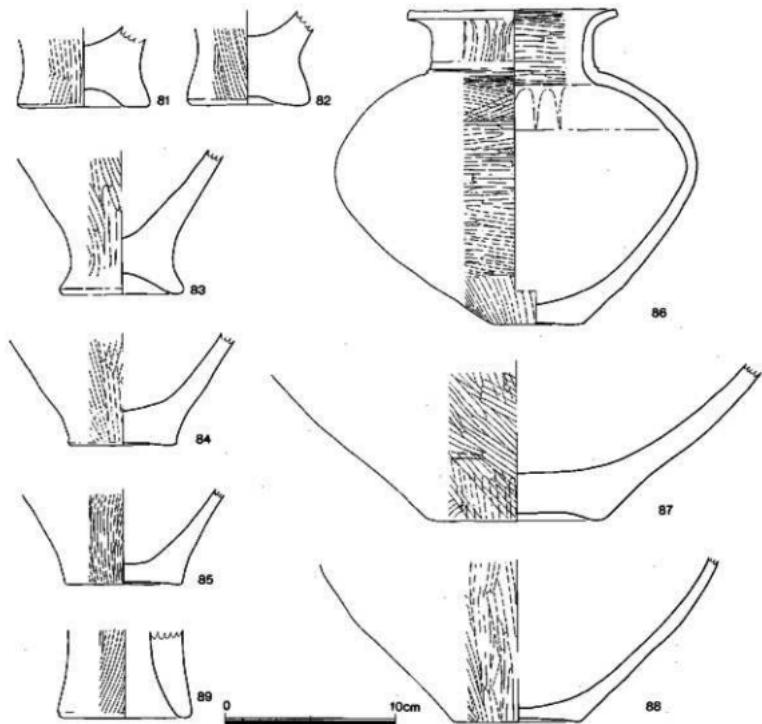
口縁部は短く外反して、上面が平坦になる。胴部外面は底部付近が縦方向、他は横方向のヘラ研磨。口縁部横ナデ、内面は指押さえの後ナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多く、外面黄褐色、内面黒色を呈する。北側上面から出土。他に覆土から、逆し状口縁瓦片などが出土した。

SK0541(第16図) Z-23区。長軸をほぼ東西にとる不整形土坑で、長さ2.24m、幅1.79m。北側壁と西側壁の深さ15cmに平坦面を設け、そこから一段下がり、一辺1.25m前後の方形形状の底面となる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは49cmをはかる。覆土は8層に分かれるが、このうち第1~4層に遺物を多く含んでいた。SC0540に切られる。

出土遺物(第17図56~64) 56~59は甕。56・57はくの字状口縁部の直下に低い三角突帯がめぐる。外面はともに刷毛目調整で、57は口縁下突帯部分までを横ナデ調整で消す。内面は56が指の押さえナデ、57は摩滅して不明。57の外面は煤の付着が著しい。58・59は胴下半部から底部。外底部は中央がわずかに上げ底になる。外面は刷毛目調整、58の内面は指ナデ、59は摩滅して不明。ともに外面には煤が、内底には炭化物が付着する。60は鋸先状口縁の壺。口唇部にはヘラによる刻目を施す。頸部外面はヘラによる縦方向の暗文、口縁部上面から内面にかけては横のヘラ研磨。胎土には粒の揃った砂粒を含み、暗赤褐色を呈する。61は鉢。口縁部は短く外に



第19図 SK0542出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

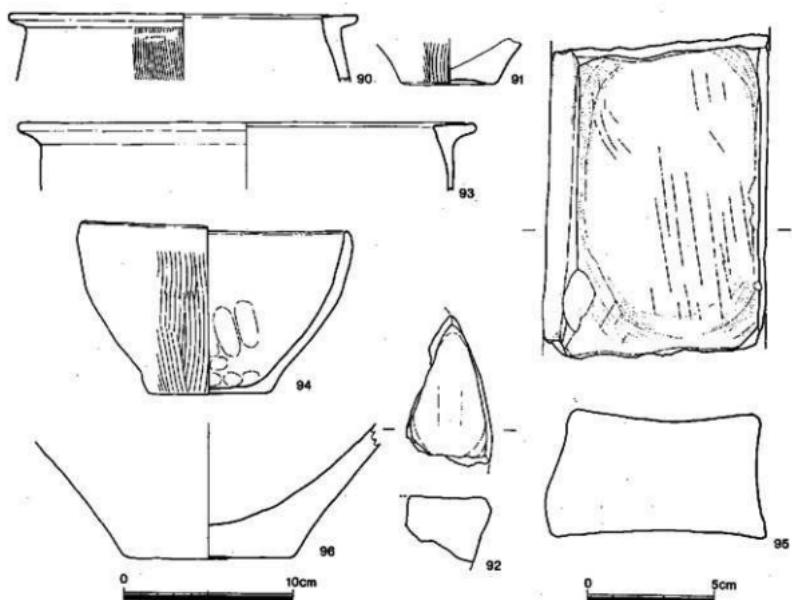


第20図 SK0542出土遺物実測図3（縮尺1/3）

引き出し、上面は平坦となる。内外面ともナデで調整で仕上げる。微砂粒を含んだ胎土で、くすんだ黄褐色を呈する。62は柱状片刃石斧片。背部を中心に二次剥離が著しい。凝灰質安山岩ホルンフェルス製。63は現存幅6.0cmの石包丁片。両刃で、背部は直線的になる。径0.8cm前後をはかる両側穿孔の紐かけ穴が残存する。頁岩質砂岩製。64はやや粗い砂岩を用いた砥石片。4側面を磁面として利用する他、小口部分にも穴状に研がれた部分がある。上部は研ぎで薄くなり折損する。いずれも覆土からの出土。

SK0542 (第16図・図版6) Z-23区。SK0541の西南に位置し、東側をSC0540に、また上部をSK0536に切られる。長軸をほぼ東西にとる楕円形状土坑で、長さ2.10m、幅1.50m前後をはかる。側壁は深さ40cm付近で北西側を除いて段がつき、長さ1.17m、幅0.88mの楕円形状の底面にいたる。検出面から底面までの深さは87cm。坑内中位部分で遺物が疊とともにまとめて出土した。

出土遺物 (第18~20図65~89) 65~85は壺。番号が前後するが、67・68は如意形口縁部片。口唇は角張る。69は断面三角形の口縁部片。66も同様の口縁部をもつが、69に比べ外への引き出しが大きく、上面も平坦になる。ほぼ完形の壺で、口径24.5cm、器高31.2cmをはかる。底部は大きな上げ底となる。外面中位より上に煤が付着し、内面中位より下に著しい焦げつきがある。65~72は内面に稜を



第21図 SK0543・0544・0620・0637出土遺物実測図 (縮尺92・95は1/2, その他は1/3)

作って短く外反する口縁部をもつ。65は接合しない同一個体の口縁部と胴下半部を図上で復元したものの。復元口径27.0cm前後、器高32~33cm。底部は厚みのある上げ底となる。外面中位を中心に煤が付着する。73~75は短い逆し字状の口縁部をもつ。口唇部は丸くおさめるものが多い。以上の囲は外面を刷毛目、内面をナデ調整で仕上げ、外面には煤が付着するものが多い。76の口縁部は73~75に近いが、外面および内面上位を横のヘラ研磨で仕上げている。外面には煤が付着する。77は大形壺の口縁部片で、口唇部下端にはヘラで刻目を施す。主にナデ調整を行う。口唇部付近には丹の痕跡がみられる。78~83は台形状の厚みのある底部で、82を除き大きな上げ底となる。84・85は平底で、わずかに上げ底となる。83の外面がヘラ研磨、他は縦の刷毛目調整。内面はすべてナデ調整で、内底には焦げつきが残る。86~88は壺。86は扁球の胸部から頸部が直立し、口縁部が大きく外反する。胴部と頸部の間に作り出しの突帯がめぐる。底部は厚めの平底。外面および口頸部内面はヘラ研磨を行い、頸部外面にはさらに縦の暗文を施す。ヘラ研磨の部分は黒塗りであろう。胴部内面は上位が指押さえ（しばり）、下位が強いヘラナデ。胎土には砂粒が混じる。87・88は底部。87は大形壺の厚みのある上げ底、88は薄い上げ底となる。ともに外面はヘラ研磨、内面はナデ調整を行う。胎土には砂粒が多い。89は厚手の器台。外面刷毛目調整、内面ナデ。

SK0543 (第16図) Z-23区。円形状土坑で、南北径1.90m、深さ75cm。底面は平坦となる。

出土遺物 (第21図90~92) 90・91は壺。90は逆し字状口縁をもち、外面は刷毛目、内面はナデ調整。91は上げ底の底部で、外面刷毛目調整、内面器表は剥離する。ともに胎土に砂粒を含み、外面には煤が付着する。92は細かい砂岩製の砥石。破損品で、3面に砥面が残る。覆土からの出土。

SK0544 (第16図) Z-24区で検出した長軸をほぼ南北にとる梢円形状土坑で、長さ1.44m、幅0.85m。南側壁の深さ30cmで平坦面を作り、さらに北側に下がり、長さ0.87m、幅0.48mの梢円形底面となる。検出面から底面までの深さ42cm。覆土は茶褐色粘質土。SX0545祭祀ビットを切る。

出土遺物 (第21図93) 逆L字状口縁の甕である。口縁部に比べ胴部が薄い。外面は刷毛目の後横ナデ、内面はナデ調整。外面から内面上端部にかけて煤が付着する。覆土からの出土。

SK0620 (第16図) X-32区で検出した長軸を北東-南西にとる不整長方形土坑で、長さ1.98m、幅1.77m、深さ45cm。底面はほぼ平坦である。北西側に幅1.5m前後、深さ5cmほどの平坦面が取り付く。覆土は暗褐色土。SK0973に切られる。

出土遺物 (第21図94・95) 94は底面から15cmほど浮いた状態で出土した完形の鉢。口縁部は直立気味になり、端部は丸くおさめる。外面刷毛目、口縁部は横ナデ、内面上半部は斜めのナデ、下半部指押さえの後継のナデ調整を行う。外面下半には帯状の黒斑がある。胎土には少量の砂粒を含み、焼成良好、淡黄褐色を呈する。口径15.8cm、器高10.2cm。95は日の細かい砂岩製の砥石。両端を欠くが、断面長方形の4面が砥面としてよく利用され、中くぼみの状態となる。

SK0637 (第16図・図版6) V-28区。長軸をほぼ東西にとる東側壁が丸味を帯びた長方形土坑である。長さ1.94m、幅0.89m。東西両側壁の深さ15cm付近に平坦面を設け、そこから中央が一段深くなる。底面は東から西に傾斜し、検出面からの深さは26cm。この中央部分の底面から上面にかけて疊が集積していた。覆土は黒褐色土。

出土遺物 (第21図96) 瓦の底部である。平底で、器壁は厚い。胎土には砂粒が多い。器表の摩滅が著しく、調整は不明。

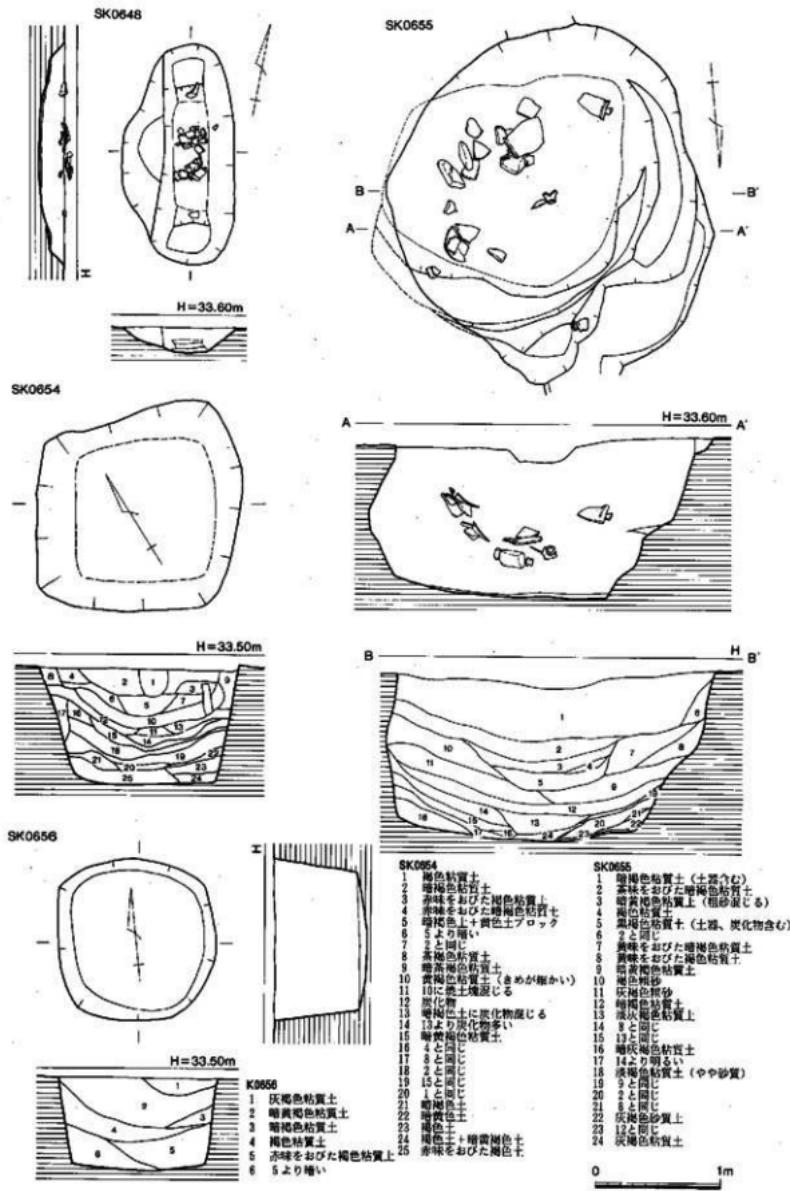
SK0648 (第22図・図版7) U-29区で検出した長軸を北西-南東にとる西側が膨らんだ梢円形状土坑である。長さ1.75m、幅0.89m。膨らんだ西側壁は深さ10cmで段ができ、また南北両側壁は深さ10cm付近で平坦面を作り、中央が一段下がって長さ0.87m、幅0.28mの長方形底面となる。検出面から底面までの深さ19cm。覆土は茶褐色粘質土。中央部分の上面から遺物が出土した。

出土遺物 (第23図97~101) すべて甕である。97~100は断面三角形の口縁をもつもので、100の口縁部は他に比べやや外に長くなる。97・98の口縁部下には低い三角突帯がめぐる。98を除き、口縁端部および胴部突帯にヘラで刻目を施す。98は器面が摩滅し調整不明。他は口縁部が横ナデ、胴部内外面はナデ調整で仕上げる。外面には煤が付着する。101は台形状に張った上げ底の底部。全体に摩滅気味である。外底部には初圧痕がみられる。

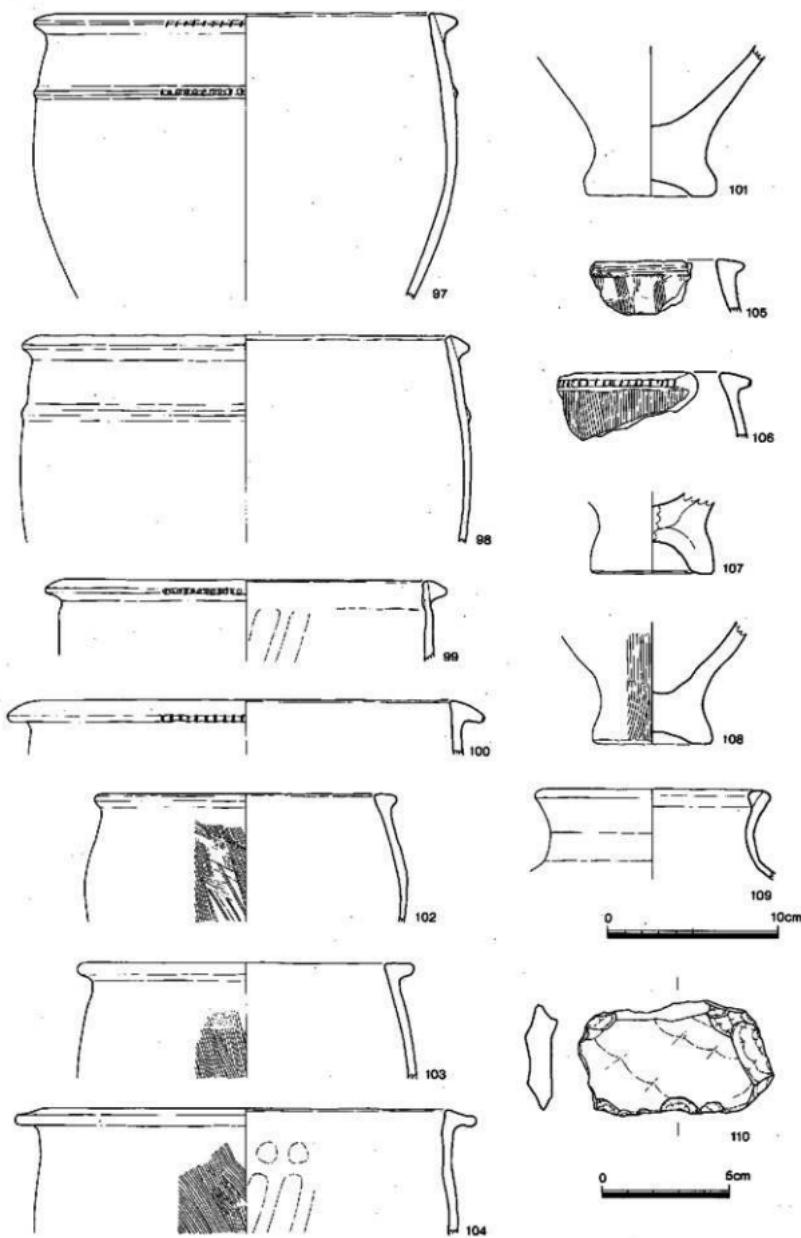
SK0654 (第22図・図版7) V-29区で検出した方形状土坑で、東西幅1.60m、深さ94cm。側壁は垂直に近く、底面は平坦となる。覆土は25層に分かれ、第1~7層、第8・9層、第10層、第11~14層、第15~25層の5層に大別できる。

出土遺物 (第23図102~110) 102~108は甕。うち102・105・106は断面三角形の口縁部をもつ。106の口唇部にはヘラで刻目を施す。103・104は逆L字状口縁に近いが、103は外への引き出しが小さく、104は上面が外傾する。107・108は底部。台形状に張った厚みのある上げ底である。以上の甕の外面は108がナデ、他は刷毛目、内面は主にナデ調整を行う。102~104・106の外面には煤が、また底部片の内面には炭化物が付着する。109は甕。頸部が緩やかに外反し、口縁部は端部内面に粘土紐が貼り付き肥厚する。残存部はヘラ研磨で、外面は丹塗りとみられる。胎土には砂粒が多い。110は玄武岩の剥片を用いた石器。下辺に刃を作り出す。長さ7.7cm、幅4.5cm。いずれも覆土からの出土。

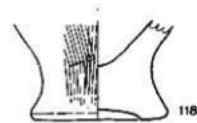
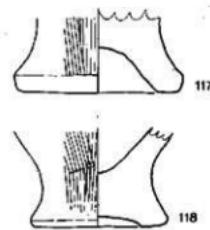
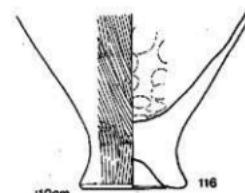
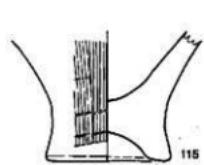
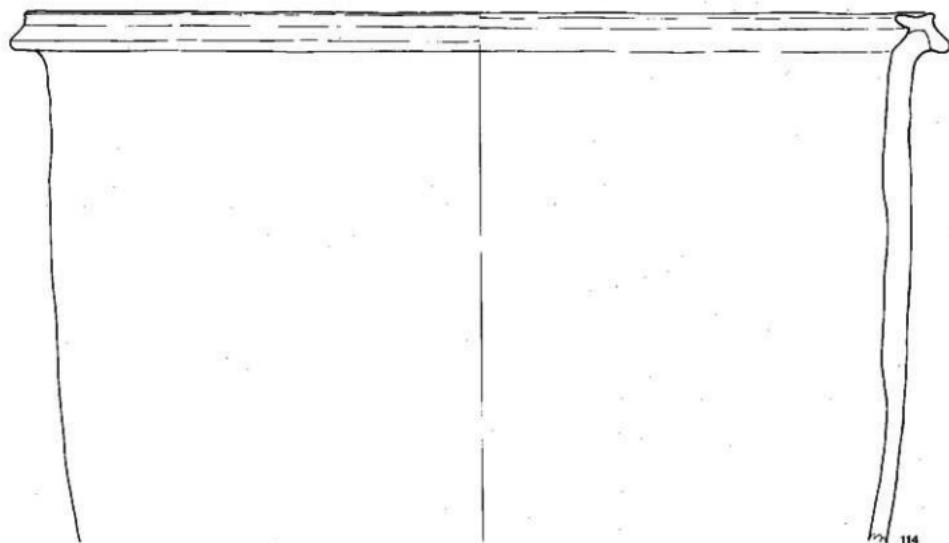
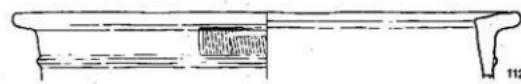
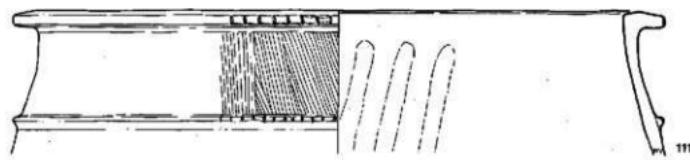
SK0655 (第22図・図版7) U-29区で検出した不整円形の土坑で、東西幅は2.60mをはかる。西から北側壁には3段にわたる平坦面があり、東側壁はオーバーハングとなる。底面は東西長1.80m、



第22図 SK0648・0654・0655・0656実測図 (縮尺1/40)



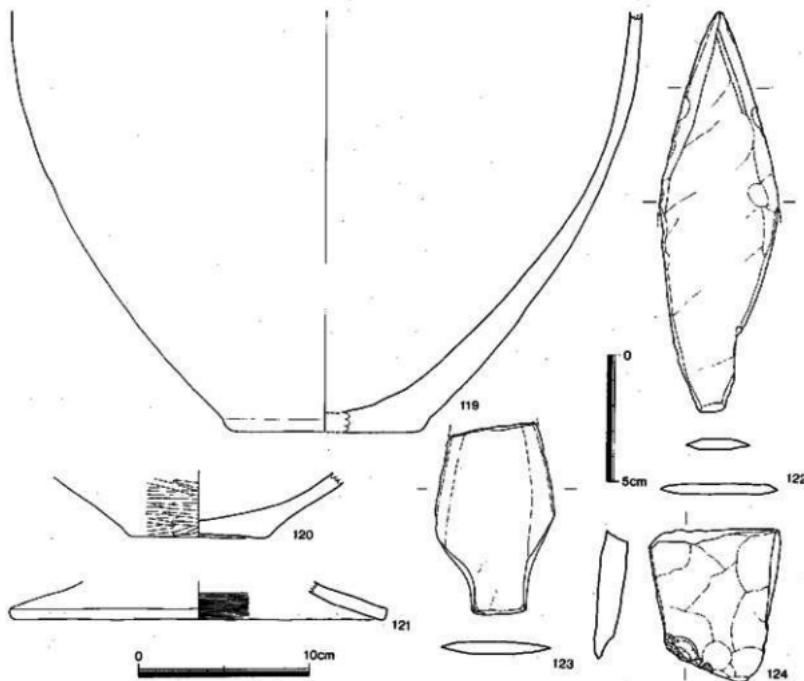
第23図 SK0648 • 0654出土遺物実測図 (縮尺110は1/2, その他は1/3)



0

10cm

第24図 SK0655出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

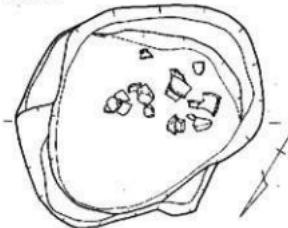


第25図 SK0655出土遺物実測図2 (縮尺122~124は1/2, その他は1/3)

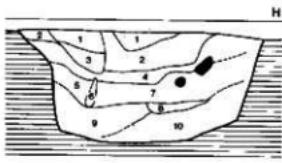
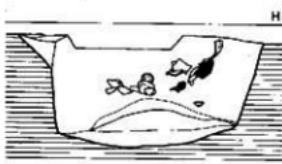
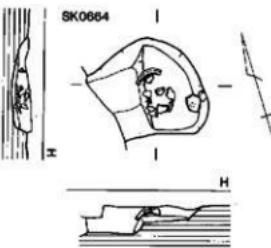
南北幅1.65mの不整長方形を呈し、検出面からの深さは1.28m。覆土は24層に分かれるが、第1～5層、第6～11層、第12～24層の上中下3層に大別でき、多くの遺物は上層から出土した。

出土遺物（第24・25図111～124）111～118は甕。111～113はいずれも短い逆L字状口縁片で、111・112の口縁下には低い三角突帯が1条めぐる。111の口縁端部および突带上にはヘラによる刻目を施す。115～118はこの種の甕の底部。台形状に張った厚みのある上げ底となる。以上の甕は外面刷毛目、内面ナデ調整を行う。また112の外面には煤、112・116・118の内面には炭化物が付着する。114は大型の甕。直立気味の胴部から口縁が短く外反し、その端部に粘土帶を貼り付け、中くぼみの上面と外面の二面を作り出す。残存部はナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多く、焼成良好、黄褐色を呈する。119・120は壺。119は胴部の張りが小さく、厚めの平底となる。内外面とも摩滅し、調整不明。胎土には砂粒が多い。底部から残存部上端におよぶ黒斑がある。120の底部片はわずかに上げ底で、外面ヘラ研磨、内面ナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多い。明るい赤褐色を呈し、内面には黒斑がある。121は甕の蓋。端部は角張る。外面ナデ、内面刷毛目調整。内外面とも煤が付着する。122・123は石剣片。122は切先から剣身にかけ長さ15.8cm残存する。最大幅4.2cm前後、その部分での厚さは0.4cm。123は剣身下半から茎部までの破片で、残存長7.7cm。最大幅は刃との境にあり、4.2cm、厚さ0.5cm。茎部は短く、厚めとなる。刃は鋭さを保っている。とともに凝灰質安山岩ホルンフェルス製。124は玄武岩の剥片の一側面に刃を設けたもの。長さ6.0cm、幅5.1cm、厚さ1.0cm。

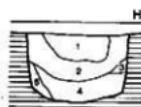
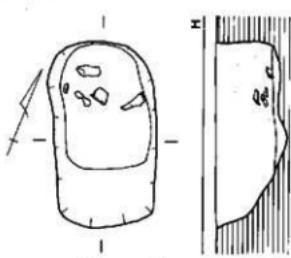
SK0663



SK0664

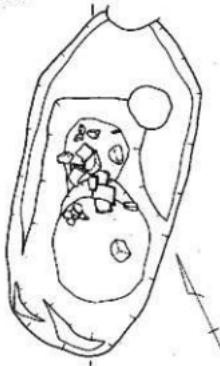


SK0665

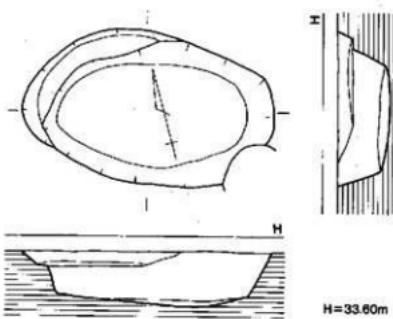


0 1m

SK0671



SK0672



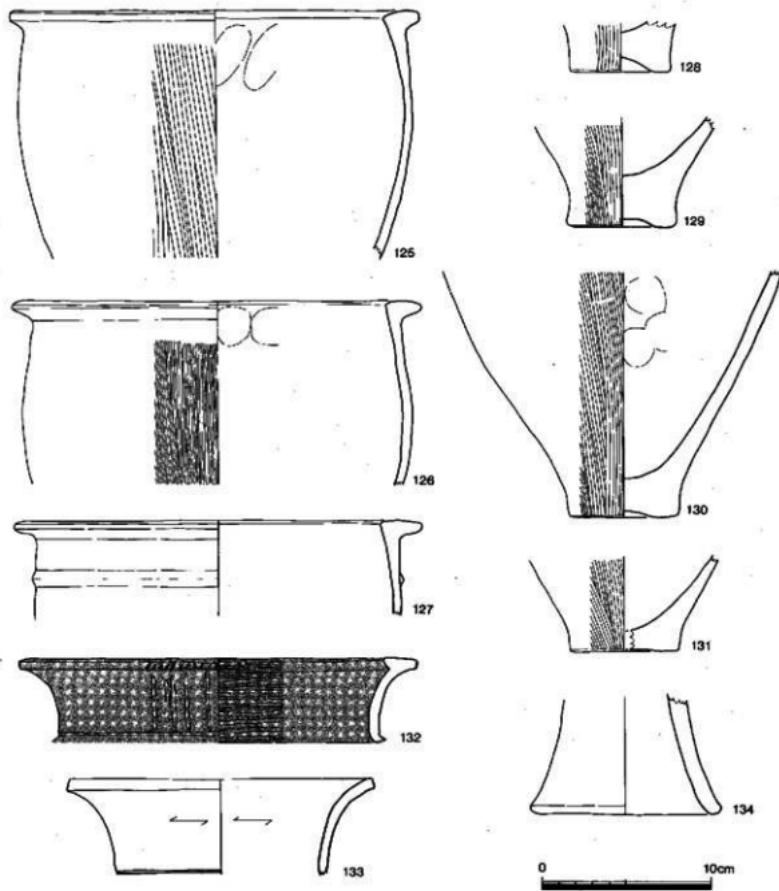
H=33.60m

SK0663

- 1 深灰色砂質土
- 2 細緻褐色砂質土
- 3 黑褐色粘質土
- 4 深褐色土（黃色粘土ブロック混じる）
- 5 深灰褐色粘質土（黃色粘土ブロック混じる）
- 6 深褐色粘土
- 7 深灰褐色土（黃色粘土ブロック混じる）
- 8 黑褐色粘土（黃色粘土ブロック混じる）
- 9 黃色粘土
- 10 黑色粘土（黃色粘土ブロック混じる）

- SK0665
- 1 深褐色粘質土
 - 2 黑褐色粘土
 - 3 黄褐色粘質土
 - 4 に黄褐色土混じる

第26図 SK0663・0664・0665・0671・0672実測図（縮尺1/40）



第27図 SK0663出土遺物実測図（縮尺1/3）

SK0666（第22図・図版7）V-29区。隅丸方形土坑で、東西幅1.25m、深さ74cm。側壁は垂直に近く、底面ほぼ平坦となる。覆土は6層に分かれ、下部に向かい土色が暗くなる。中期甕、器台などの小片が少量出土したが、図化したものはない。

SK0663（第26図）U-33区。長軸を北東-南西にとる楕円形状土坑で、長さ2.00m、幅1.75m。北および東側壁の深さ10~30cmに平坦面を設け、また南および西側壁では底面近くに段を作る。側壁は直立気味になる部分が多い。底面は南北長1.54m、東西幅1.35mの規模をもち、検出面から底面までの深さは88cmをはかる。覆土は10層に分かれ、第1~3層、第4~7層、第8~10層の上中下3層に大別できる。このうち第4層を中心とした中層から遺物がまとまって出土した。SC0662に切られる。

出土遺物（第27図125～134） 125～131は甕。このうち125～127は口縁部から胴上半付近までの破片で、いずれも逆L字状口縁となる。125・126の口縁部は外への引き出しが小さく、また125の上面は内傾する。127の口縁下には低い三角突帯が1条めぐる。128・129は厚めの上げ底だが、底部端の外への張り出しあはほとんどない。130・131は平底で、外底部中央がわずかに上げ底となる。以上の甕は、外面が127がナデ、他は刷毛目、内面はナデ調整である。125・131の外面には煤、125・129～131の内面には炭化物が付着する。132・133は壺。132は鋸先状の口縁部をもち、口唇部にはヘラで刻目を施す。外面は横ナデの後ヘラによる暗文、内面は横のヘラ研磨を行い、残存面すべてに丹塗りを施す。胎土には砂粒が多い。133は外傾した頸部の上半部が大きく開き、角張った口縁端部を作る。頸部と頸部の境に沈線がめぐる。内外面ともヘラ研磨で、丹塗りを施しているようだが、摩滅して判然しない。胎土には砂粒が多い。134は薄手の作りの器台片。内外面とも摩滅し、調整は不明。

SK0664（第26図・図版7） U-32区。長軸を東西にとる楕円形状土坑と推定できるが、西側をSK0677に切られ、東西は長さ0.75mが残存するだけである。幅0.75m。東側壁の深さ10cm付近に平坦面を作り、そこから西側に一段下がり平坦な底面となる。検出面から底面までの深さ23cm。覆土は褐色粘質土。東側壁平坦面から甕などまとめて出土した。

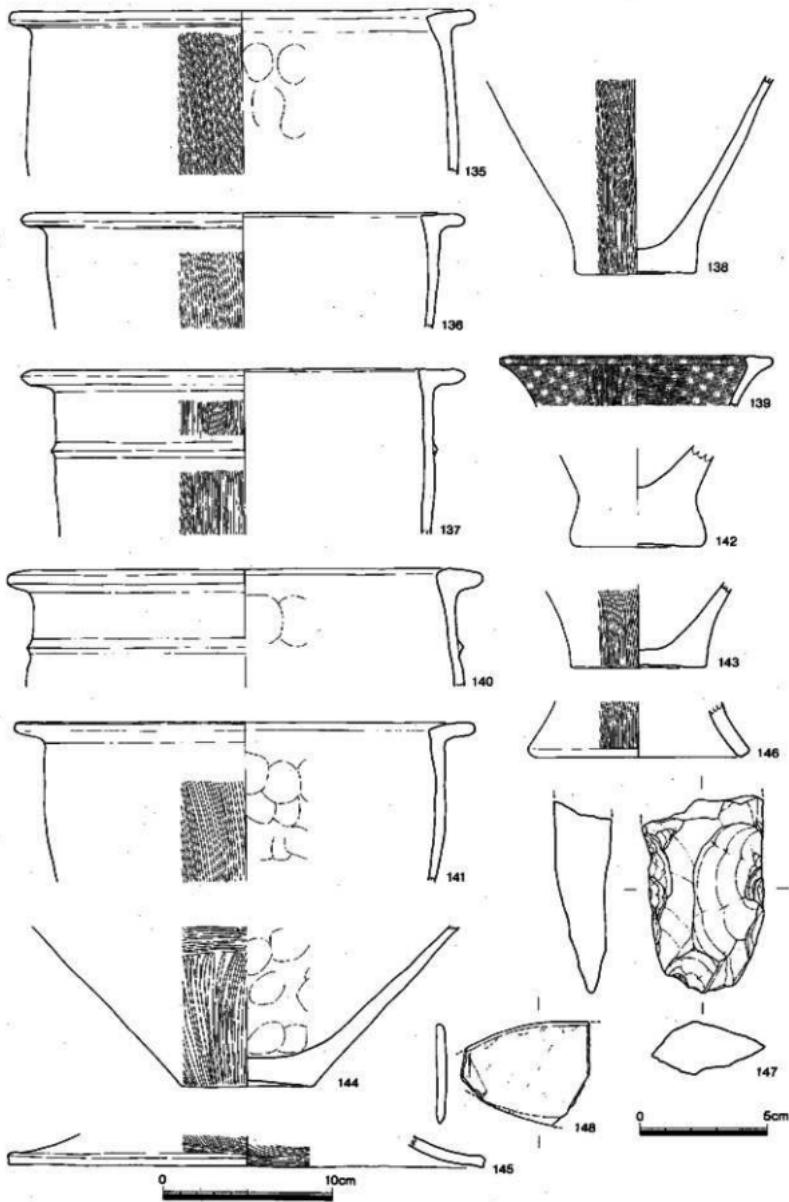
出土遺物（第28図135～139） 135～138は甕。このうち135～137は口縁部から胴上半付近までの破片で、いずれも逆L字状口縁となり、口唇部は丸くおさめる。137の口縁下には1条の三角突帯がめぐる。138は底部。やや厚みのある平底を呈する。これらの甕は外面に刷毛目、内面にナデ調整を行う。136の外面には煤が、138の内底には炭化物が付着する。139は鋸先状に近い口縁部をもつ壺。外面はヘラによる暗文を施し、内面は横のヘラ研磨を行う。内外面とも丹塗り。胎土には砂粒が多い。

SK0665（第26図・図版7） U-32区。長軸を北西～南東にとる隅丸長方形の土坑で、長さ1.48m、幅0.84m、深さ50cm前後。北側壁が垂直であるのに対し、南側壁は緩やかに下がり、凹凸の著しい底面は北側に寄る。覆土は5層に分かれ、主に第4層から遺物が出上した。SK0677を切る。

出土遺物（第28図140～148） 140～143は甕。140・141は逆L字状の口縁部をもち、140の口縁下には低い三角突帯がめぐる。142・143は底部。ともに平底だが、142は厚みをもった台形状となる。甕の外面は140・142が横ナデ、141・143が刷毛目、内面はすべてナデ調整である。141の口縁部と143の外面には煤、142・143の内底には炭化物が付着する。144は壺。わずかに上げ底の底部から胴部が大きく膨らむ。外面はヘラ研磨で、底部近くが縦方向、その上位は横方向に施す。内面は指ナデ。胎土には細砂粒が混じり、暗褐色から黒色を呈する。145は甕の蓋片。内外面との刷毛目調整を行う。口縁端部から内面にかけて煤が付着する。146は薄手の器台片。外面には刷毛目が認められるが、全体に摩滅している。147は玄武岩製の打製石斧。頭部は折損する。148は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の石包丁片。両刃で、厚さ0.4cm。表面には斜め方向の研ぎが認められる。

SK0671（第26図・図版8） U-28区。長軸を北東～南西にとる楕円形状土坑で、長さ2.75m前後、幅1.32m。深さ40cm。北から東西両側壁中央近くまでの深さ10cmに平坦面を作り、その中央が一段下がり平坦となり、さらに南側に下がって径0.80m前後の円形底面となる。検出面から底面までの深さは58cm。南側壁深さ15cm付近にも二ヶ所小さな段を設ける。覆土は暗褐色粘質土で、底面付近には若干炭化物が混じる。中央上面近くから遺物がまとめて出土した。

出土遺物（第29図149～157） 149～154は甕。このうち149～151は逆L字状の口縁部をもつ。149は口縁部の外への引き出しが小さく、胴部もやや張り気味になる。151は口径26.9cmをはかり、152の外底部中央が上げ底の壺下部と同一個体の可能性が高い。154の底部も外底部中央が上げ底となる。以上の甕はいずれも外面刷毛目、内面ナデ調整を行う。151は外面全体に煤が付着し、器表の剥離も著し



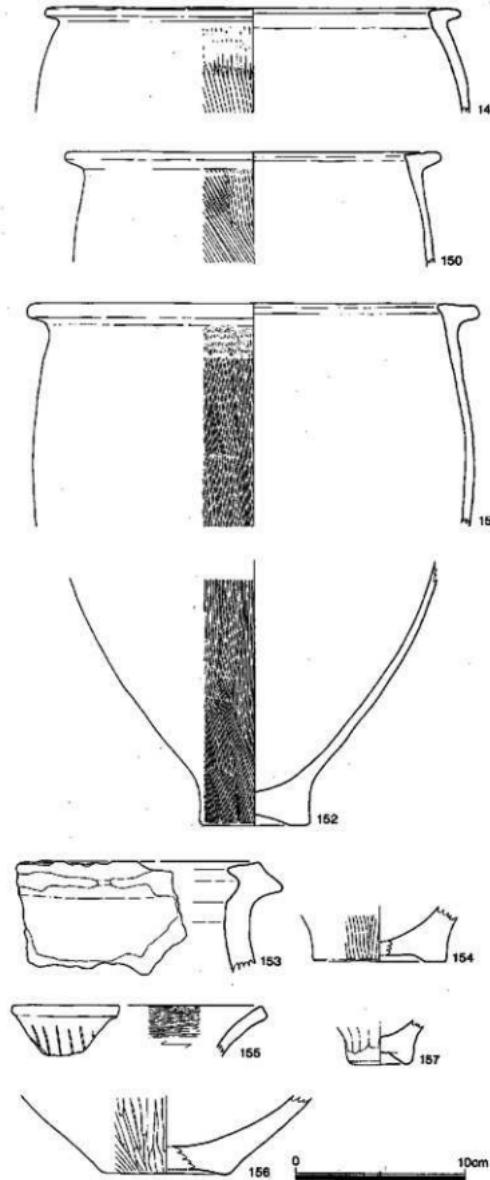
第28図 SK0664・0665出土遺物実測図（縮尺147・148は1/2, その他は1/3）

い。また152・153の内底には炭化物が付着する。153は大型壺の口縁部で、SK0655の114とほぼ同一の形態、調整である。ただ色調が淡赤褐色から黄褐色で114とは異なる。155・156は壺。155は広口壺の口縁部で、外面はヘラによる縦の暗文、内面は横のヘラ研磨を施す。胎土には微砂粒を含み、くすんだ赤褐色を呈する。156は厚みのある底部で、わずかに上げ底となる。外面は縦のヘラ研磨、内面はナデ調整を行う。胎土には砂粒が多く、暗褐色を主に呈し、外底は黒色となる。157は底径3.6cmの小さな上げ底である。外面はヘラによる縦方向のナデ、他はナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒が多く、黄褐色を主に呈するが、外底部は全体が黒斑で覆われる。器種不明。

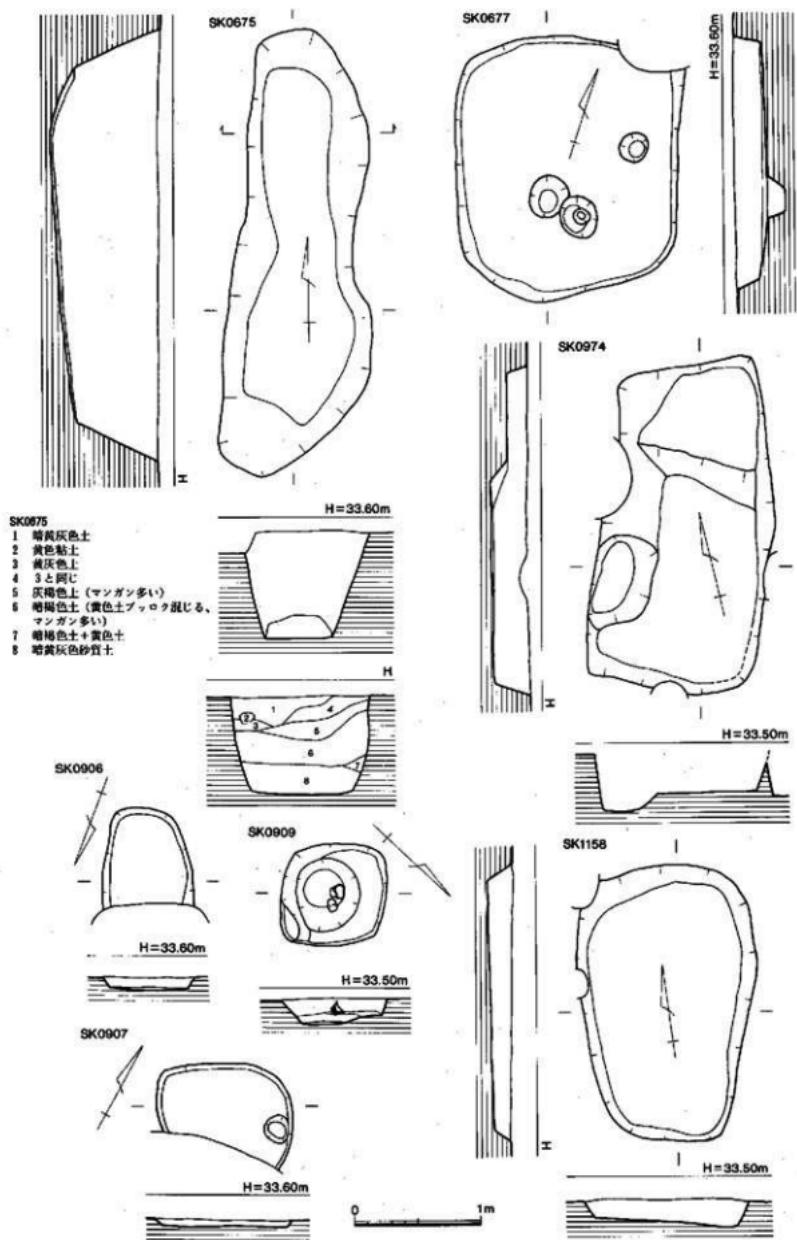
SK0672 (第26図・図版8) U-28区。長軸をほぼ東西にとる精円形土坑で、長さ1.19m、幅1.20m、深さ42cm。西から北中央付近側壁の深さ10cm前後に平坦面を作る。底面は東西長1.50m、南北幅0.82mの楕円形で、東側にやや傾斜する。覆土は黄褐色土のブロックが若干混じった暗褐色土。逆L字状口縁の壺、胴部に2条の刻目突起のめぐら壺片などが少量出土したが、実測したものはない。

SK0675 (第30図・図版8) U-31区。長軸をほぼ南北にとる長楕円形状の土坑で、長さ3.53m、幅1.17m。底面は南から北に傾斜し、最も深いところで検出面から84cmをはかる。

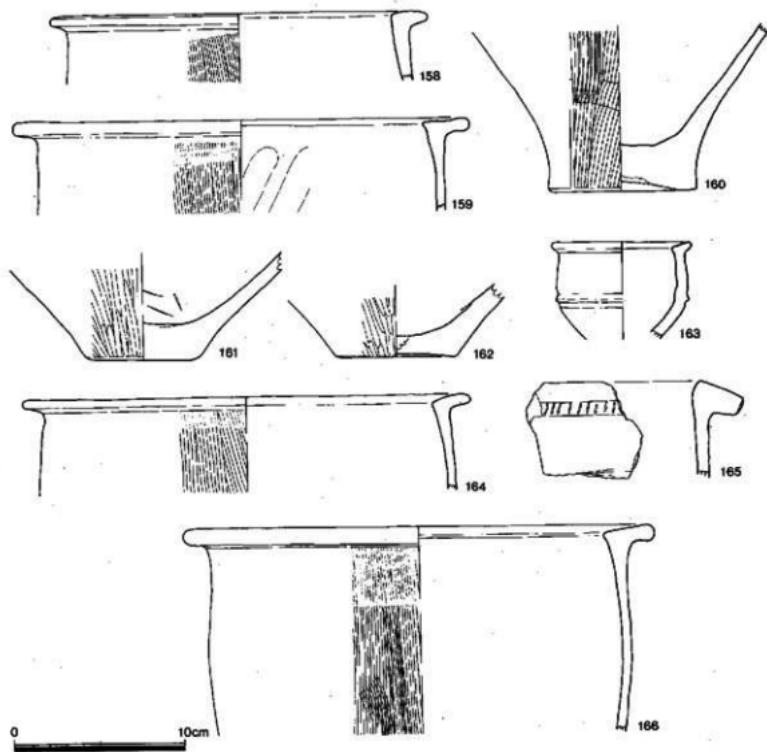
出土遺物 (第31図158~163)



第29図 SK0671出土遺物実測図 (縮尺1/3)



第30図 SK0675・0677・0906・0907・0909・0974・1158実測図（縮尺1/40）

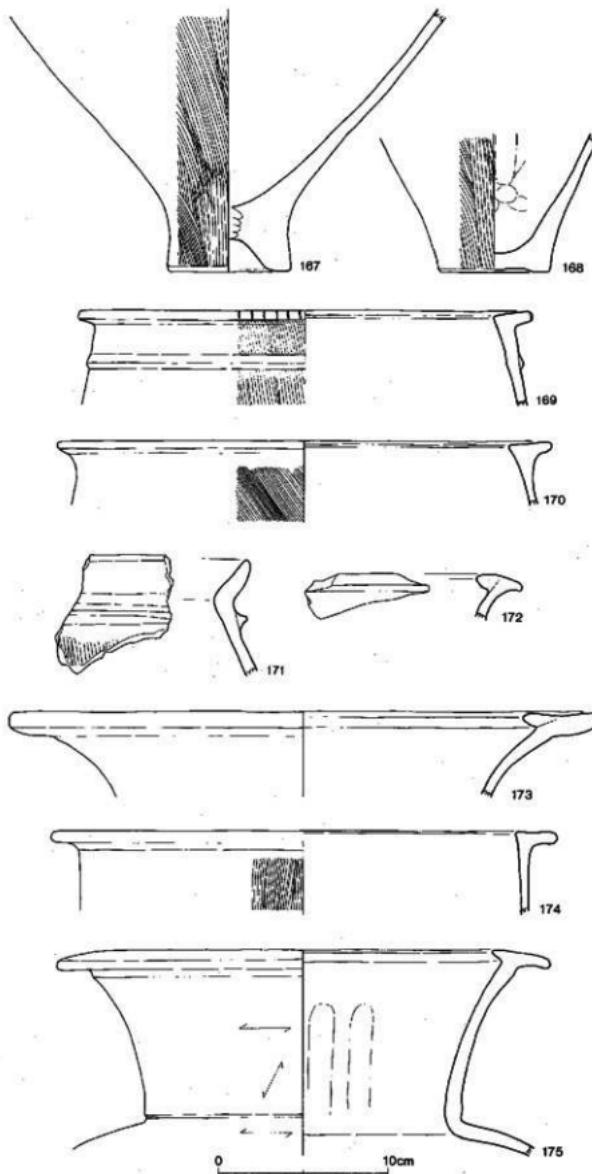


第31図 SK0675・0677・0691出土遺物実測図（縮尺1/3）

158～180は甕。158・159は逆し字状の口縁部片で、158の外への引き出しは小さい。160は厚みをもった上げ底の底部。いずれも外面刷毛目、内面ナデ調整で仕上げ、外面には煤が、また160の内底には炭化物が付着する。161・162は甕の底部。161が厚みのある平底、162はわずかに上げ底となる。ともに外面は縦のヘラ研磨、内面ナデ調整で、胎土には砂粒が混じる。162の内底中央には粘土塊を貼り付けている。163は鉢。張りのない胴部中位に三角突帯がめぐり、口縁は短いくの字状となる。口縁部から外面突帯直下まで横ナデ、他はナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒を含み、外面明赤褐色、内面黒色を呈する。外面は丹塗りであった可能性がある。

SK0677（第30図・図版8）U-32区。長軸を北西-南東にとる隅丸長方形土坑で、長さ2.12m、幅1.76m、深さ25cm。側壁はほぼ垂直で、底面は平坦となる。

出土遺物（第31図164・165）ともに甕。164は逆し字状の口縁部片で、口縁上面は内傾する。外面刷毛目、内面ナデ調整。165は厚めの口縁部が外に下がり、口唇部にヘラによる刻み目を施す。外面ともにナデ調整で、外面は縦方向、内面は横方向に施す。胎土には砂粒が多く、淡黄褐色を呈する。外面には煤が付着する。覆土からの出土。



第32図 SK0906・0909・0974・0982・1158出土遺物実測図（縮尺1/3）

SK0901 X-30区。
長軸をほぼ南北にと
る橢円形土坑で、長
さ1.70m前後、幅
1.20m、深さ10cm。
北側をK0044埴棺墓
の墓壇に切られる。

出土遺物（第31図
166）上面が内傾す
る逆し字状口縁の甕
である。口縁端部は
丸くおさめる。外面
刷毛目、内面ナデ調
整。外面には煤が付
着する。

SK0906（第30図）
Y-32区。長軸を北
西-南東にとる隅丸
長方形の土坑と考え
られるが、北側をD
0444土壤墓に切られ
全形はわからない。
東西幅0.72m、深さ
10cmをかる。覆土
は黒褐色土。

出土遺物（第32図
167）細身で上げ底
となる底部をもつ甕
である。外面刷毛目
調整、内面は摩滅す
る。胎土には砂粒が
多く、外面赤みをお
びた黄褐色、内底は
焦げ付きのせいか黒
色を呈する。

SK0907（第30図）
Y-32区。SK0906
の南で検出した隅丸
方形状の土坑。東西
幅1.08m、深さ10cm。

覆土は黒褐色土で、弥生土器片が少量出土した。南側をM0700祭祀溝に切られる。

SK0909 (第30図・図版8) X-30区で検出した方形状の土坑で、南北幅0.82mをはかる。東を除いた三方の側壁の深さ10cmに平坦面を作り、そこから東に一段下がって径0.38mの円形底面となる。検出面から底面までの深さ20cm。底面から10cmほど浮いて甕底部が出土した。

出土遺物 (第32図168) 外底中央がわずかに上げ底となる甕である。外面は刷毛目、内面は指ナデ調整を行う。外面には煤、内面には炭化物が付着する。

SK0974 (第30図) X-31区。長軸をほぼ南北にとる長方形土坑で、長さ2.70m、幅1.37m。北側壁の深さ16cmに平坦面を作り、そこから南に一段下がって底面となる。検出面から底面までの深さ24cm。覆土は暗褐色土。東側壁を0501古墳の周溝に切られる。

出土遺物 (第32図169~172) 169~171は甕。169・170は逆L字状口縁をもつ甕で、169は上面が内傾し、口唇部にはヘラで刻目を施す。また口縁下には低い三角突帯がめぐる。ともに外面は刷毛目、内面はナデ調整を行う。胎土には砂粒が多い。171はくの字状の口縁片で、口縁下には比較的高めの三角突帯がめぐる。外面刷毛目、内面ナデ調整。胎土には砂粒が多く、外面には煤が付着する。172は鋸先状口縁をもつ甕。口縁部上面は外傾する。残存部は横ナデ調整。胎土には砂粒が混じり、赤みをおびた淡黄褐色を呈する。

SK0982 X-25区。ほぼ東西に長軸をとる楕円形土坑で、長さ1.12m、幅0.90m。西側壁の深さ5cmに平坦面を作り、そこから東側に一段低くなり底面となる。検出面から底面までの深さ15cm。

出土遺物 (第32図173) 鋸先状口縁をもつ甕。口縁部の外へ引き出しが大きく、上面は中くぼみとなる。頸部外面はナデ、他は横ナデ調整。胎土には砂粒が多く、赤みをおびた淡黄褐色を呈する。

SK1158 (第30図) T-30区。SC1140の上面で検出した長軸をほぼ南北とる隅丸長方形の土坑である。長さ2.20m、幅1.47m、深さ22cm。底面は平坦である。覆土には炭が混じる。

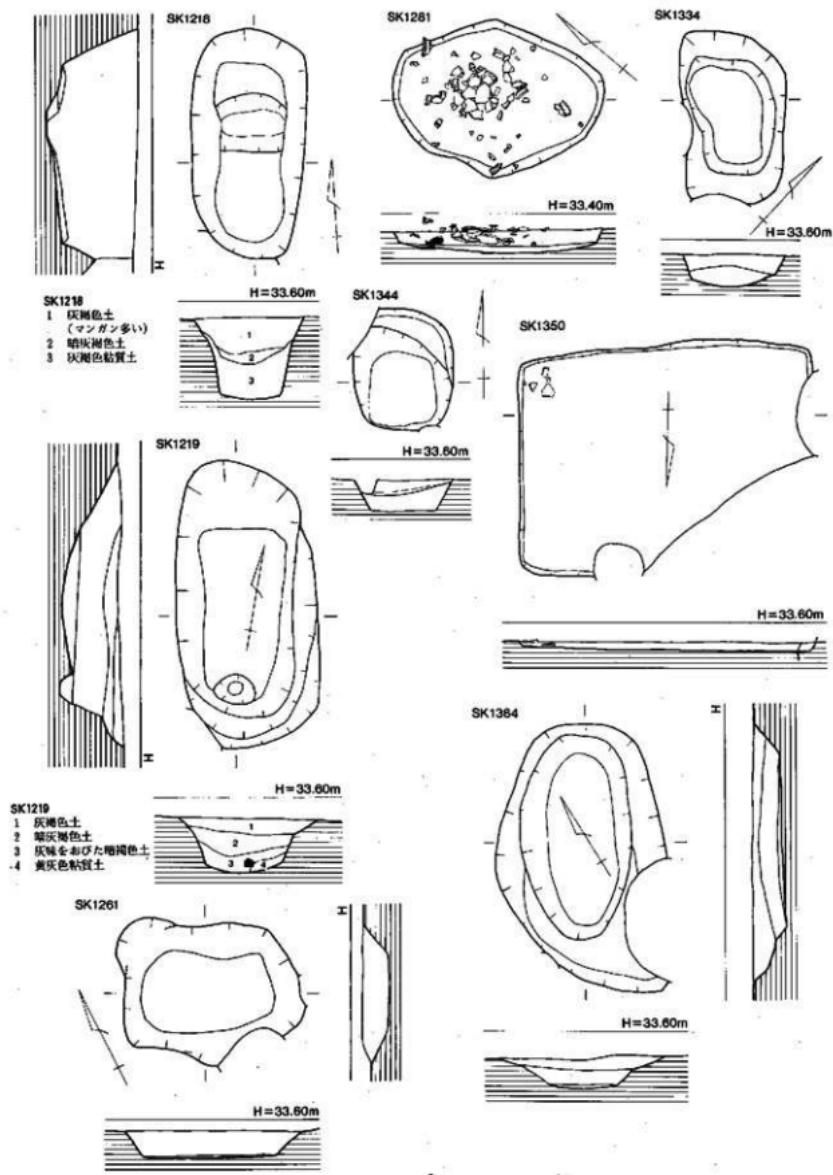
出土遺物 (第32図174・175) 174は逆L字状口縁の甕。薄手の作りで、口縁端部は丸くおさめる。外面刷毛目、内面ナデ調整。外面には煤の付着がみられるが、全体に器表は摩滅気味である。175は鋸先状口縁をもつ甕。胴部との境にはヘラによる沈線がめぐり、口縁部は長く外に引き出し、その上面は外傾気味になる。外面はヘラ研磨、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整を行うが、器表は全体に摩滅する。胎土には砂粒を多く含み、口縁部が黒色、他は黄褐色から灰褐色を呈する。

SK1218 (第33図・図版8) T-30区。長軸をほぼ南北にとる楕円形土坑である。南側をSK1219に切られるが、長さ1.90m前後、幅0.91mをはかる。底面は深さ60cm、底面のやや北寄りで幅0.20m前後にわたり10cmほど深くなる。覆土は3層に分かれれる。北側はSC1140を切る。

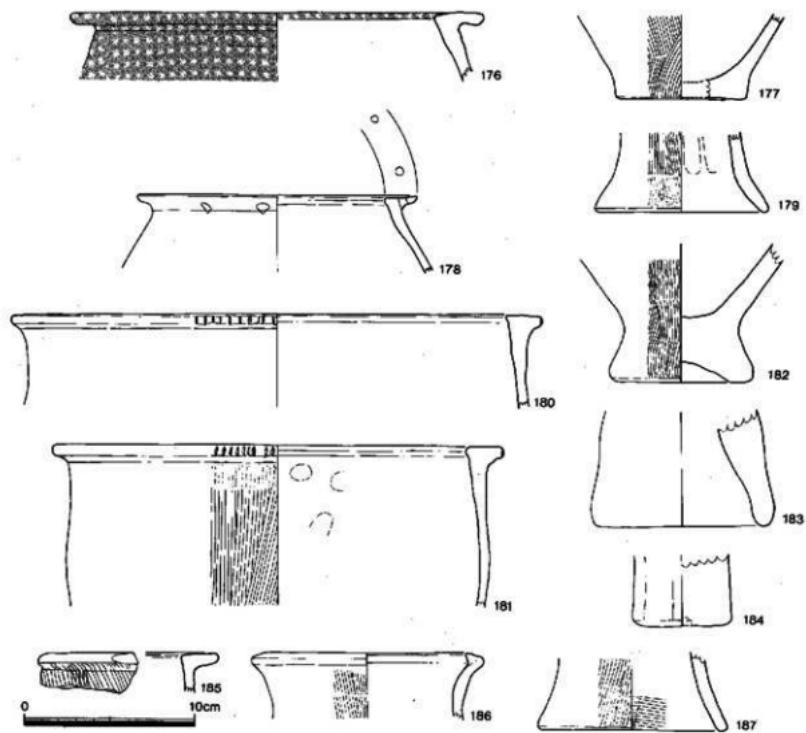
出土遺物 (第34図176~179) 176・177は甕。176は逆L字状口縁をもち、胴部はやや膨らみ気味となるものか。外面は横のヘラ研磨、内面はナデ調整で、外面から口縁部上面にかけて丹塗を施す。177は底部。平底で、外面は刷毛目調整を行う。内面は摩滅する。ともに胎土には砂粒が多い。178は無頸壺片。残存する口縁部上面は平坦となり、約3.5cm離れて上面から2孔を穿つ。外面摩滅、内面はナデ調整。胎土は精良で、赤みをおびた黄褐色を呈する。179は薄手の器台。外面は刷毛目調整を行った後、脚端部を横ナデで消す。内面はナデ調整。

SK1219 (第33図) T-30区。SK1218を北側で切る長軸をほぼ南北にとる楕円形土坑である。長さ2.28m、幅1.12m、深さ48cm。底面は長方形になり、南端には径0.30m前後のピットがある。南から東側壁にかけては深さ7cm、15cmの二ヶ所で段がつく。覆土は4層に分かれれる。

出土遺物 (第34図180~184) 180~182は甕。180・181は逆L字状に口縁部を短く引き出したもので、端部にはヘラによる刻目を施す。外面は180がナデ、181が刷毛目調整。他はともに口縁部が横ナ



第33図 SK1218・1219・1261・1281・1334・1344・1350・1364実測図（縮尺1/40）



第34図 SK1218・1219・1261出土遺物実測図（縮尺1/3）

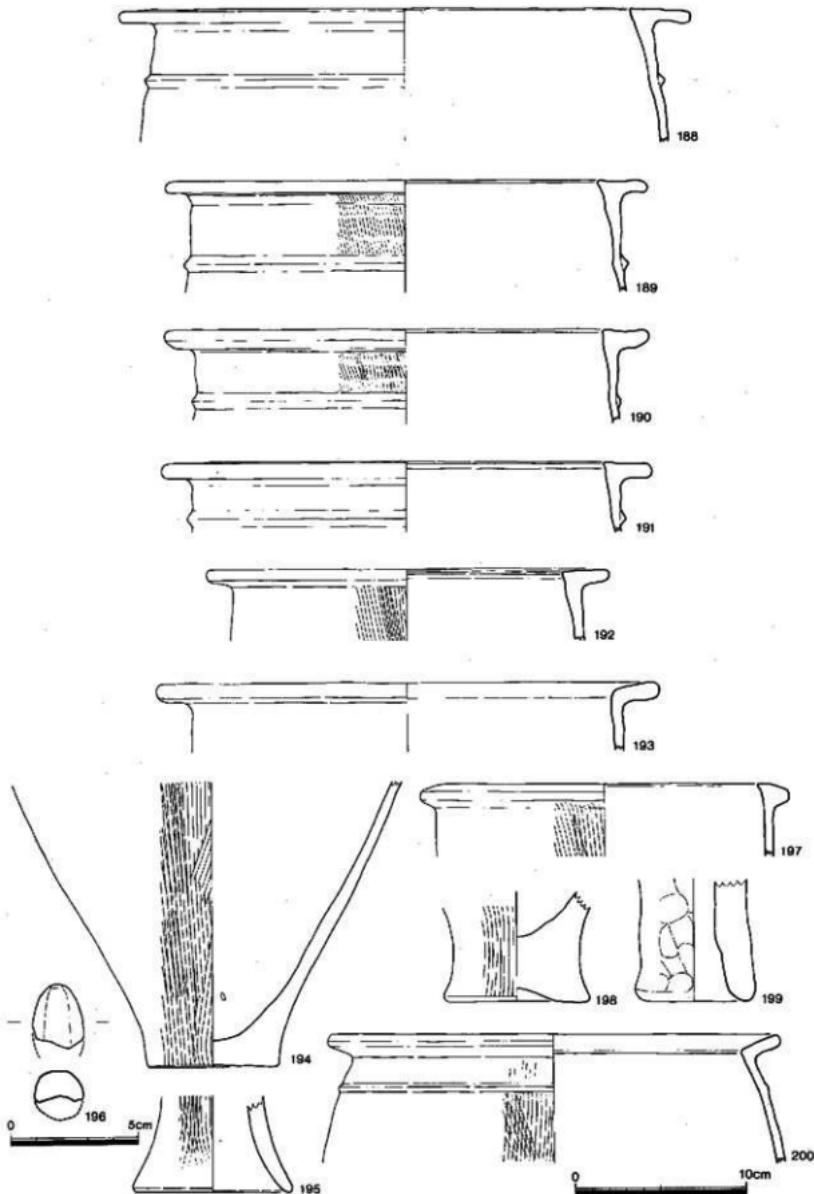
デ、内面ナデ調整となる。180の外面には大きな黒斑があり、またどちらの外面にも煤が付着する。182は底部。台形状に張った厚みのある上げ底である。外面は刷毛目調整、内面は炭化物が付着し調整不明。183は厚手の器台。外面ナデ、内面指ナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多い。184は中実の器台。外面はヘラナデ調整を行う。胎土には砂粒が多く、黄褐色を呈する。

SK1261（第33図）U-33区。側壁がピットに切られたり、崩れたりしているが、長軸を北西-南東にとる隅丸長方形の土坑である。長さ1.45m前後、幅0.97m、深さ21cm。底面は平坦である。

出土遺物（第34図185～187）185は逆L字状口縁の甕。外面の刷毛目調整は口縁部下面におよぶ。内面は摩滅する。186は壺。外反する口縁端部の内側には粘土紐が貼り付つき肥厚する。外面刷毛目、内面ヘラナデ調整。胎土には砂粒が多い。外面暗褐色を呈し、顔料を塗布した可能性が高い。187は薄手の器台。外面から内面脚据部が刷毛目、内面上位はナデ調整を行う。

SK1261（第33図）T-30区。SC1140の上面で検出した長軸を北西-南東にとる楕円形状土坑である。長さ1.66m、幅1.25m、深さ20cm。覆土は炭や焼土が混じった灰褐色土。底面から浮いた状態で土器片などの遺物が疊とともに出土した。

出土遺物（第35図188～196）188～194は甕。188～193は逆L字状口縁をもつもので、うち188～191



第35図 SK1281・1344・1350出土遺物実測図 (縮尺196は1/2, その他は1/3)

は口縁下に低い三角突帯がめぐる。193の口縁部上面はやや内傾気味である。外面は突帯部分が横ナデ、他は刷毛目調整と考えられるが、188・191・193は器表が摩滅する。口縁部は横ナデ、内面はナデ調整を行う。194は底部。平底で、外面は底部端まで刷毛目調整を行う。内面は炭化物が付着するとともに、器表が剥離する。初圧痕が認められる。195は薄手の器台。外面は刷毛目、脚部付近は横ナデ調整を行う。内面はナデ調整。196は土製の投弾片。残長2.5cm、断面は円形状で厚さ1.9cm。胎土には砂粒を含み、黄褐色を呈する。

SK1334(第33図) U-32区。長軸を北西-南東にとる梢円形状土坑で、南側はSK0655に切られる。長さ1.35m、幅0.84m、側壁の深さ10cm前後でいったん段を作り、底面に向かって下がる。検出面から底面までの深さ26cm。弥生土器片などが少量出土したが、実測したものはない。

SK1344(第33図) T-33区。長軸をほぼ南北にとる長方形土坑で、長さ0.96m、幅0.79m。北側壁の深さ10cmに平坦面を作り、その南側が一段下がって方形状の底面となる。検出面から底面までの深さ36cm。覆土は暗褐色土。SC1221に切られる。

出土遺物(第35図197~199) 197・198は甕。197の口縁部は断面三角形に近いが、端部が面を作る。外面刷毛目、内面ナデ調整。198は厚みのある底部で外底中央が上げ底になる。外面刷毛目調整、内面不明。199は厚手の器台。外面は指押さえの後ナデ、内面はナデ調整。胎土には砂粒が多い。

SK1350(第33図) T-32区。長軸をほぼ東西にとる長方形土坑で、北側はSC1200に切られる。長さ2.30m前後、幅1.78m、底面までの深さは6cmと浅い。覆土は黄褐色土。

出土遺物(第35図200) 上面が内傾する逆L字状口縁の甕。口縁下には低い三角突帯がめぐる。外面は刷毛目調整で、突帯から上位はその後横ナデ調整を行う。内面には焦げ付きがみられる。

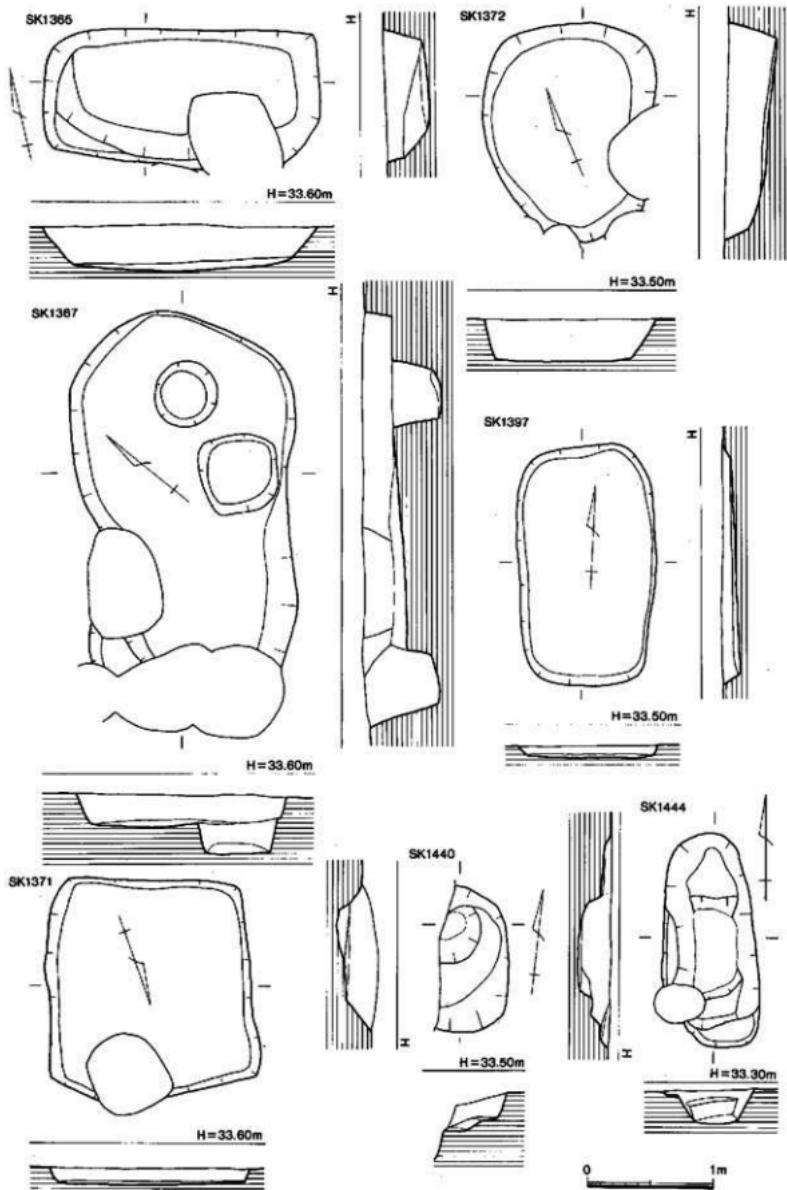
SK1364(第33図) T-29区。長軸を北東-南西にとる梢円形状土坑で、長さ2.13m、幅1.35m。南側壁の深さ10cmに平坦面を作り、その北側が一段下がって長さ1.36m、幅0.52mの梢円形底面となる。検出面から底面までの深さ20cm。SC1836を切り、SB0215に切られる。

SK1365(第36図・図版9) T-29区。長軸をほぼ東西にとる長方形土坑で、長さ2.13m、幅1.06m。東南側壁の深さ10cmに小さな平坦面を作り、底面はいびつな長方形となる。検出面から底面までの深さ37cm。

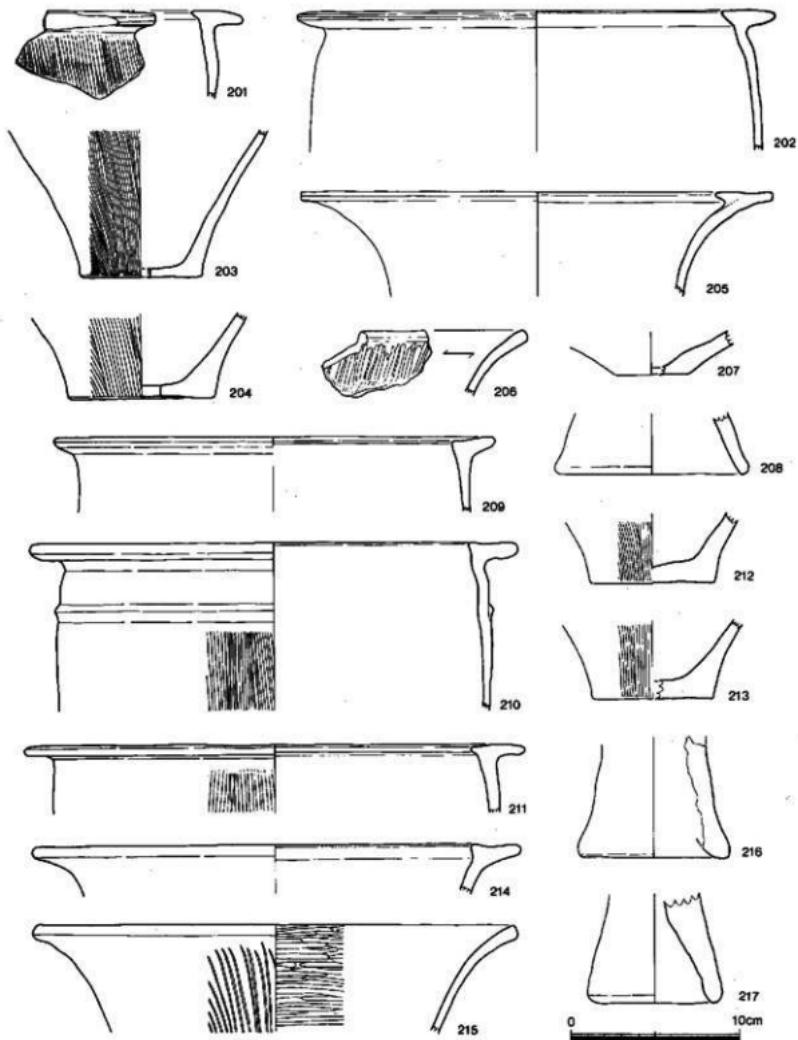
出土遺物(第37図201~208) 201~204は甕。201・202は内側への張り出しが強い逆L字状口縁をもつ。203・204は底部で、薄い平底となる。201の外面の調整は摩滅して不明。他の甕は外面は刷毛目、内面はナデ調整。204の外面には煤、内底には炭化物が付着する。また203の外底部には小さな黒斑がある。205~207は甕。205は鋤先状の口縁部をもち、外面は摩滅、内面はナデ調整。胎土は微砂粒が若干入った精良な胎土で、赤褐色を呈する。206は広口甕の口縁部で、外面は継のヘラ研磨、内面は横のヘラ研磨を行う。胎土には砂粒が混じる。207はやや小さな平底で、内底中央部分はくぼむ。外面はヘラ研磨、内面ナデ調整。胎土は精良。208は薄手の器台。器面調整は摩滅して不明。

SK1367(第36図) T-28区。長軸を北東-南西にとる梢円形状土坑であるが、西南側壁を複数のピットに切られる。全長は3.25m前後と考えられ、幅は1.77m、深さ33cm。底面には北から深さ40cm、25cmの二つのピットがある。

出土遺物(第37図209~217) 209~213は甕。209~211は逆L字状口縁をもち、209は上面がやや内傾し、211は内面への小さな張り出しがある。210の口縁下には低い三角突帯がめぐる。212・213は底部片で、ともに平底である。以上の甕は209の外面が摩滅して不明の他は、外面刷毛目、内面ナデ調整で主に仕上げる。210・211の外面に煤、213の内底に炭化物が付着する。214・215は甕。214は上面が中くぼみとなる鋤先状の口縁部をもつ。外面はヘラ研磨で丹塗りの可能性が高く、内面はナデ調整



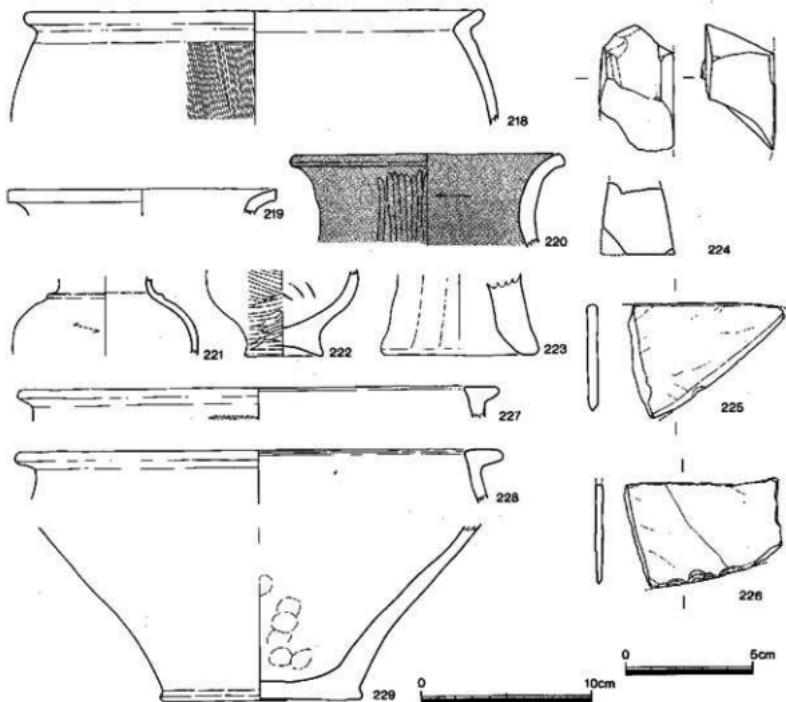
第36図 SK1365・1367・1371・1372・1397・1440・1444実測図（縮尺1/40）



第37図 SK1365・1367出土遺物実測図（縮尺1/3）

を行う。215は広口壺の口縁部で、外面は横のヘラ研磨の後、縦方向の暗文を施す。内面は横のヘラ研磨。明るい赤褐色を呈する。ともに胎土には砂粒が混じる。216・217は厚手の器台。内外面ともナデ調整。胎土には砂粒が少ないが、しまりがない。

SK1371（第36図） T-28区で検出した南北長1.72m、東西幅1.61mをはかる方形状土坑である。深



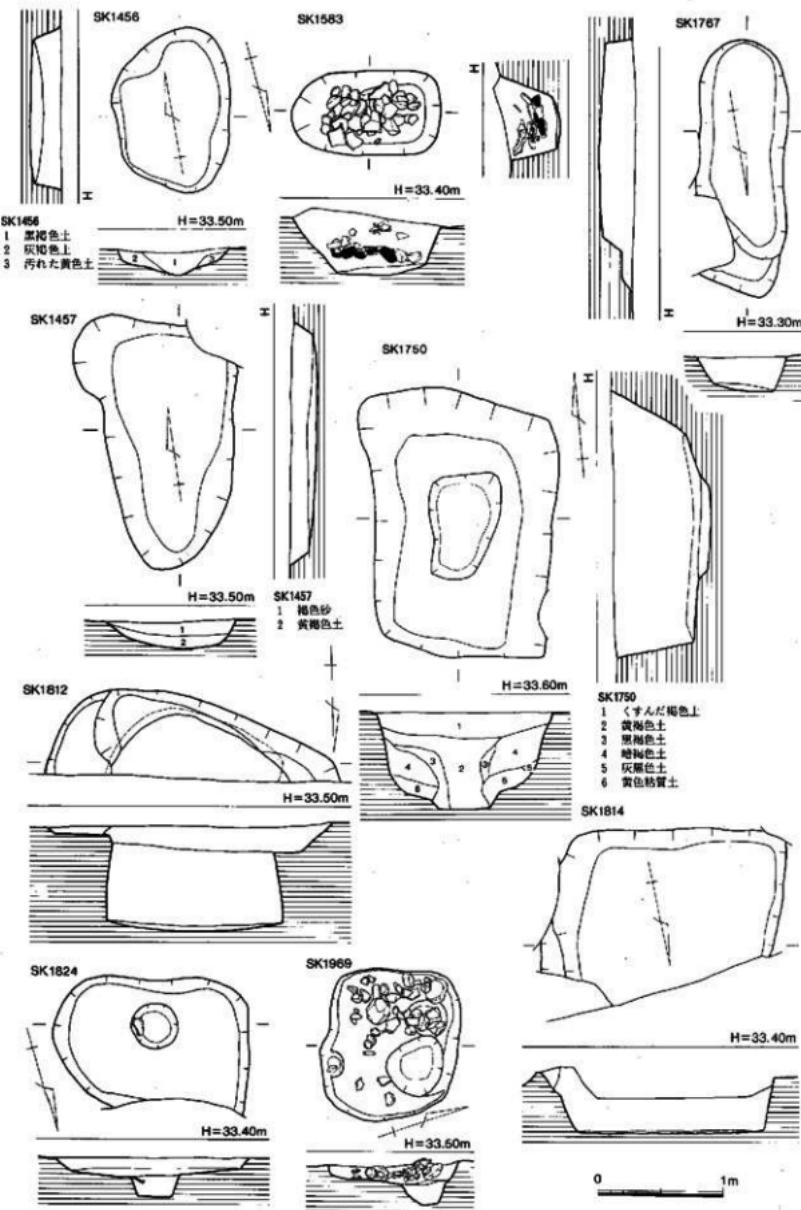
第38図 SK1372・1397・1440出土遺物実測図（縮尺224～226は1/2, その他は1/3）

さは13cmと浅く、底面は平坦となる。中期の壺・壺片などが少量出土したが、実測は行ってない。

SK1372（第36図・図版9）T-29区。長軸を北東一南西にとる楕円形状土坑で、北側壁が幅広くなる。長さ1.63m、幅1.35m。底面は北に傾斜し、北端で検出面からの深さ43cmをはかる。覆土は炭化物の混じった暗褐色土。

出土遺物（第38図218～226）218・219は壺。219は如意形口縁部片で、残存部は横ナデ調整。218はくの字伏口縁部をもち、胴部には張りがある。外面刷毛目、内面ナデ調整で、外面には煤が付着する。220～222は壺。220は外反する口頭部片で、外面が継、内面が横のヘラ研磨を行う。内外面とも丹塗り。胎土には砂粒が多い。221は小形壺の球形に張った胴部片で、頭部との境には三角突帯があげられる。外面はヘラ研磨、内面はナデ調整。胎土は精良で、暗褐色、薄い器壁である。222も小形壺で、外に張った高い底部をもつ。外底は上げ底となる。外面はヘラ研磨、内面はヘラナデ調整で、ヘラ痕が残る。胎土には砂粒を含み、暗灰褐色を呈する。胴部から内底に続く黒斑がある。223は厚手の器台。外面は継方向のヘラナデ、内面は横ナデ調整。224は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の柱状片刃石斧片、225・226は頁岩質砂岩製の石包丁片。226の刃部には二次的な剥離がみられる。

SK1397（第36図）A-A-25区。長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形の土坑で、長さ1.91m、幅1.10m。底面は南に傾斜し、南端で深さ13cmをはかる。



第39図 SK1456・1457・1583・1750・1767・1812・1814・1824・1969実測図（縮尺1/40）

出土遺物（第38図227・228）ともに逆L字状口縁をもつ壺である。227の口縁部の外への引き出しは小さい。ともに外面刷毛目、内面ナデ調整。227の外面には煤が付着する。

SK1440（第36図）Y-25区。K0113に西半部を切られ全形は不明。現状で南北長1.16m、東西幅0.58mをはかる。南から東側壁の深さ26cmに平坦面を作り、北側に一段下がって橢円形状の小さな底面となる。検出面から底面までの深さ32cm。

出土遺物（第38図229）壺の底部片である。平底で外底端がわずかに外に出る。外面ナデ、内面は指押さえのナデ調整を行う。胎土には砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。

SK1444（第36図）Y-23区。長軸を南北にとる橢円形状土坑で、長さ1.70m、幅0.74m。西側壁の深さ3cm部分、北側壁の深さ6cm部分に平坦面を作り、また南側壁は深さ7cmと14cm部分の二段にわたって平坦面を作る。底面は坑内中央部にあり、長さ0.65m、幅0.32m、検出面からの深さ27cm。中期の甕片が少量出土したが、実測したものはない。

SK1456（第39図）W-28区。長軸をほぼ南北にとる橢円形状土坑で、長さ1.30m、幅0.94m、深さ23cm。底面は中央部がやや低くなり、覆土は3層に分かれる。

出土遺物（第40図230）逆L字状口縁の甕で、口縁下には三角突帯があげぐる。外面は刷毛目の後横ナデ、内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、くすんだ赤褐色を主に呈する。

SK1457（第39図）W-28区。長軸をほぼ南北にとる不整形の土坑で、北側壁は広がり、南側壁は尖り気味になる。長さ1.95m、北側幅1.04m、深さ20cm。覆土は水平に堆積した2層に分かれる。

出土遺物（第40図231）逆L字状口縁の甕で、口縁下には三角突帯があげぐる。外面突帯下は刷毛目、突帯上から口縁部は横ナデ、内面はナデ調整を行う。外面には煤が付着する。

SK1583（第39図・図版9）V-27区。長軸をほぼ東西にとる橢円形状土坑で、長さ1.18m、幅0.68m、深さ52cm。南北断面形はU字形状を呈する。底面から10cmほど浮いた状態で疊が集積し、その上から土器片（甕）がまとまって出土した。

出土遺物（第40図232）胴中位から上がほぼ残存する逆L字状口縁の甕である。口縁上面は内傾し、胴部は張りがある。外面は粗い刷毛目、内面はナデ調整。内面には鉄圧痕がある。口径27.5cm。

SK1750（第39図・図版9）U-29区。壁面にやや崩れがあるが、長軸を南北にとる長方形の土坑で、長さ2.14m、幅1.40m前後をはかる。深さ66cmで平坦面を作り、その中央長さ0.80m、幅0.50mが一段下がり底面となる。検出面から底面までの深さ77cm。東西土層図を見ると、一段深くなつた中央部分を、両側から固定したような堆積状態となつてゐる。付近に建物を構成する柱穴もないことから、独立した立柱の抜き跡の可能性が高い。

出土遺物（第40図233～236）233・234は甕。233は断面三角形の口縁部をもつ。口縁下は強いヘラナデで段が付く。他はナデ調整。234は底部。厚手で、わずかに上げ底となる。内外面ともナデ調整か。235は甕。直立した頸部から口縁部が垂れ下がり気味に外反する。内外面ともナデ調整で、丹塗りの可能性が高い。胎土には砂粒を含み、しまりがない。236は厚手の器台。内外面ともナデ調整。

SK1767（第39図）U-28区。長軸をほぼ南北にとる細長い橢円形状土坑で、長さ2.02m、幅0.70mをはかる。北側壁の深さ11cmに平坦面を作り、その北側が一段下がって長さ1.70m、幅0.48mの底面となる。検出面から底面までの深さ29cm。覆土は暗褐色土。

出土遺物（第40図237）如意形口縁の甕である。口唇部下端にはへうによる刻目を施し、口縁下には2条のヘラ描き沈線があげぐる。外面および口縁部内面は刷毛目、胴部内面はナデ調整を行う。胎土は微砂粒を若干含み、焼成良好、赤みをおびた明黄褐色を主に呈する。

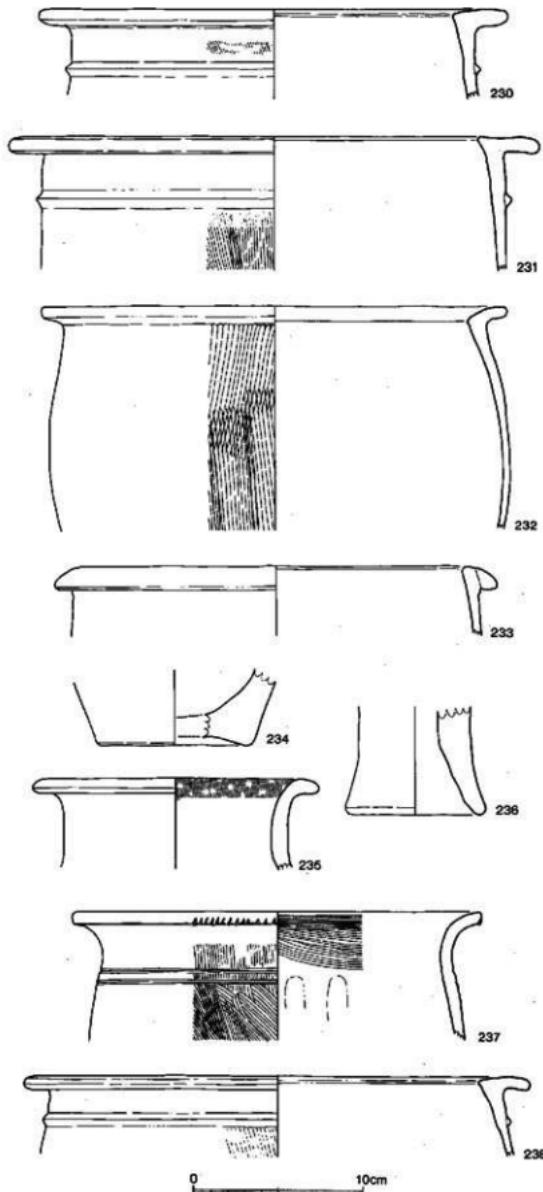
SK1812（第39図）T-28区。遺構の北側は調査区外となり全形は把握できない。現状で東西幅

2.33m、南北は0.73mが確認できる。側壁に沿った深さ6~20cm部分の3ヶ所に平坦面を作り、そこから中央部分がオーバーハングして隅丸方形状の底面となる。検出面から底面までの深さ83cm。覆土は暗褐色土。形態からすれば袋状窓穴（貯蔵穴）の可能性もある。SK1814を切る。

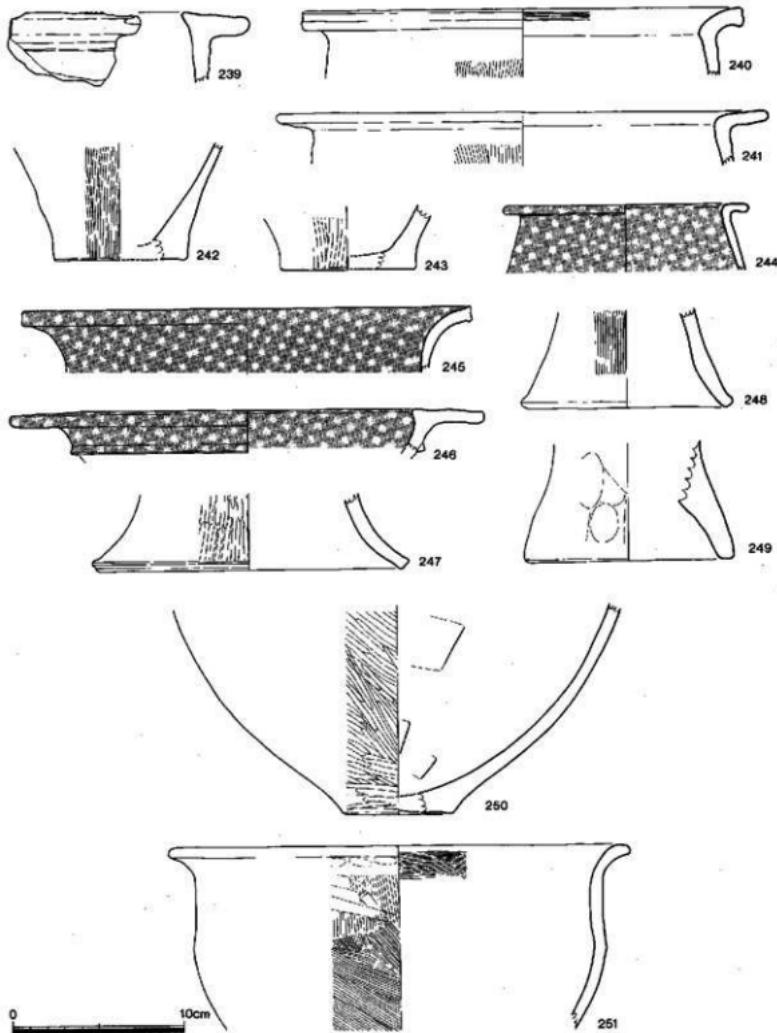
出土遺物（第40図238）
逆L字状口縁の甕片で、口縁下には三角突帯がめぐる。外面突帯下は刷毛目、突帯上から口縁部は横ナデ、内面はナデ調整を行う。

SK1814（第39図）T-28区。SK1812に東側壁を切られ、また北側は調査区外となり全形は分からぬが、現状から方形もしくは長方形の土坑と考えられる。東西幅1.95m前後、平坦な底面までの深さは53cmをはかる。貯蔵穴か。

出土遺物（第41図239~249）239~243は甕。239は逆L字状口縁部、240はくの字状口縁部をもつ。241は逆L字状口縁に近いが、口縁内面は丸味をもつ。242・243は底部で、ともに平底を呈する。これらの甕は、外面刷毛目、内面ナデ調整を行う。ただ、240の口縁上面には刷毛目調整がみられる。241の外面には煤、242・243の内底には

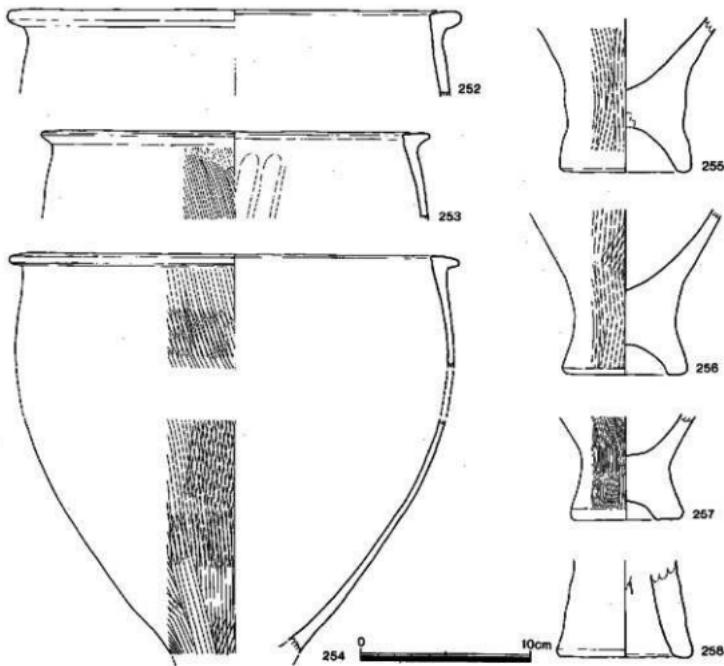


第40図 SK1456・1457・1583・1750・1767・1812出土遺物実測図（縮尺1/3）



第41図 SK1814・1824出土遺物実測図（縮尺1/3）

炭化物が付着する。244・245は壺。244は無頸壺で、口縁部は横に引き出され、上面は平坦となる。内外面とも丹塗りで、外面ヘラ研磨、内面はナデ？調整。胎土は精良。245は外反する口縁部をもつ。内外面とも丹塗りで、外面ヘラ研磨、内面には細かい刷毛目調整を行う。胎土には砂粒を含む。246・247は高坏。246は大きく外に引き出した口縁部で、口縁下には三角突帯がめぐる。残存部は横ナデ調



第42図 SK1969出土遺物実測図（縮尺1/3）

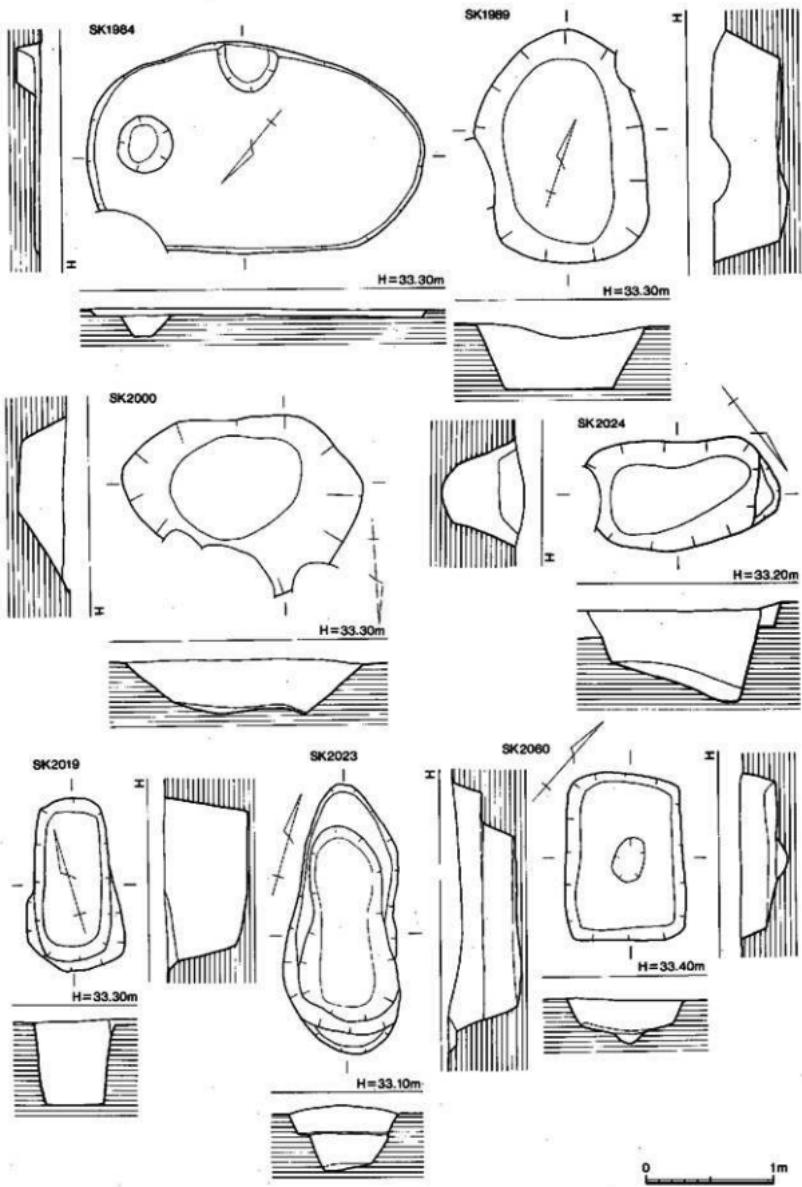
整で、丹塗り。胎土は精良である。247は脚部。外面は継のヘラ研磨、内面はナデ調整。胎土には砂粒を含み、くすんだ赤褐色を主に呈する。248・249は器台。248は薄手の作りで、外面刷毛目調整、内面は摩滅して不明。249は厚手の作りで、内外面とも指押さえの後ナデ調整で仕上げている。図示した土器はいずれも小片で、覆土から出土した。

SK1824（第39図）T-28区、SK1814の南側で検出した長軸をほぼ東西とする長方形状の土坑で、東側壁は丸味をおびる。長さ1.55m、幅1.10m前後、深さ14cm。底面は中央部がやや低く、その南側寄りに径0.36m、深さ16cmのピットがある。

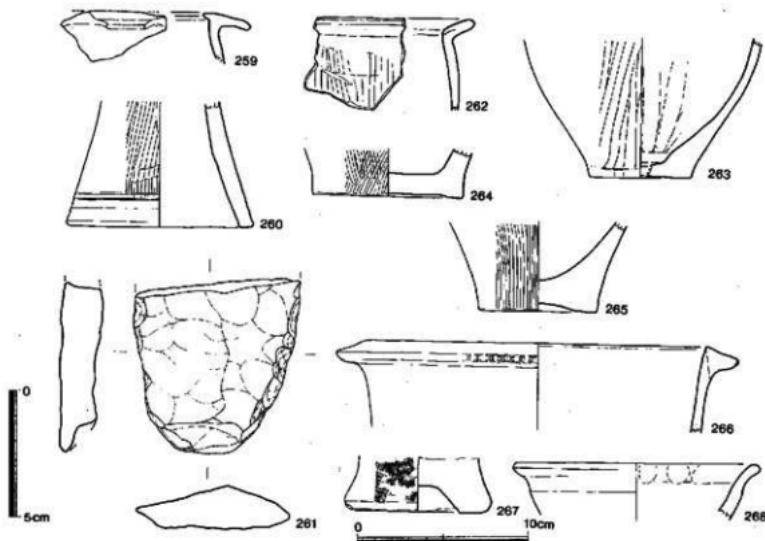
出土遺物（第41図250・251）250は平底の底部から胸部が大きく張る壺片。外面はヘラ研磨、内面は板状工具によるナデ調整で、工具の小口痕が残る。胎土には砂粒を含み、外面茶褐色を呈する。胸部外面に黒斑がある。251は鉢片。胸部がわずかに屈曲し、口縁部は大きく外反する。外面および口縁部内面は刷毛目、胸部内面はナデ調整。胸部外面下半に黒斑がある。胎土には砂粒が多い。

SK1969（第39図・図版9）V-24区。長軸をほぼ東西にとる隅丸方形状の土坑で、長さ1.20m、幅1.03m、深さは18cmと浅く、坑内西側を中心に礫や土器片が出土した。

出土遺物（第42図252～258）252～257は甕である。252は外への張りの小さい逆L字状口縁部をもつ。内外面ともナデ調整。253・254は細い断面三角形状の口縁部をもつ。外面刷毛目、内面ナデ調整。254の外面には煤が付着する。255～257は底部片。高く厚みのある上げ底を呈する。いずれも外面刷毛目、内面ナデ調整で、外面には煤が、また256・257の内底には炭化物が付着する。258は厚手の器台片。



第43図 SK1984・1989・2000・2019・2023・2024・2060実測図（縮尺1/40）



第44図 SK1989・2019・2023・2024・2060出土遺物実測図（縮尺261は1/2、その他は1/3）

内外面ともナデ調整。

SK1984 (第43図) V-24区。長軸を北東-南西にとる楕円形状土坑で、長さ2.65m、幅1.65m、深さ5cm。底面は平坦で、その東側壁下と北側寄りにそれぞれ深さ19cm、16cmのピットがある。中期の甕・壺片が少量出土したが、実測したものはない。

SK1989 (第43図) V-24区。長軸を北西-南東にとる楕円形状土坑で、長さ1.84m、幅1.37m。底面には凹凸があり、最も深いところで検出面から40cmをはかる。

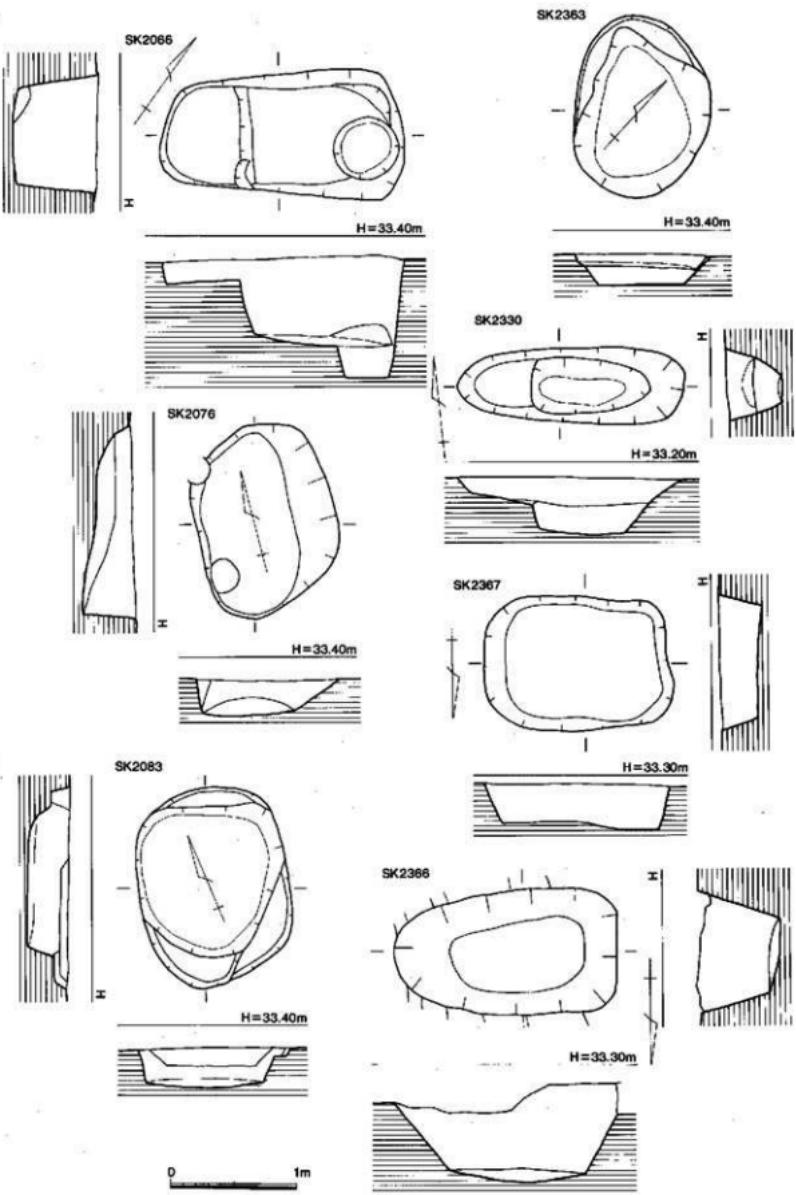
出土遺物 (第44図259・260) 259は逆し字状口縁の甕片。口縁部は内面への張り出し強く、上面は外傾する。残存部はナデ調整で、外面には煤が付着する。260は薄手の器台。外面は粗い刷毛目調整で、下端近くに2条の浅いヘラによる沈線がめぐる。内面はナデ調整。

SK2000 (第43図・図版9) V-23区。長軸を東西にとる楕円形状土坑で、長さ1.90m、幅1.42m、深さ45cm。底面には地山の礫が露出し、凹凸が著しい。覆土は黒褐色粘質土。中期の甕・壺片が少量出土したが、実測したものはない。

SK2019 (第43図) V-24区。長軸を北東-南西にとる隅丸長方形の土坑で、南側部分を中心に側壁の崩れがみられる。崩れを除いた規模は、長さ1.29m、幅0.59m、深さ65cm。側壁は垂直に近く、その形も端正なことから土壤墓とも考えられるが、墓域からは離れている。

出土遺物 (第44図261) 玄武岩製の打製石斧片である。残存長7.0cm、幅6.6cm、厚さ1.7cm。他に中期の甕・壺片などが少量出土している。

SK2023 (第43図) V-23区。長軸を北西-南東にとる細長い楕円形状の土坑で、長さ2.13m、幅0.90mをはかる。南側壁の深さ6cmに小さな平坦面を、また北から東西両側の側壁に沿った深さ22cm部分にも平坦面を作り、そこから一段下がって長さ1.33m、幅0.42mの底面となる。検出面から底面までの深さは57cm。



第45図 SK2066・2076・2083・2330・2363・2366・2367実測図（縮尺1/40）

出土遺物（第44図262～264） いずれも壺である。262はくの字状の口縁部片で、口縁端部は丸くおさめる。外面は粗い刷毛目、内面はナデ調整。263は胴下位から底部片。平底で調整は262に似る。内面には炭化物が付着する。264は平底の底部片。外面刷毛目、内面ナデ調整を行う。

SK2024（第43図） V-23区。長軸を北西-南東にとる楕円形状土坑で、長さ1.50m前後、幅1.40m。西側壁の深さ20cmに平坦面を作る。底面は東から西に傾斜し、西端で検出面からの深さ79cm。

出土遺物（第44図265） 壺の底部片である。外底部の中央が上げ底となる。外面刷毛目、内面ナデ調整。内底には炭化物が付着する。

SK2080（第43図） W-25区。長軸を北西-南東にとる長方形土坑で、長さ1.31m、幅0.92m、深さ19cm。底面は中央部分が低くなり、その中央に深さ9cmのピットがある。覆土は砂混じりの黒褐色土。独立した立柱の抜き跡とも考えられる。

出土遺物（第44図266～268） 266・267は壺。266は断面三角形の口縁部で、その端部には棒状工具で難に刻目を施す。残存部はナデ調整。口縁部を中心に煤が付着する。267は底部。台形状に張り、上げ底となる。外面は細かい刷毛目調整を行う。268は鉢。外傾する胴部から口縁部をわずかに外に引き出す。外面とも主に横ナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多い。

SK2066（第45図） W-24区。長軸を北東-南西にとる隅丸長方形の土坑で、長さ1.94m、幅0.98m。西側壁の深さ20cmに平坦面を作り、そこから東に一段下がって底面となる。検出面から底面までの深さ70cm。底面の北側壁下に深さ25cmのピットがある。

SK2076（第45図） W-24区。長軸を北東-南西にとる楕円形状土坑で、長さ1.54m、幅1.17m。東側壁は他の側壁に比べ緩やかに傾斜し、底面は南側に向かって深くなる。底面南端部での検出面からの深さは42cm。覆土は黒褐色土で、礫が混じる。

出土遺物（第46図269） 細かい目の砂岩製砥石。上部は折損する。小口を除いた4面を底面として利用する。残存長7.1cm、最大幅3.7cm。他に中期の壺片などが少量出土した。

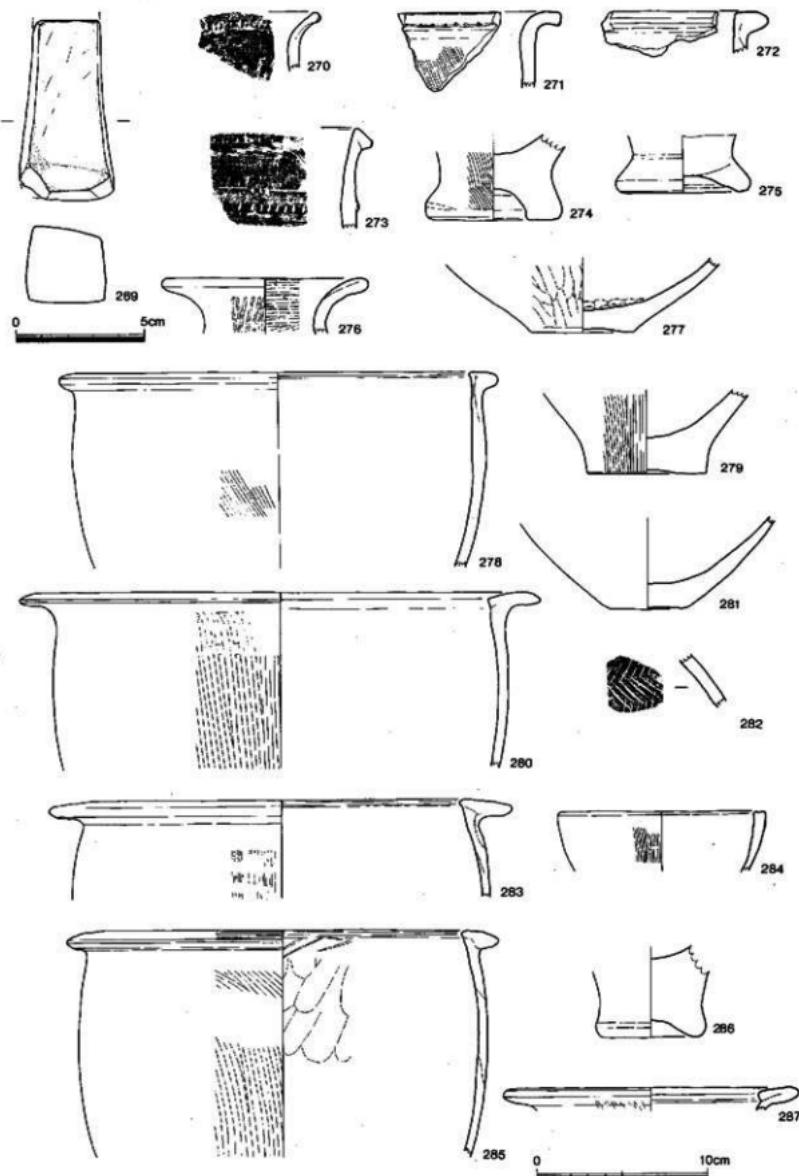
SK2083（第45図） W-24区。長軸を北東-南西にとる楕円形状土坑で、長さ1.60m、幅1.22m。北側壁下に一段、南側壁下に二段の平坦面を作り、底面はやや西寄りとなる。検出面から底面までの深さ31cm。覆土は暗褐色粘質土で、礫が多い。

出土遺物（第46図270～277） 270～271は壺。270・271は如意形口縁片で、ともに口唇部下端にヘラで刻目を施す。270は横ナデ、271は外面が刷毛目、内面がナデ調整を行う。271の口縁部付近には煤が付着する。272・273は断面三角形の口縁部をもつ。うち273はまた口縁下に低い三角突帯がめぐり、口縁端部および突带上にヘラで刻目を入れる。272は横ナデ、273は外面が刷毛目、内面がナデ調整を行う。274・275は台形状に張った底部で、上げ底となる。275は上げ底が浅く、また横ナデ調整の比較的丁寧な仕上げとなる。蓋の可能性もある。276・277は壺。276は口縁部が大きく外反する小形壺で、外面はヘラで暗文を施し、内面は横のヘラ研磨を行う。胎土には砂粒を含み、灰黄色を呈する。277は底部。わずかに上げ底で、外面はヘラ研磨、内面はナデ調整となる。胎土には砂粒が多く、灰褐色を呈する。胴部には黒斑がある。

SK2090 W-23区。長軸を北東-南西にとる楕円形状土坑で、長さ2.20m、幅0.95m。二段掘りになり、長方形の底面は北側による。検出面から底面までの深さ35cm。覆土は黒色土。

出土遺物（第46図278・279） ともに壺である。278は断面三角形状の口縁部をもち、胴部の膨らみはほとんどない。外面は刷毛目の後横ナデ、内面はナデ調整。口縁下と胴部に黒斑がある。279は底部。外面中央がわずかに上げ底となる。外面刷毛目、内面ナデ調整。

SK2137 T-31区。長軸を南北にとる楕円形状土坑である。長さ1.55m、幅0.92m、深さ30cm。



第46図 SK2076・2083・2090・2137・2162・2280・2330・2366出土遺物実測図（縮尺269は1/2, その他は1/3）

出土遺物（第46図280） 逆L字状口縁の壺である。口縁上面はわずかに内傾する。外面は粗い刷毛目、内面はナデ調整。

SK2162 T-31区。長軸をほぼ東西にとる長方形の土坑で、西側壁はSC1220に切られる。残存長1.40m、幅0.65m、深さ25cm。覆土は明茶褐色土。

出土遺物（第46図281） 小さな平底となる壺の底部である。外面は剥落が著しく調整不明、内面ナデ調整。胎土には砂粒が混じる。外面は赤褐色で、上位には黒斑と考えられる黒色部分が広がる。

SK2286 U-30区。SC1140Aに切られ南側壁しか残らない。残存する東西幅0.50m、深さ36cm。

出土遺物（第46図282） 壺の肩部片で、二枚目の腹縁で羽状文を施す。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。胎土には砂粒が多く、暗褐色から黒褐色を呈する。

SK2330（第45図） T-31区のSC1220上面で検出した。長軸をほぼ東西にとる細長い梢円形状土坑で、長さ1.77m、幅0.61m。西側壁の深さ18cmに平坦面を作り、東側に一段下がって底面となる。検出面から底面までの深さ45cm。覆土は暗褐色土。

出土遺物（第46図283・284） 283は逆L字状口縁の壺である。口縁上面は外傾し、端部は丸くおさめる。外面は刷毛目の後横ナデ、内面はナデ調整である。284は小型の鉢。口縁は胴部から厚みを増して直立し、上面は中くぼみとなる。外面刷毛目の後横ナデ、内面はナデ調整で仕上げる。

SK2363（第45図） X-31区。長軸を北西-南東にとる梢円形状土坑で、長さ1.44m、幅1.08m。北側壁に沿った深さ7cmに平坦面を作り、そこから南側に一段下がって卵形の平坦な底面となる。検出面から底面までの深さ24cm。覆土は黒褐色土である。出土遺物はない。

SK2366（第45図） Y-24区。SD0432に切られた状態で検出した。長軸を東西にとる梢円形状土坑で、東側壁は丸味を帯び、西側壁は直線的になる。長さ1.75m、西側幅1.00m、深さ73cm。

出土遺物（第46図285～287） 285・286は壺。285は断面三角形状の口縁部をもち、胴部はわずかに膨らみを見せる。外面は刷毛目の後板状工具によるナデ、内面は指押さえの後横ナデ調整を行う。286は厚みのある底部で上げ底となる。残存部はナデ調整。287は壺の口縁部片。外反する口縁上面にさらに粘土帶を貼り付け口縁部を作る。残存部はヘラ研磨とみられ、丹塗りの可能性がある。胎土には砂粒が多い。

SK2367（第45図） Y-24区。長軸を東西にとる隅丸長方形の土坑で、長さ1.45m、幅1.07m、深さ34cm。底面には凹凸がみられる。中期の壺、壺片が少量出土したが、実測したものはない。

4) 溝状遺構

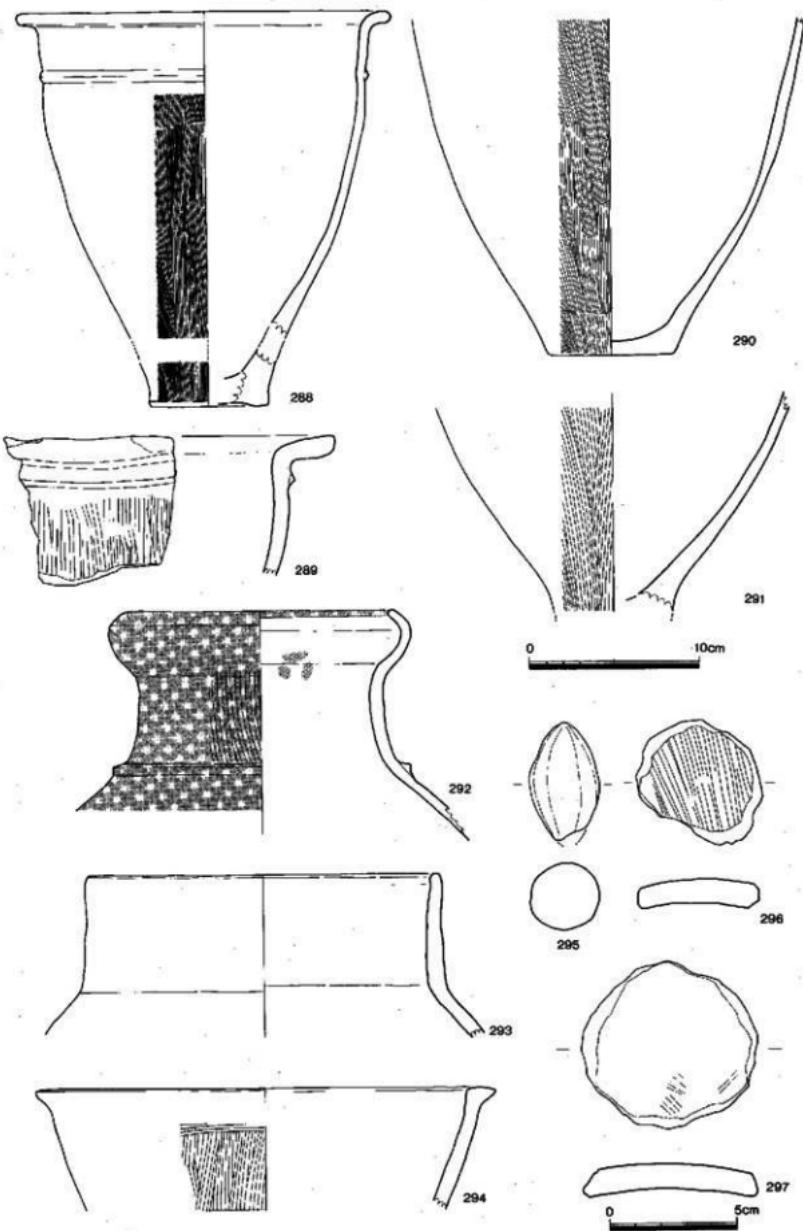
調査区西側で5条検出した。いずれも単独なもので、長さ、幅とも小さい。

SD1069 V-29区。SC0640竪穴住居の東側から北東に3.45m走る幅0.25m、深さ7cmの浅い溝である。断面はU字形状を呈し、覆土は黒褐色土と黄褐色土が混じる。K0165壺棺墓を切る。中期の壺片などが少量出土したが、実測したものはない。

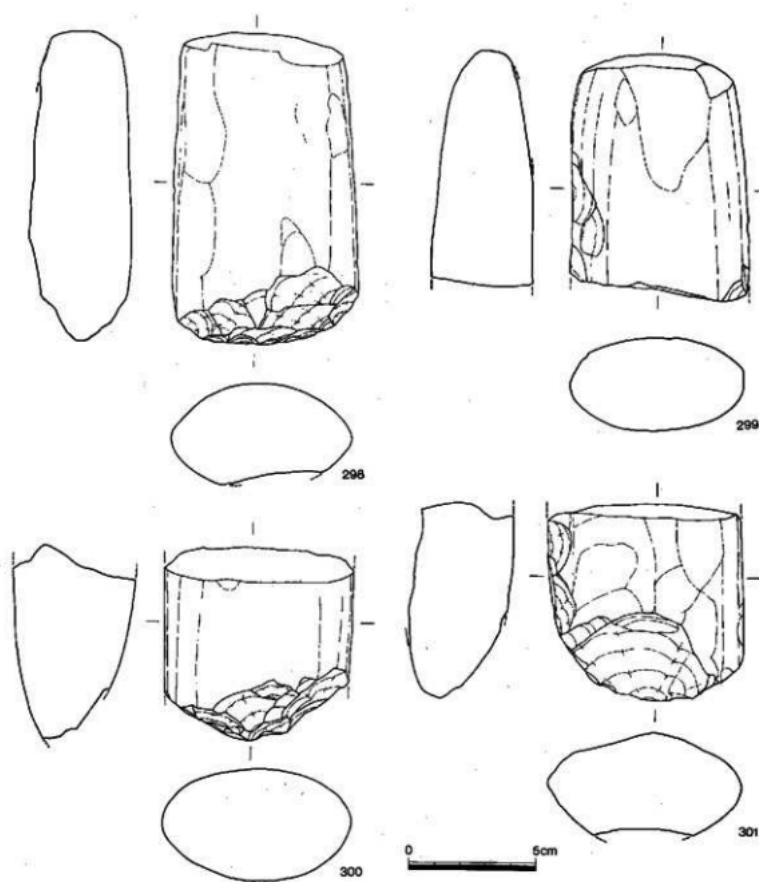
SD1353 T-29区。ほぼ南北に3.70m走る幅0.40m、深さ10cm前後の溝である。断面はU字形に近く覆土は黒褐色土。SB0220掘立柱建物の柱穴に切られる。中期の壺片などが少量出土した。

SD1740 U-29・30区。SC0952竪穴住居の上面から6.20m北に走り、SK1750土坑の下で終わる幅0.35m、深さ15cm前後の溝である。断面はU字形に近く覆土は暗灰褐色土。SB0212掘立柱建物を切る。逆L字状口縁壺、壺、器台の小片が少量出土した。

SD1915 U・V-27区。調査区西側端から北東に10m走る幅0.30m前後の溝。深さは4～10cmと浅い。SK2037土坑に切られる。鋤先状口縁の壺など小片が少量出土した。



第47図 その他の出土遺物 1 (縮尺295~297は1/2, その他は1/3)



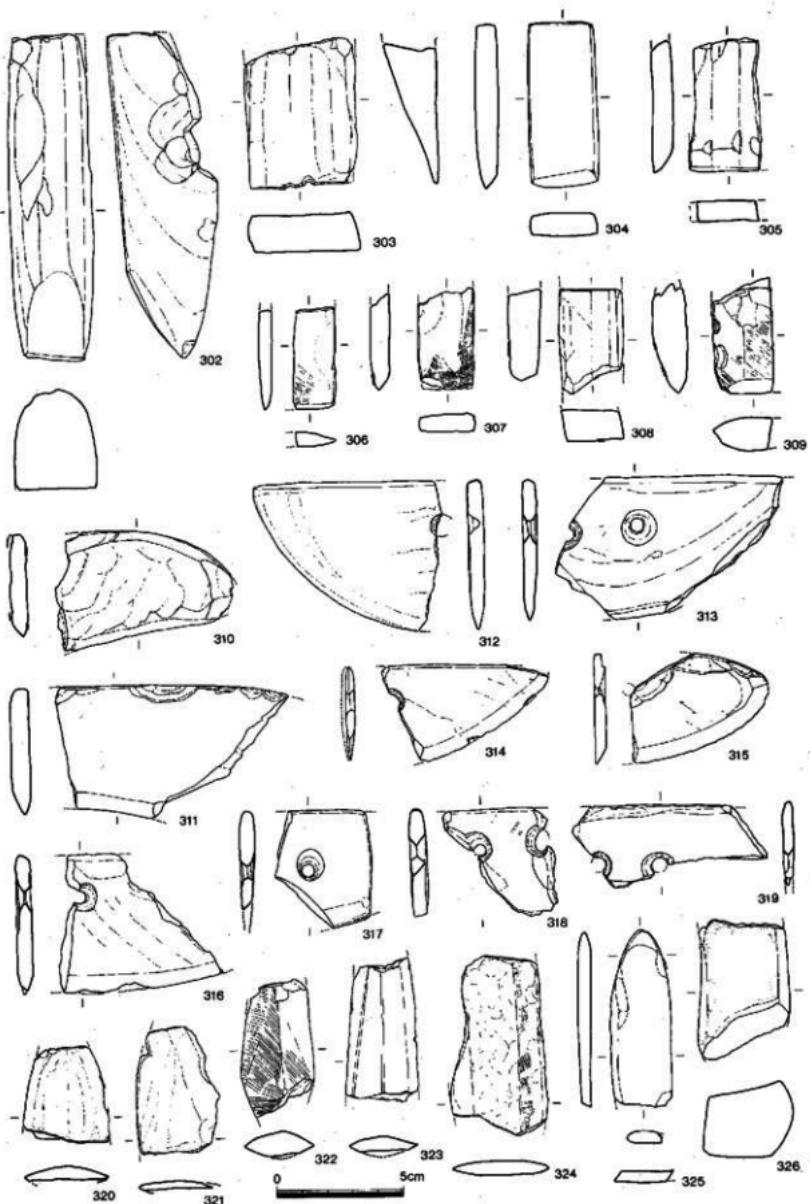
第48図 その他の出土遺物2 (縮尺1/2)

SD2368 X-23区。調査区北端を北北西に0.9m走るり調査区外に延びる幅0.30mの溝である。深さは15cmで、断面はU字形に近い。中期の壺片などが少量出土したが、実測したものはない。

5) その他の出土遺物

ここではピット、表土層、後世の遺構から出土した弥生時代遺物についてみてゆく。

土器(第47図288~294) 288~291は壺。288は如意形口縁をもち、口縁下には低い三角突帯がめぐる。胴部は張りがなく、底部は厚みをもちわざかに上げ底となる。289はくの字状口縁片で、口縁直下には三角突帯がめぐる。290・291は胴中位から底部にかけて残存するもので、290の底部は平底となる。以上の壺はいずれも外面刷毛目、内面ナデ調整を行う。292・293は壺。292は袋状口縁の壺で、



第40図 その他の出土遺物 3 (縮尺1/2)

頸部と胴部の境には三角突帯がめぐる。外面は胴部がナデ、頸部が刷毛目、口縁部が横ナデ、内面は頸部から胴部にかけてナデ調整となる。口唇部から外面にかけて丹塗を施す。293は直口壺。頸部は直立し端部は丸くおさめる。外面とも主にナデ調整で仕上げる。294は鉢。外傾する胴部から口縁部を短く外に引き出す。外面刷毛目、内面ナデ調整。288・290・291はSK0622、289はP1991、292はSD0971、293はP2307、294はSD0443からの出土である。

土製品（第47図295～297）295は投弾。一端を欠くが長さ5.0cmに復元できる。幅2.8cm、厚さ2.7cm。296・297は甕の胴部片を再利用した土製円盤。296は径5.0cm、厚さ0.9cm。上面には甕の刷毛目が残る。297は径6.9cm、厚さ1.0cm。上面にはナデ消した刷毛目調整痕がわずかに認められる。295はP1632、296はP2001、297はP1359からそれぞれ出土した。

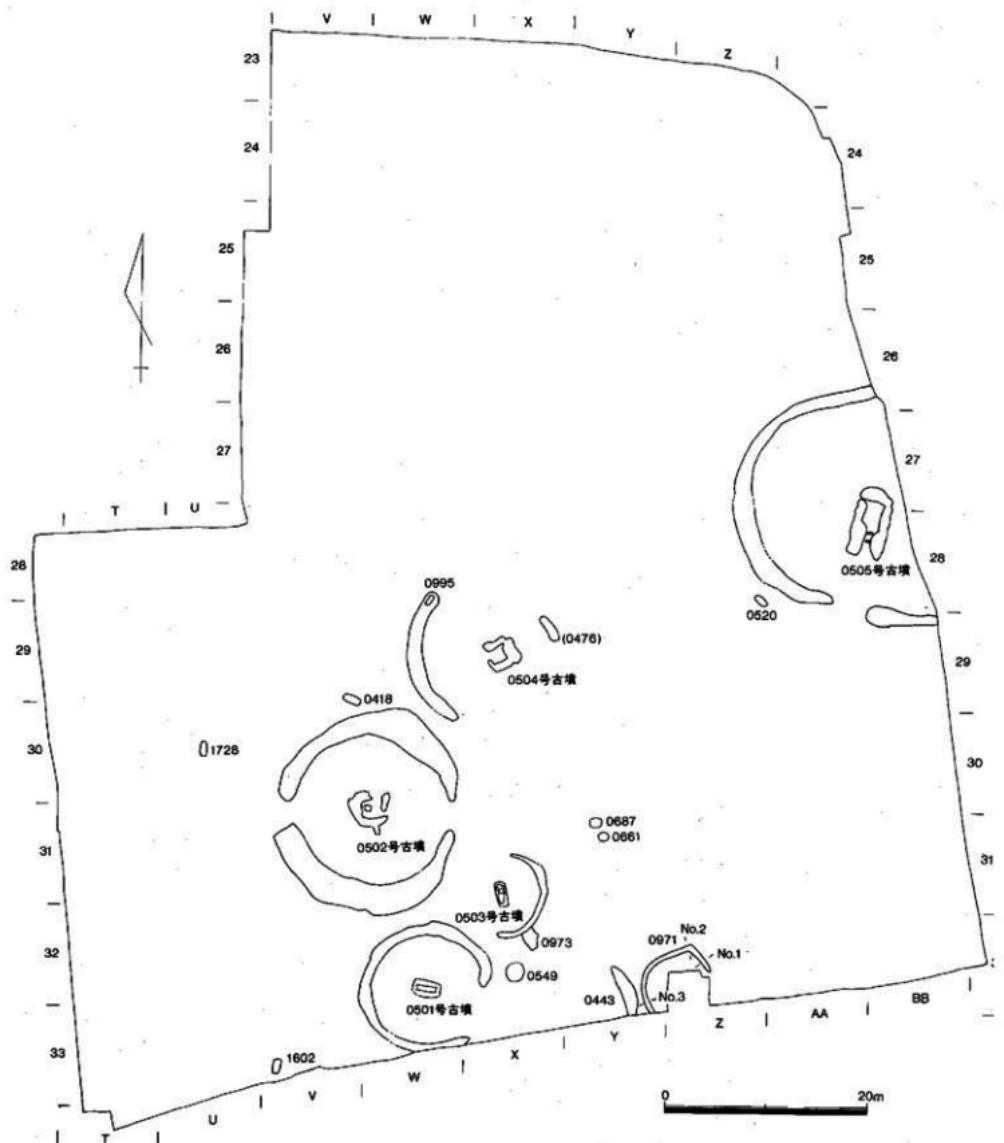
石器（第48・49図298～326）298～301は玄武岩製の太形蛤刃石斧である。いずれも折損したり、使用によると考えられる二次的な剥離で、原形を保つものはない。298・301の器面には敲打の痕跡がうかがわれる。298の現存長12.3cm、幅7.4cm、厚さ4.0cm、重量644g。302は頁岩質砂岩製の抉入片刃石斧。基部が一部欠け、抉り付近の器表に二次剥離が見られるだけのほぼ完形品で、長さ13.0cm、幅3.2cm、厚さ3.9cm、重量294gをはかる。303は片刃石斧を砥石に再利用したもの。304～308は扁平片刃石斧。304は長さ6.5cm、幅2.8cm、重量34gの完形品で、他は305・308が基部を、307が基部と側辺を、また308が刃部を欠く。308は砥石として再利用された可能性がある。309は断面が凸レンズ状となった両刃の石斧である。これら303～309までの石斧の石材は凝灰質安山岩フォルンフェルス製。310・311は石鏃。310は刃先片、311は刃先も基部も欠損した破片である。石材はともに頁岩質砂岩である。312～319は石包丁の破片である。背部と刃部が残るものは両刃で半月形を呈するが、312・313のように幅の広いものと、314・317のように細身のものとがある。ただ315だけは杏葉形に近く、片刃となっている。残存する紐かけ孔はすべて両面からの穿孔である。用いられた石材は312～316・319が頁岩質砂岩、317が泥岩、318が輝緑凝灰岩である。320～324は石剣の破片である。残存幅2.9～3.8cm。剣身断面は322・323のように菱形を呈するものと扁平なものがある。石材は320・322が頁岩質砂岩、他は凝灰質安山岩フォルンフェルスを用いる。325は先端部だけを丸く磨きだして刃としたもの。側辺に加工は見られない。凝灰質安山岩フォルンフェルス製。326は砂岩製の砥石。砥面として利用しているのは図の上面と左侧面である。右側面は丸みをもった作りとなる。以上の石器は298・300が0505古墳、299・320が0502古墳、301がP0514、302がP0523、304・311・316が検出面、303・315がSD0492、305がP2262、306がP1882、307がP1885、308・309が0504古墳、310がP1193、312がSK2366、313がSK0687、314がP1357、317がSD0971、318がP1666、319がP1871、321がP1843、322がP1149、323がP0414、324がP1189、325がSK1213、326がP1857からそれぞれ出土した。

3. 古墳時代の遺構と遺物

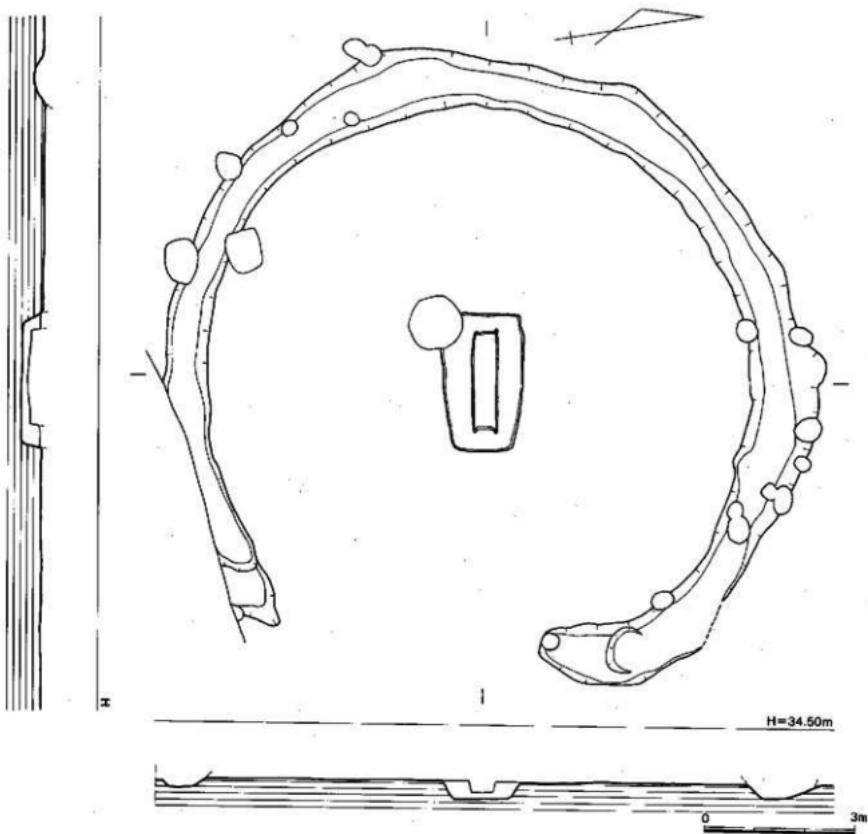
調査区全体で古墳時代の遺構・遺物は比較的少量である。検出された遺構は埋葬遺構を主体とし木棺墓1基、小型の竪穴式石室1基、石材の大半を抜き取られた横穴式石室3基を検出する。その他土坑数基、溝2条、他ピットを確認している。竪穴住居等生活関連遺構の検出はほとんどなく、生活域としての使用はあまり行なわれず、埋葬域としての利用が行なわれていたようである。

1) 0501号古墳（第51図・図版11）

調査区中央南端部分で検出する。外径で13mの周溝を有し、中央に組み合わせ式の木棺墓を配する。



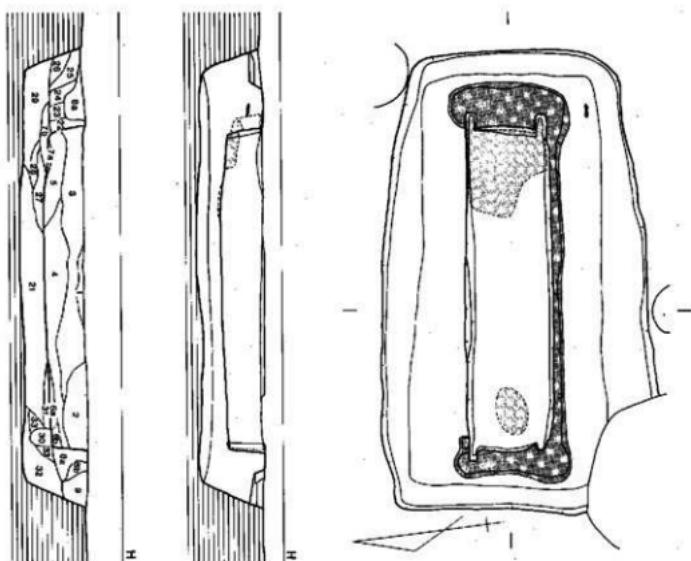
第50図 古墳時代遺構分布略図（縮尺1/500）



第51図 0501号古墳全体図（縮尺1/100）

盛り土はすでに失われており確認できない。周溝は幅1m、深さ10~25cmを測り断面はほぼ浅皿状を呈する。

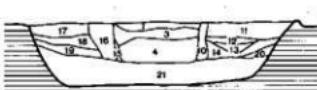
埋葬主体部（第52図・図版13） 周溝内中央に組み合わせ式木棺墓1基を検出する。木棺墓掘り方は長軸2.7m、短軸1.25~1.7mを測るやや歪んだ隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。墓坑底面から約10cm程度地山土を充填し（21層）その上面に木棺を据えている。木棺の主軸方位はN-81°-Wである。またこの際東側木棺小口部周辺に赤色顔料を塗布している。木棺は長さ1.9m、幅50cm、検出面からの深さ50cmを測る。木質はまったく残存していないが土層観察などから推定される棺材の厚みは5cm強である。側板は長さ2.05mを測り、両小口部分で10cm弱ほどはみ出し、この間に長さ45cm程の小口板を差し込んでいる。また棺蓋は検出できていない。棺の周辺には北側部分を除いて上半部分に目張りの粘土を巻きつけており、特に小口部分では厚く巻いている。棺底には東側小口部分及び西側小口部分に偏って多量の赤色顔料が検出されている。顔料は特に東側に厚く、発色も



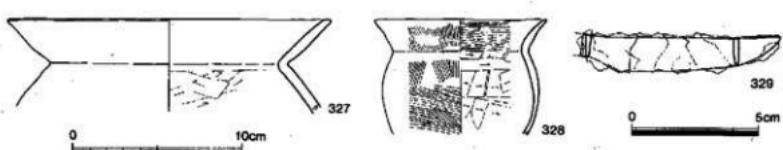
- 0501号古墳主体部
- 1 断続するおびた淡褐色粘土
 - 2 淡褐色粘土質土
 - 3 1に地にブロッタをはじる
 - 4 小林をおびた淡褐色粘土質土
 - 5 黄色土・黄色土・赤色粘土 (ベンガラ) 多い
 - 6 a 黄色土・黄色土・赤色土 (ベンガラ) (高い)
 - 6 b 黄色土・黄色土 (ベンガラ) (低い)
 - 7 a 黄色土・黄色土・赤色粘土 (ベンガラ) 鮫形
 - 7 b aと同じ、他の段階前に巻く
 - 8 a 白白色粘土
 - 8 b 白白色粘土 (緑褐色土が多く巻じる)
 - 9 緑褐色粘土 (緑褐色土ブロック巻じる)
 - 10 緑褐色粘土質土
 - 11 緑褐色粘土 (黄褐色土ブロック若干巻じる)
 - 12 黄褐色粘土質土
 - 13 11に巻き土巻じる
 - 14 11より高い
 - 15 黄褐色粘土 (白色粘土含む)

- 16 黄褐色を帯びる褐色土
- 17 黄褐色を帯びる褐色土
- 18 12と同じ
- 19 13と同じ
- 20 淡褐色粘土質土 (細砂後じり)
- 21 淡褐色粘土質土
- 22 黄褐色を帯びた褐色土
- 23 黄褐色土・黄褐色土
- 24 黄褐色土・黄褐色土
- 25 黄褐色土がうすく入る
- 26 黄褐色土・黄褐色土
- 27 25より高い
- 28 26と同じ
- 29 1と同じ、樹根が多い多く入る
- 30 12と同じ
- 31 第二色粘土質土 (小山状窓跡)
- 32 内側の黄褐色土
- 33 緑褐色土
- 34 淡褐色粘土質土

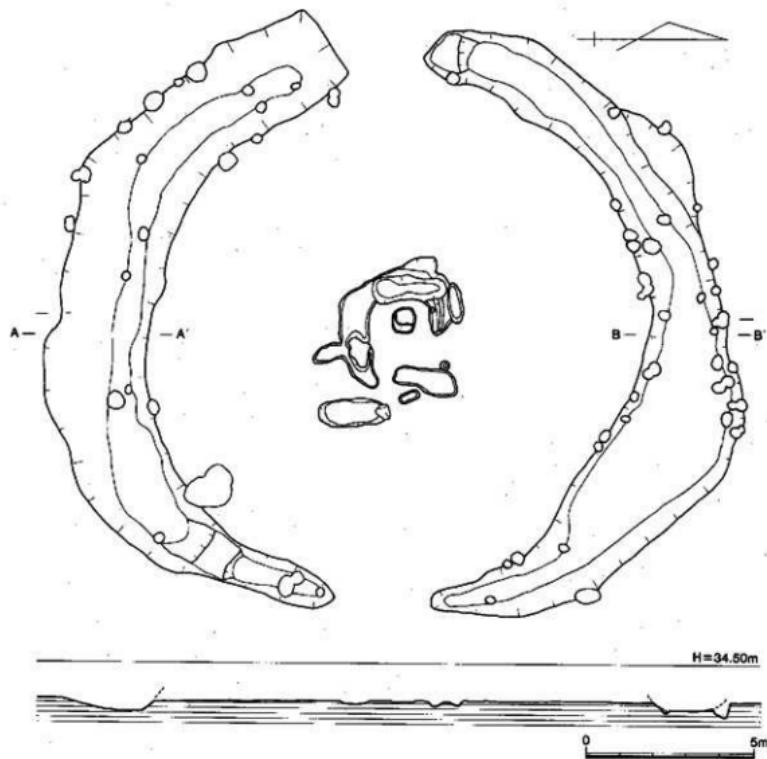
0 1m



第52図 0501号古墳主体部実測図 (縮尺1/30)



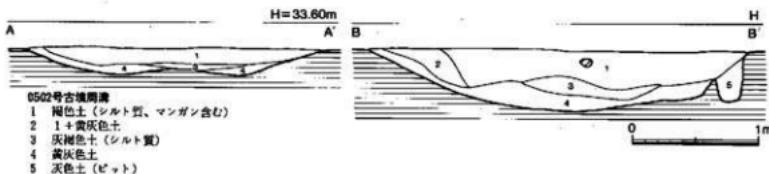
第53図 0501号古墳出土遺物実測図 (縮尺329は1/2, その他は1/3)



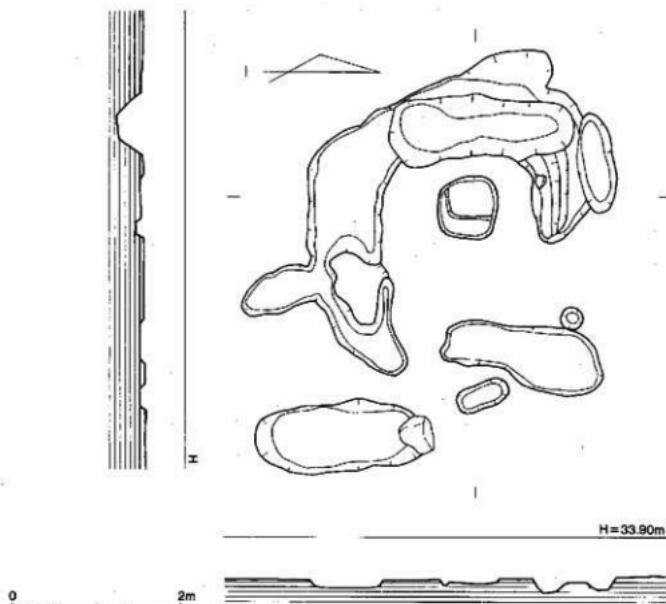
第54図 0502号古墳全体図 (縮尺1/150)

良好である。東側部分では棺底の直下にも顔料の塗布が認められこの部分に特別の意識が払われていたことが考えられる。これらの状況から東側に頭位がおかれていたと考えられる。また埋土内にも部分的に顔料が散在している。顔料にはベンガラが使用されている。棺外副葬品として鉄刀子1点が出土した。古墳時代前期に位置付けられる。

出土遺物（第53図327～329） 土師器壺・壺、鉄器等が少量出土するのみである。327・328は周溝からの出土である。327は布留式壺口縁部である。口縁部はやや外面が膨らむがほぼ直線的に伸び、端部はわずかに外面に引き出して端面を平坦に仕上げる。口縁部内面から胴部外面は横なでを行い、下端に一部横刷毛が残る。胴部内面は屈曲部やや下位から横方向の粗いヘラ削りを行なう。器壁は厚み5mm強を測り厚手のつくりである。胎土には径1mm以下の砂粒を少量含む。328は小型の壺である。口縁部内面には粗い磨き状の調整が行なわれる。外面は口縁部及び肩部には継刷毛、これ以下には斜方向の刷毛目を施し、口縁部はこの後に粗い横なでを行なっている。329は東側棺外から出土した鉄製刀子である。残存長5.7cm、刃部最大幅1.3cmを測る。



第55図 0502号古墳周溝土層実測図（縮尺1/40）



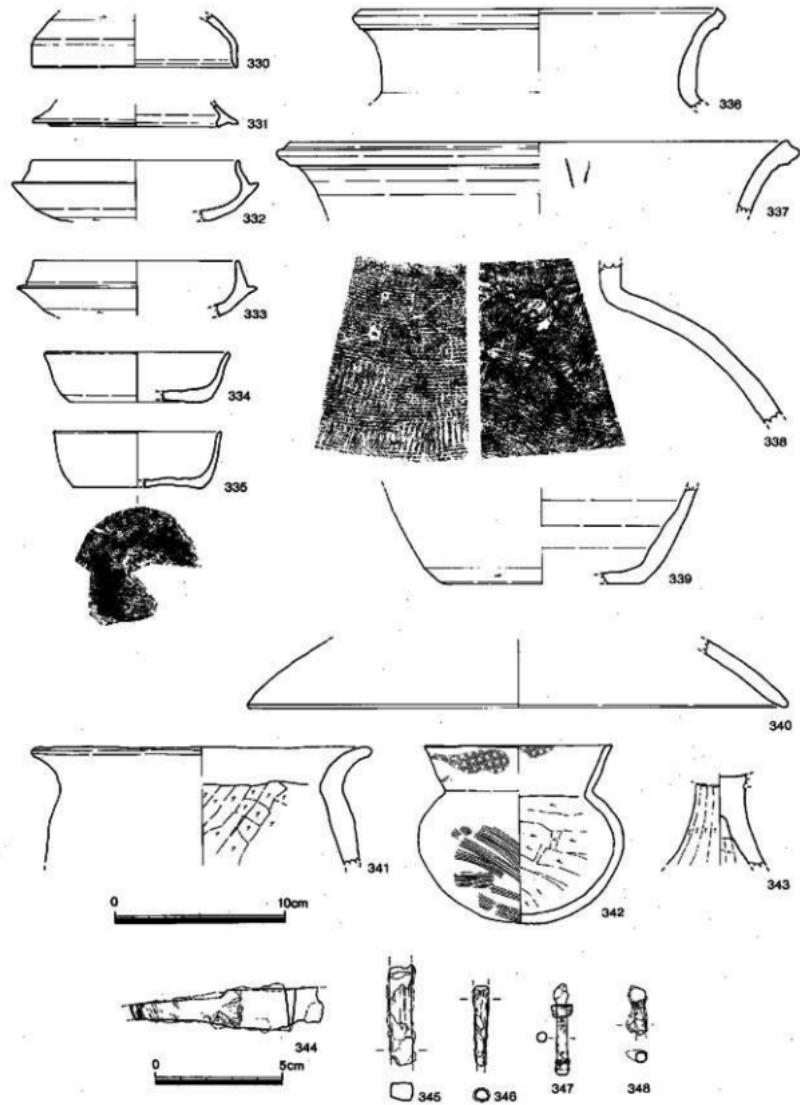
第56図 0502号古墳主体部実測図（縮尺1/60）

2) 0502号古墳 (第54・55図・図版11)

0501号古墳の北側に位置する。墳丘・石材はすでに失われ、周溝及び石室の石材抜き跡が残るのみである。周溝は外径で20mを測り、東西両方向で開口している。周溝は掘り方がやや不整となるがおよそ幅1~3m、深さ20~60cmを測り、比較的北側の周溝が浅くなっている(第55図)。

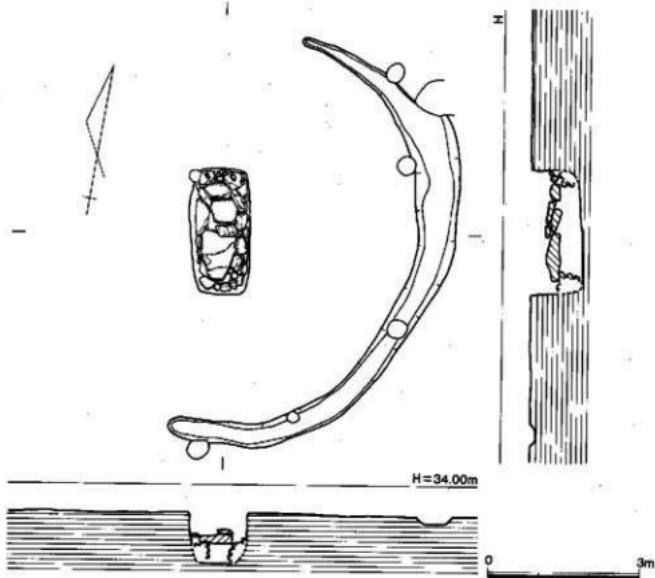
埋葬主体部 (第56図) 横穴式石室と考えられるが、石室は幅約50cm程度の抜き跡のみを確認している。およそその主軸方位はN-90°-Wである。掘り方の内法で計測すると石室内法は一辺2m程度の略方形に復元できるが、本来的にはやや長方形のプランをなすものであろうか。抜き跡は西側部分で30cmとやや深くなるが、多くは10cm程度の浅いものである。掘り方形状などから石室は東側に開口する可能性が高いものと考えられるが、残存状況が不良なため詳細は不明である。

出土遺物 (第57図330~348) 330~344は周溝出土、345~348は抜き跡出土遺物である。330~340は須恵器である。330は蓋である。復元口径11.9cmを測る。天井部は割合深い位置まで回転ヘラ削りを行



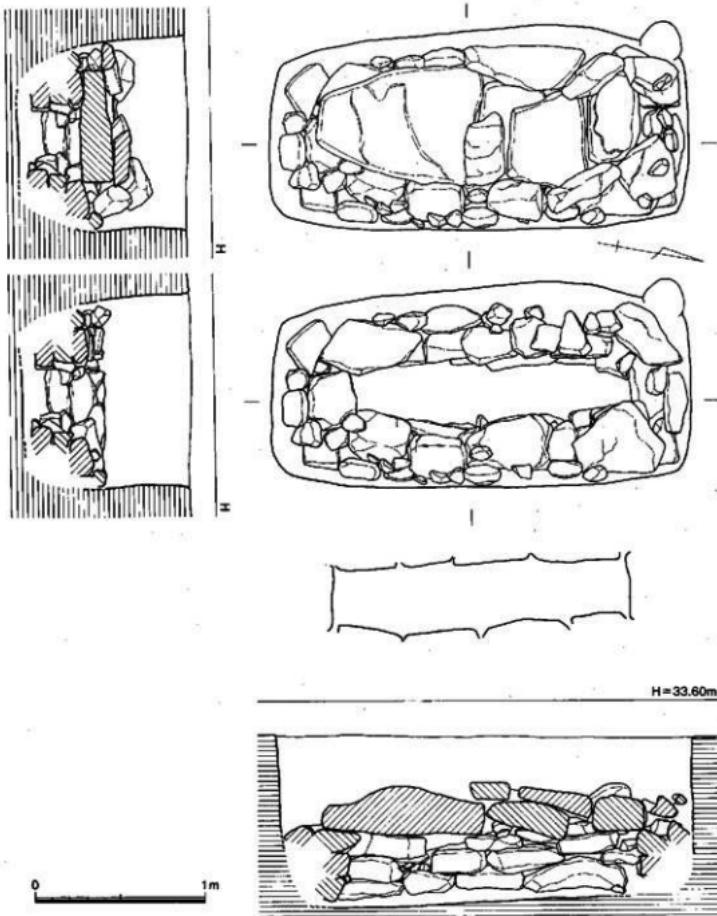
第57図 0502号古墳出土遺物実測図 (縮尺344～348は1/2, その他は1/3)

う。外面屈曲部分及び口縁部内面に痕跡的な沈線を有す。331は蓋としたが返りの短い壊身の可能性も残される。焼成は良好であるが、色調はセピア色を呈する。332・333は壊身である。外底面の回転



第56図 0503号古墳全体図 (縮尺1/100)

ヘラ削りは2/3以上に行なわれている。いずれも立ち上がりはやや内傾するが高く立ち上がる。334・335は平底の壺である。復元口径はそれぞれ10.6、9.7cmを測る。また外底面は回転ヘラ削りを行なう。336～338は壺である。336は口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。また口縁部下端外面に1条の沈線を有する。337は口縁部外面が張り出している。口縁部下端外面には1条の沈線を施す。338は胴部上半部分の破片である。外面には縦方向の平行の叩き痕の上面からかき目上の横線を施す。内面には青海波文の當て具痕跡を残す。器壁の厚みは1cmである。339は壺の底部付近の破片であろうか。内面は回転なでを行い、外面は屈曲部分や上方で回転ヘラ削りを行いこれより上は回転なでによる。外底面にはなでの痕跡が残る。340は脚裾部分の小破片である。調整は回転なでにより口縁端部は丸くおさめる。また口縁部内面には痕跡的な段を有する。341～343は土師器である。341は壺である。口縁部は「く」字に屈曲し、横なでを行なう。胴部は内面には斜め方向のヘラ削り、外面は粗いなでを行なう。342は壺である。口縁部は外面がわずかにふくらみ、端部をやや外方に引き出している。胴部は内面横方向のヘラ削りを行い、外面は最大径より上は横なで、下は斜めの刷毛を行なう。343は高壺である。外面は縦方向の板なでを、内面は横方向にヘラ削りを行なう。344～348は鉄器である。344は刀子である。残存長は7.5cmを測る。刃部幅1.5cm、背の厚み4mmである。345は不明鉄器である。木質が残存しており基部と考えられる。残存長4cm、断面は9mm×7mmの隅長方形を呈する。346は鐵の茎部であろうか。残存長3.1cmを測る。347・348は弓金具であり、軸部分には木質が残存している。347は長さ3.6cm、軸部径4mmを測る。348は欠損品で残存長1.9cm、軸部径4mmを測る。

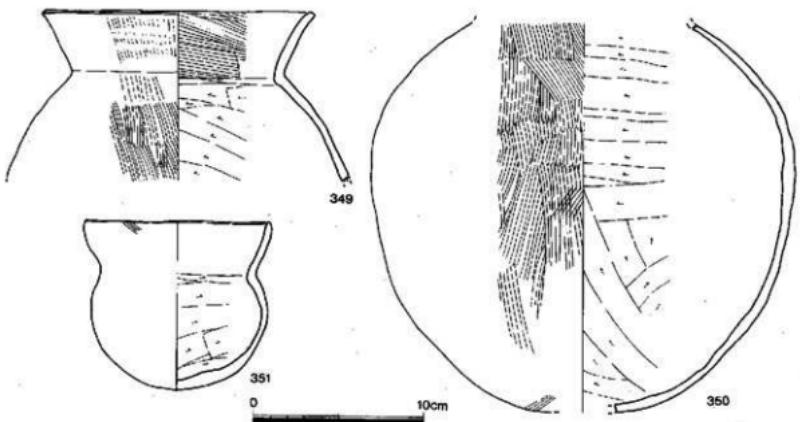


第59図 0503号古墳主体部実測図（縮尺1/30）

3) 0503号古墳 (第58図・図版12)

0501・0502号古墳の東側に位置する。東側にやや歪な半円形の周溝が残存する。周溝は幅1~1.5mを測り、深さ20cm程度である。

埋葬主体部 (第59図・図版13) 周溝のはば中央に竪穴式石室を構築する。石室の主軸方向はN-10°-Wである。使用石材はいずれも花崗岩である。石室は平面2.45m×1.15mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは1m程度を測る。石室内にはすでに土砂が流入しており内側はほぼ上砂で満たされていた。石室は掘り方の底面より厚さ10~20cmの板石を3段積み上げ、間隙に粘土・小砾を詰めて



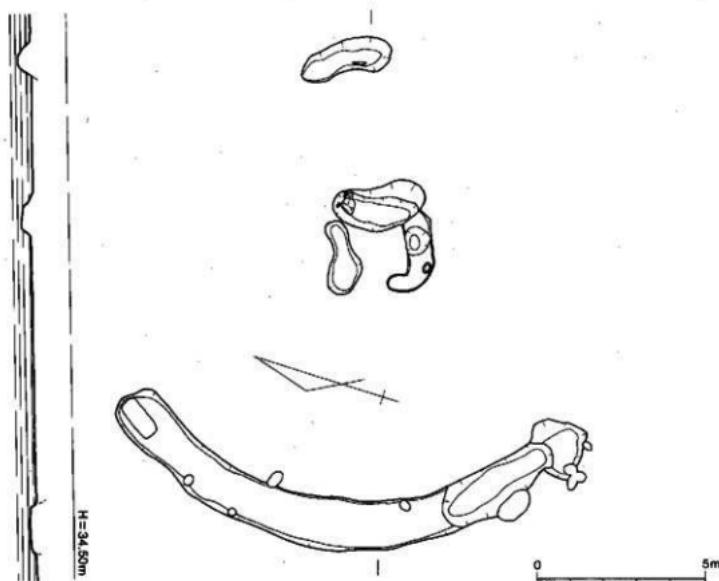
第60図 0503号古墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

いる。側辺部よりも小口部分により大きな石材が使用されている。石室内法は $1.7 \times 0.4\text{m}$ 、高さ 0.4m を測り、底面には石材は認められない。天井石は5石用い、中でも南側では $1 \times 0.7\text{m}$ で厚さ 30cm の大きな板石を使用しておりこれにより石室のほぼ半分を覆っている。北半分はこれよりも小さな石材で天井を構架している。また南側では天井石周囲にも板石を並べている。石室最上面と天井石の間には黄褐色粘土が充填されている。天井石内面及び石室内面には石材に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されていた。石室内からは出土遺物はない。なお石室については田面の切り下げにより破壊される可能性がなかったため完掘を行なわず、石室内実測・精査の後埋め戻している。

出土遺物（第60図349～351） いずれも周溝から出土した土師器である。349・350は壺である。349は口縁部は比較的長く外方に伸びる。外面は口縁部を継刷毛の後横なでを行い、胴部は継刷毛のみである。肩曲部分の下方には粗い横方向のヘラ削りが行なわれる。内面は口縁部に刷毛目、胴部は肩曲部分まで横方向のヘラ削りを行なう。350は胴部である。接合はしないが349と同一個体の可能性もある。外面は全体に継刷毛を行い、内面は上半横方向、下半継方向のヘラ削りを行なう。底部付近には煤が付着する。351は小形丸底壺である。胎土には砂粒が多く含まれ、調整も粗雑である。胴部は外面なで、内面ヘラ削りを行い、口縁部は内外面ともになでによる。

4) 0504号古墳（第61図・図版13）

0503号古墳の北東側に位置する。墳丘・石材はすでに失われ、周溝及び石室の石材抜き跡が残るものである。周溝は石室抜き跡西側に弧状に残り、東側では上坑状となる。この部分で計測すると周溝は外径で 15m を測る。西側周溝は掘り方が幅 1.4m 、深さ 10cm を測り、北端部分のみやや深くなり 20cm 程となる。この北端部分でSX0995土坑を検出している。また東側の土坑状の周溝（第63図）は長さ 2.7m 、最大幅 0.9m を測りやや弧状にふくらむ。検出面からの深さ $10\sim 40\text{cm}$ を測り北側に向かって浅くなる。床面から 10cm ほど浮いた第3層中から鉗、鎌、刀子等現在確認できるもので6個体の鉄器がひとまとまりで出土している。鉄器には布痕が銷着していると共にきれいに長軸を揃えて銷着していることから、布にまかれて一括で埋納されたものと考えられる。本遺構は位置関係及び形状から周溝の一



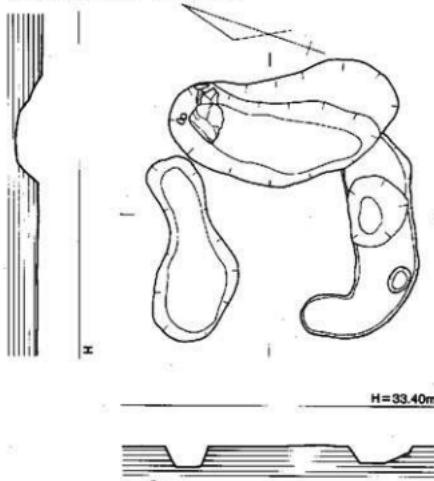
第61図 0504号古墳全体図（縮尺1/150）

部と考えられ、周溝への鉄器埋納例として注目される。また本古墳は弥生時代前期末～中期初頭を中心とした墳墓群の上部に乗っており、本来この区画墓内の盛り土上に構築された可能性が高い。

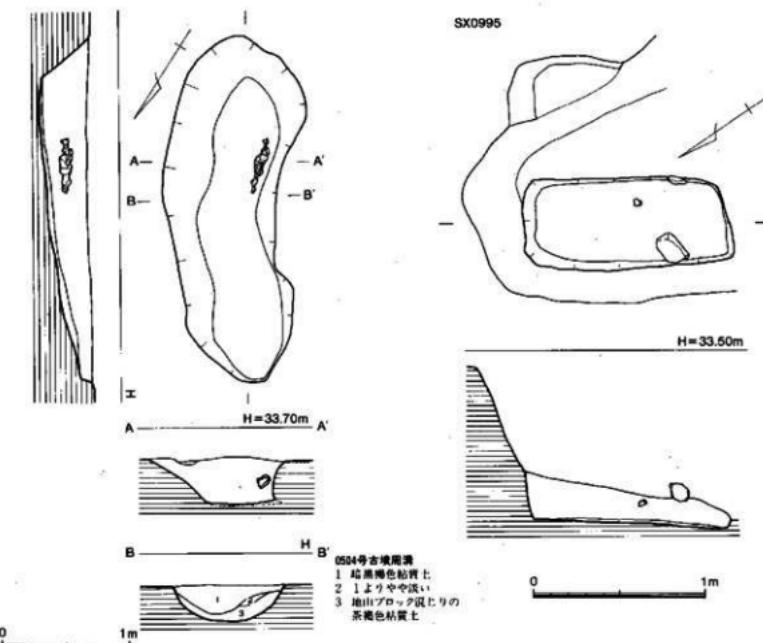
埋葬主体部（第62図） 石室は抜き跡のみを確認している。主軸方向はおよそN-72°-Eである。抜き跡は幅1m前後、深さ5～20cm程度を測る。抜き跡はほぼ方形にめぐり掘り方の内法で計測すると1.4m程度の略方形に復元できるが、本来的な規模・形状は不明である。

SX0995（第63図・図版14）

西側周溝の北端部分で検出した



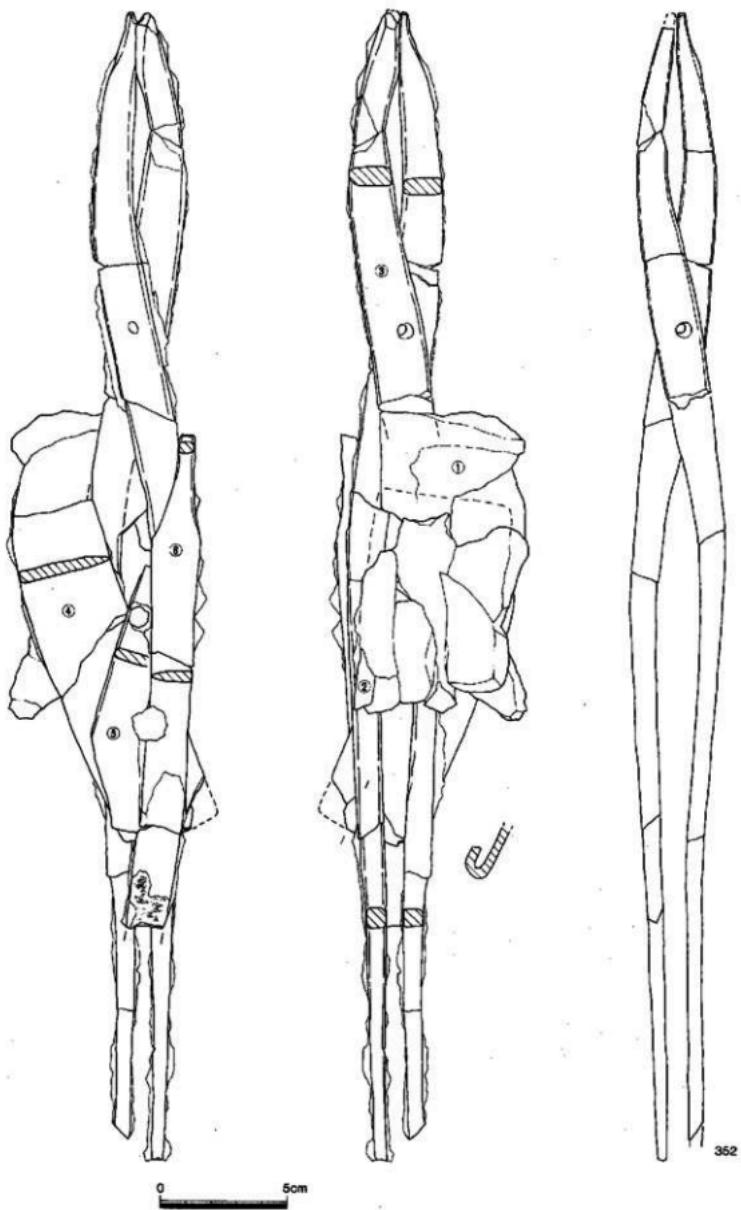
第62図 0504号古墳主体部実測図（縮尺1/60）



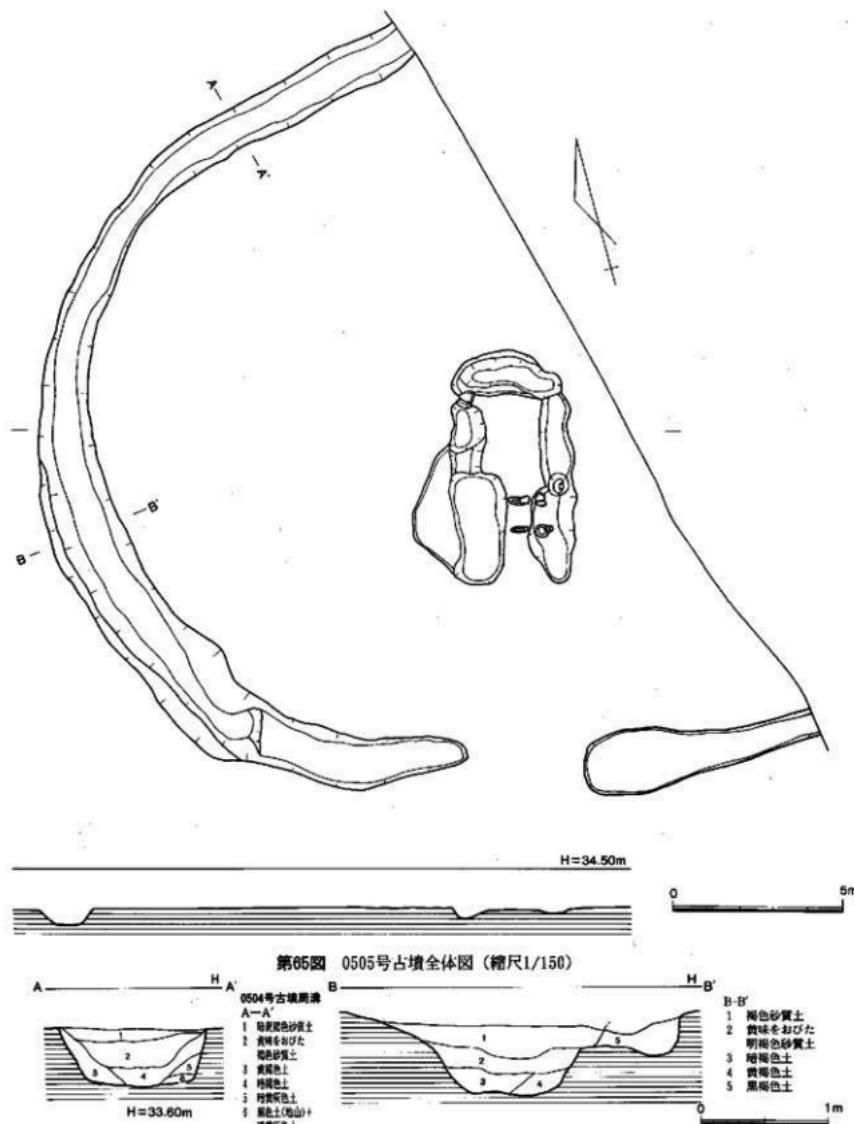
第63図 0504号古墳周溝遺物出土状況、SX0995実測図（縮尺1/30, 1/40）

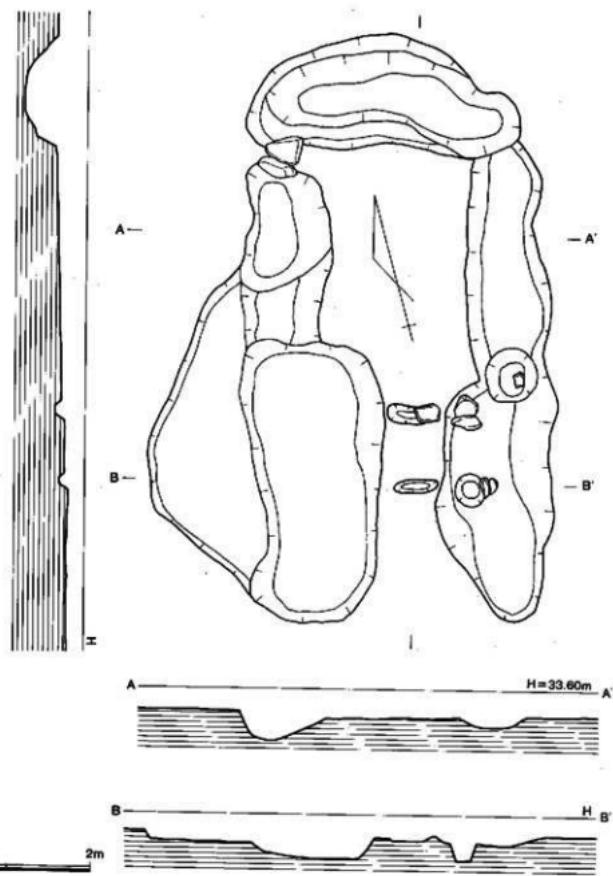
1.2×0.55mの長方形の土坑である。溝底からの深さは25cmを測る。埋土は暗褐色土に地山のブロックを混合したものである。床面から10cmほど浮いて鉄製馬具（図版22のX線写真参照）が出土しているが、保存処理中のため報告は次回に行ないたい。埋葬遺構である可能性が高い。

出土遺物（第64図352） 出上遺物はほとんどなく、東側周溝および西側周溝内のSX0995土坑部分より出土した鉄器が上げられるのみである。352は現状で6個体の鉄製農工具の錯着が確認できる。上述のように出土状況から一括の埋納が考えられる。現段階では錯落としを行ったままの状態で各遺物は錯着したままであるため、中央図面の上部からは①鋸造鉄斧 ②刀子 ③鉄鉗各1個体が観察できる。①鋸造鉄斧は最上部に据えおかれており、鋸による崩壊が著しいが残存長約7cm、幅約6cmを測る。図中上部が刃先にあたるものと考えられる。メタル度はMである。②刀子は鋸造鉄斧の図中左外側面にこれに沿うように錯着している。残存長3cm以上、刃幅1.5cmを測る。③は握り部分の先端を欠くほぼ完存品でメタル度はHの鉄鉗である。全長45.5cm、結合部の目釘穴からさみ部分の先端まで12.5cm、目釘穴から握り部分の先端まで33cmを測る。全体としても大型品であるが、握り部分が長く、より大きなものをつかむための道具で両手仕様のものか。また今回本市埋蔵文化財センターで本品のX線撮影を行った。この写真から鉄鉗の平面形態を復元すると現状よりもさらにシャープな細身の製品として復元できる（右端図）。またこの図面を現状の図面とあわせると、特にはさみ部の外面に鋸が厚くなっていることが想像できる。鋸が全体に均一に回っていくのではなく偏って発生しているこのような事象が、他の製品ではどのようになるのかはわからないが、使用状態による可能性も考えら



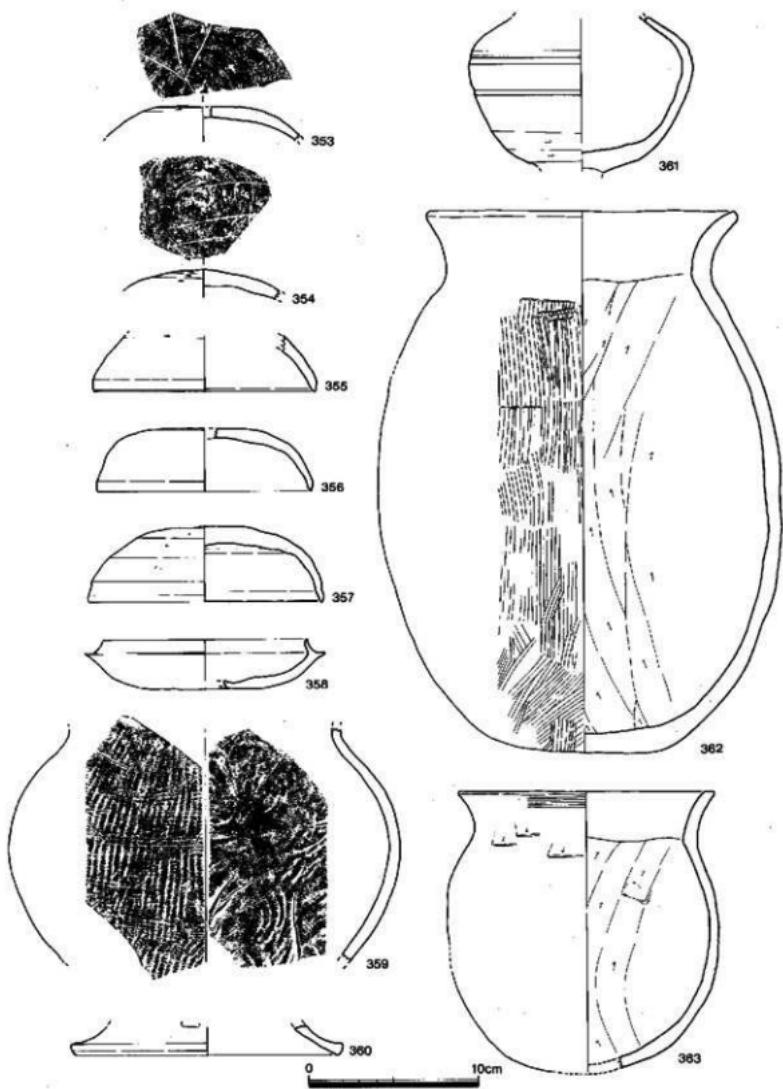
第64図 0504号古墳出土遺物実測図（縮尺1/2）





第67図 0505号古墳主体部実測図（縮尺1/60）

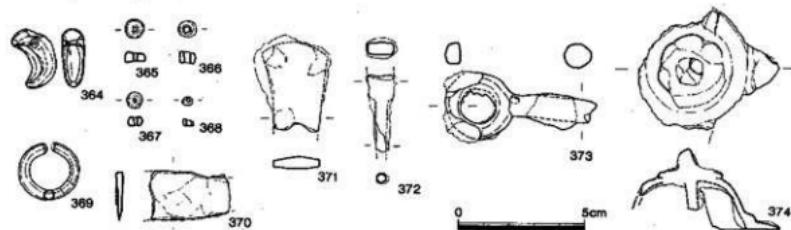
れ注目される。遺物を反転させ（左端図面）鉄鋲の下から④鉄鎌 ⑤刀子 ⑥刀子が認められる。⑤は全長約16cmを測り、中ほどでの刃部幅4cm、背厚み5mmである。背部は直線的で、刃部先端部分が湾曲している。基部はJ字状に折り返している。⑤は残存長10.5cmを測る。鋒化により形状不明瞭である。⑥は現状で茎部と刃先の両端部を欠損しており、残存長19.5cmを測る。鋒落とし時に⑤・⑥下に銷着した刃先を取りはずしており、接合面はないが状態が酷似しており、接合するとすれば全長27.5cm以上となる。刃幅2cm程度、背厚み5mm強を測る。現状では木質は観察できず、刃部には繊維痕跡が明瞭に残っている。以上の6点が面をそろえて比較的整然と重ね合わせられていたようである。主体部外にこのような鉄製品を一括して埋納する例は祭祀行為としては一般的なものではないが、当時の農耕具の良好なセットを示すものといえる。



第68図 0505号古墳出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

5) 0505号古墳 (第65・66図・図版12)

調査区東端に位置する。墳丘・石材の大半はすでに失われ、周溝及び石室の石材抜き跡と一部の根

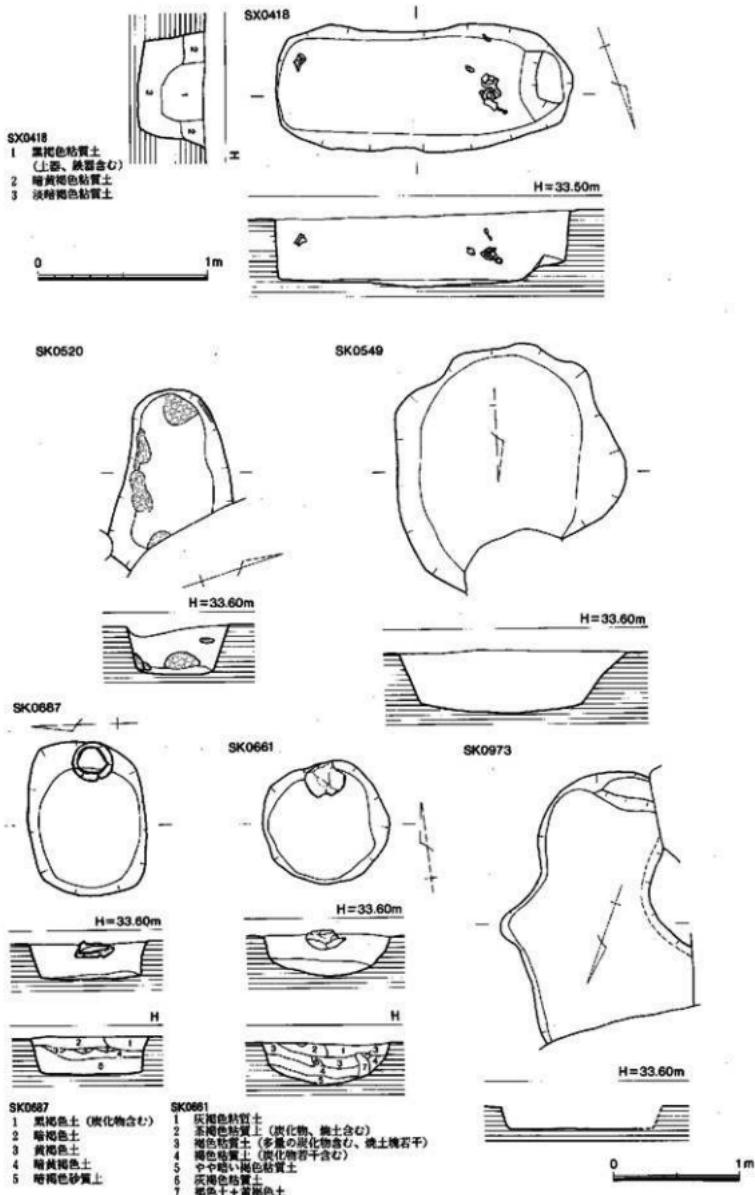


第69図 0505号古墳出土遺物実測図2 (縮尺1/2)

がためと考えられる石材が残るのみで、周溝の東半部分は調査区外にあたる。周溝はやや歪な円形であるが外径で25mを測り、南側で開口している。周溝は掘り方がややおおよそ幅1.2~2.4mで、深さは西側で40~80cmと深くなり、開口部周辺の北側が20cm程度と比較的浅くなっている。

埋葬主体部 (第67図・図版14) 石室形態は抜き跡から両袖式の横穴式石室であると考えられ、掘り方からおおよそのプランを復元すると、玄室は1.5×2.5m、羨道長3mで幅70cm程度に復元できる。また羨道には2個の樋石を据えている。石室主軸はN-15°-Eである。抜き跡は奥壁部分が最も深く40cmとなり、側壁～羨道部分は10~20cm程度と比較的浅くなる。

出土遺物 (第68・69図353~374) 遺物は周溝及び抜き跡から出土しており、抜き跡からは本来副葬されていたと考えられる鉄器も出土している。353~361は周溝出土の須恵器である。353~357は壊蓋である。353・354は口縁部を欠く破片である。353は天井部1/3程度に回転ヘラ削りを行い、354は残存する天井部全体に回転ヘラ削りを行なう。共に天井部外面にそれぞれ異なるヘラ記号を有する。355は赤褐色を呈する生焼けの口縁部破片である。外面回転などを行なう。356・357はいずれも天井部に回転ヘラ削りを行なわない。復元口径はそれぞれ12.6cm、15.7cmを測る。357は生焼けで暗赤褐色を呈する。358は壊身である。外底面はへら切りのままで未調整である。立ち上がりはやや内傾し短い。復元口径は12.1cmを測る。359は甕の胸部破片である。外面は縦方向の平行叩きを行なった後、横方向に刷毛目を施す。内面には青海波文の當て具痕跡が残る。破面を観察すると中央部部分は筋状に青灰色を呈するがこれより両外側は還元不良の茶褐色で、内外両表面はまた還元された暗灰色を呈する。360は高壺の脚部部分の小破片である。長方形透かし孔の最下部が残る。361は脚壺壺であるが脚部分はすべて欠損する。欠損状況から脚部には透かし孔があったものと考えられる。壺の胸部には上段に2条、下段に1条の沈線が施されこの間に文様が施される。362・363はそれぞれ周溝からまとまって出土した上師器甕である。いずれも全体の7割程度残存している。362は下膨れで長胴である。口縁部は内外面横などを行なう。胴部は外面継刷毛で内面は内底部から屈曲部分まで一気に削り上げている。363は小型品である。口縁部は内外面横などを行なう。胴部は外面板など、内面縦方向のヘラ削りを行なう。365~368は本来の玄室内を清掃した時に出土したガラス製の小玉である。365は径8mm、厚さ4.5mm、366は径4.5mm、厚さ2.8mm、367は径6.5mm、厚さ3.5mm、368は径7mm、厚さ5mm。玉の色調は366がスカイブルー、他はコバルトブルーを呈する。364は整理時の不手際で出土位置不明であるが、玉類の出土が見られる古墳が本墳に限られるためここで報告しておく。瑪瑙製の勾玉である。長さ2.3cm、厚さ9mmを測り、片側からの穿孔を行なっている。369は玄室内から出土した耳環である。銅芯に金箔を施す。金箔の残存状態は良好である。径は4mmを測る。370~374は鉄器で、371が周溝から出土した以外は玄室内から出土している。370は刀子であろうか。刃幅1.9cm、最大厚2.5mmを測る。371は鐵の先端部分であろうか。残存長3.5cmである。372は鐵の茎部であろう。残存長3.2cmである。373



第70図 SX0418・SK0520・0549・0661・0687・0973実測図 (縮尺1/30・1/40)

は引手の一部である。円環部分からの残存長は6.5cmを測る。374は雲珠である。上面の一部に銅貼りが残存する。

6) 土坑

土坑も検出基数は少數で比較的古墳の周辺に偏る傾向がある。土坑数が少ないことも、この時期に本地点が生活域として使用されていなかったことを表すものと考えられる。

SK0418 (第70図・図版14) V-29区、0502号古墳の北側周溝脇で検出する。長軸1.75m、短軸0.7m、検出面からの深さ40cmを測る。平面や不整な隅丸長方形を呈し、西側小口部分には一段ステップを有する。掘り方床面はほぼ平坦である。土坑中央に幅35cm、深さ25cmほど黒褐色土が堆積しこの部分から遺物が出土している。西端から円環形鏡板、銘、引手が1層の最下部から出土している。この遺物については現在整理途中の不手際で所在不明になってしまい図示し得ない。埋葬構造の可能性も考えられる。

SK0520 (第70図・図版14) Z-28区、0505号古墳の南側周溝脇で検出する。東側を削平される。東西長1.5m、南北長0.6~1.0mを測り、東側が広くなる。西側壁の一部に被熱による赤変が認められ、床面には部分的に炭が厚さ10~20cmほどたまっている。形状・被熱痕跡などから炭窯の可能性も考えられる。出土遺物は少量で土師器、須恵器壊片などがある。須恵器の壊は外面平行たたき、内面青海波文の当て具痕が残る。

SK0549 (第70図) X-32区、0501号古墳の東側から検出する。やや形は崩れるが南北長2m弱、東西長1.6mの隅丸長方形に近い平面プランで、検出面からの深さ45cmを測る。底面は中央が緩くくぼみ断面皿状を呈する。外面平行たたき、内面青海波文の当て具痕を残す須恵器壊片が出土する。

SK0661 (第70図・図版14) Y-31区、SK0687の南側で検出する。一辺80cm程度の略方形プランを呈し、底面は中央部分が1段更に掘り下げられる。出土遺物は少量であるが土師器壊などが出土する。また図示していないが土師器壊には外面にたたきの痕跡が残るものもある。

出土遺物 (第72図375) 北端で出土した土師器壊の胴部下半である。本来は正置されていたものが上半部分を搅乱で失ったものであろう。外面縦刷毛、内面縦方向のヘラ削りを行なう。また外底面には煤が付着する。

SK0687 (第70図・図版15) Y-31区で検出する。南北長0.9m、東西長1.2mの平面隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ30cmを測る。土師器壊が倒置状態で出土し、口縁部~胴部中位まで残存している。その他鉄製刀子、石包丁が出土する。

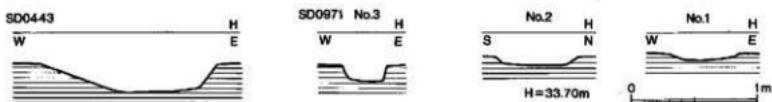
出土遺物 (第72図376・377) 376は東端で倒置状態で出土した土師器壊の口縁部~胴部である。胴部内面は横~斜め方向のヘラ削りを行なう。外面は縦刷毛を行なう。口縁部は内面横刷毛、外面縦刷毛の後横なでを行なう。377は鉄製刀子である。残存長7.2cm、刃幅1.2cmを測る。

SK0973 (第70図) X-32区で検出し、0503号古墳の周溝に切られる。不整形の浅い土坑で、周溝より内側では確認できなかった。南北長2m以上、検出面からの深さは10cm程である。出土遺物には土師器壊片が含まれている。

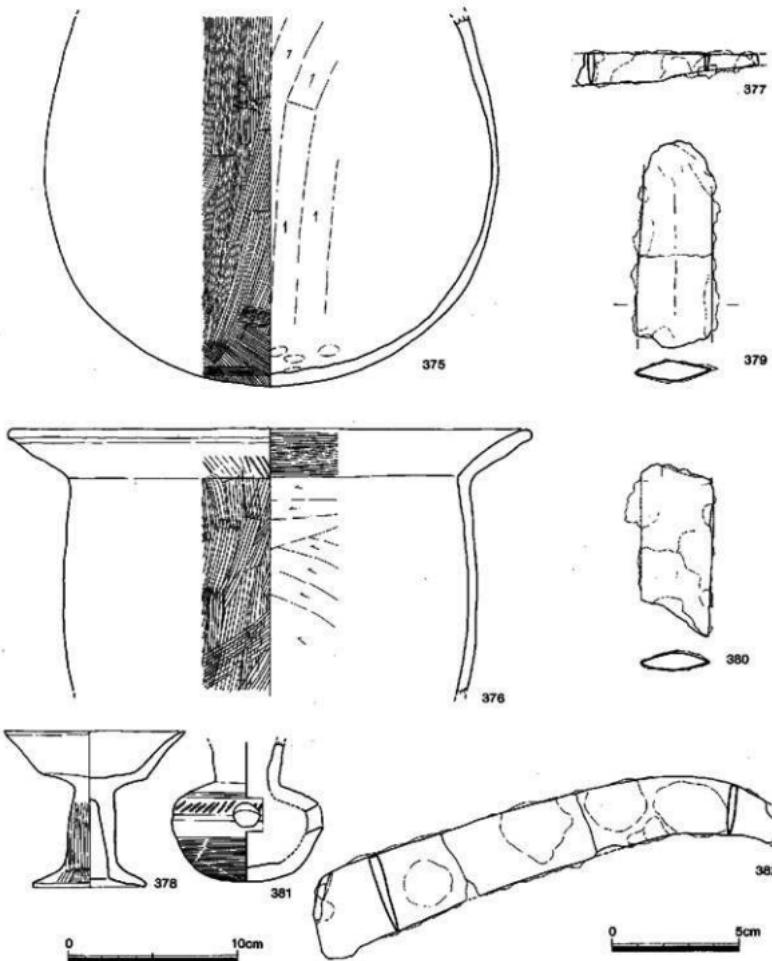
7) 溝状遺構

調査区南端で2条の溝状遺構を検出している。いずれも古墳の周溝の可能性も考えられたが、性格が不明確であるためここで報告する。

SD0443 (第71図) Y-32区で検出する。西側ラインはほぼ直線的で東側はやや弧を描くように長



第71図 SD0443・0971実測図（縮尺1/40）



第72図 SK0661・0687、SD0443他出土遺物（縮尺377・379・380・382は1/2、その他は1/3）

さ5mほど検出している。断面は西側の傾斜が緩く、東側がややきつくなっている。検出面からの深さは南側で20cmを測り、北側は自然に立ち上がっている。古墳の周溝の可能性も考えたが主体部が確認できないため溝として報告する。

出土遺物（第72図378～380）378は土師器高坏である。坏部は屈曲部分から比較的長く外方に伸びる。調整は内外面横なでによる。筒部から脚裾部は外面縦刷毛、内面はなでによる。379・380は鉄劍の破片である。いずれも銹化が著しく鏽などは不明瞭となるが、379が劍先に近い部分と考えられる。いずれも幅3cmを測り同一個体の可能性があるが、接合面はない。

SD0971（第71図）Z-32区で検出する。幅40cm、検出面からの深さ10～20cmの溝が直径7mの範囲を囲むように巡っている。区画内は多くが調査区外となっており溝の性格については不明である。出土遺物には弥生土器・石包丁の破片がありこれより新しい遺物は認められない。また切りあい関係からは甕棺墓に伴う区画溝を切っており、この埋没後に掘削されたことが想定できる。周囲の状況などから古墳時代の遺構と判断した。

8) その他の出土遺物（第72図381・382）

381は検出面から出土した須恵器鏡である。胸部沈線間に刺突文を有する。382はP1024より出土した鉄製鎌である。先端部分を欠くが残存長18.5cmを測る。背は直線的で先端部分が湾曲している。基部の折り返しは現状では基部上半が90°折り曲げられている。

4 古代以降の遺構と遺物

1) 掘立柱建物

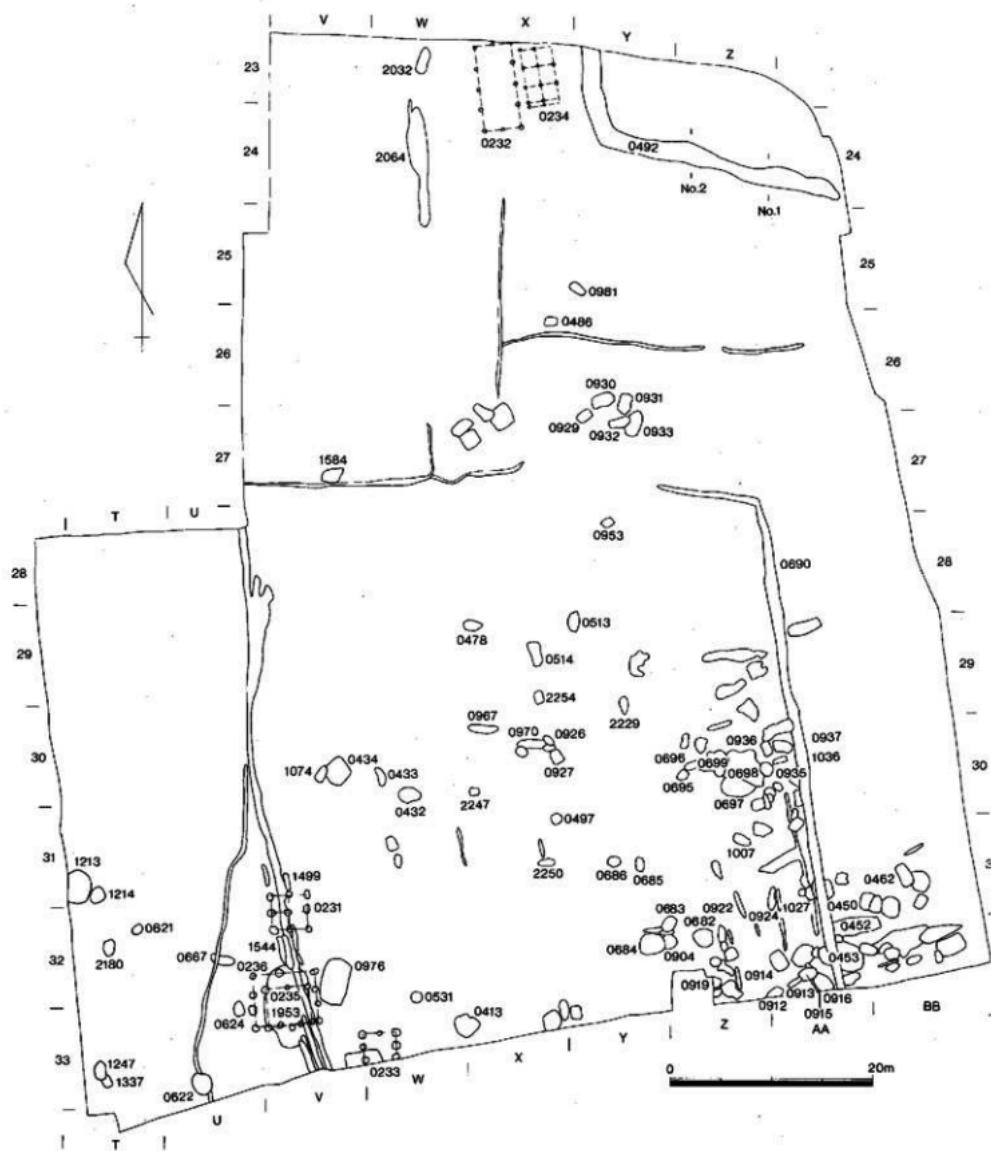
調査区北側で中世の2棟、西南側で古代の4棟を確認したが、まとめきれない建物がまだある。

SB0231（第74図・図版15）V-32区。2間×2間の総柱建物で、建物方位はN-3°-W。東西、南北全長は360cmで、柱間は180cmの等間となる。柱穴は方形状のものが多く、最も大きいP5が長さ92cm、幅72cm、最も小さいP4が長さ58cm、幅43cmをはかる。深さは中央のP9が17cmと浅く、他は45～57cm。P4を除いた柱穴から土師器や須恵器の小片が出土している。

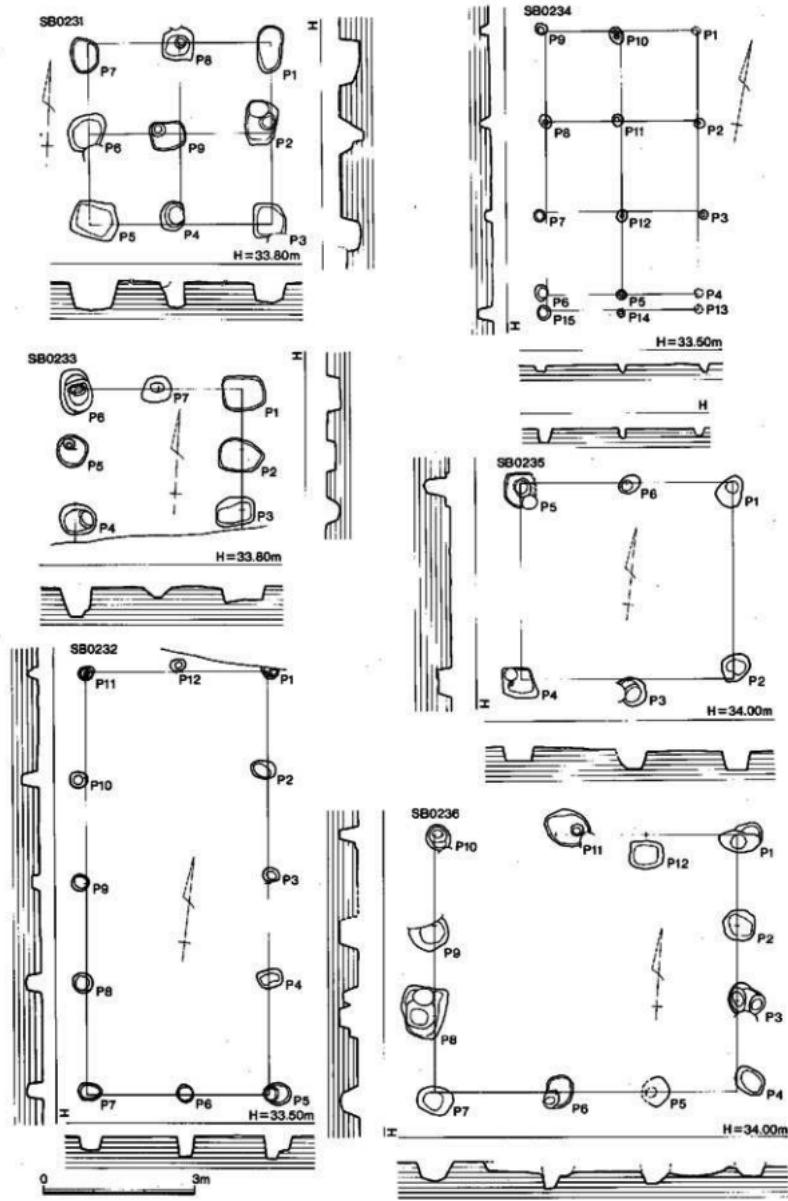
SB0232（第74図）X-23・24区。2間×4間の南北棟で、建物方位はN-7°-W。梁行全長360cm、柱間は180cmの等間。桁行全長は840cmで、柱間は210cmの等間。柱穴は円、もしくは楕円形で、径30～50cm、深さは12～42cm。P4・5・6・9から土師器、黒色土器A類碗などの細片が出土した。

SB0233（第74図・図版15）W-33区で検出した梁行2間、桁行3間以上の南北棟で、南側は調査区外にのびる。建物方位はN-5°-W。梁行全長330cm、柱間は165cmの等間。桁行は北から2間分の360cmが確認でき、その部分での柱間は180cmの等間。柱穴は長方形もしくは楕円形で、P1が長さ82cm、幅68cmと最も大きく、P7が長さ58cm、幅50cmと最も小さい。深さはP1・3・4・6が43～48cmと深く、これらに挟まれた他の柱穴は23～35cmと浅い。SC1780に切られ、0501古墳周溝を切る。P1・2・5・6から土師器、須恵器片が出土している。

SB0234（第74図）X-23区。SB0231の東側に近接して検出した南北棟である。一部柱穴を欠くが、2間×3間南庇付総柱建物としてとらえた。建物方位はN-10°-W。身舎は梁行全長300cmで、柱間は150cmの等間。桁行全長525cm、柱間は北から180cm・180cm・165cmとなる。南側庇は身舎から30cm離れて設ける。柱穴は円形状で、径18～34cm、深さは12～29cmと深い。P14・15から土師器碗、黒色土器A類碗などの破片が出土している。



第73図 古代以降の遺構分布略図 (縮尺1/500)



第74図 SB0231・0232・0233・0234・0235・0236実測図（縮尺1/100）

SB0235 (第74図) V-32・33区のSC1957の廃棄後建てられた1間×2間の東西棟である。建物方位はN-85°-W。梁行全長390cm、桁行は全長420cmで、柱間は210cmの等間。柱穴は方形もしくは円形で、P4で幅68cm、最も小さいP5で径40cm前後、深さは29~51cmとばらつきがある。P3・4・5から土師器・須恵器などの破片が少量出土した。

SB0236 (第74図) SB0235と重複する3間×3間の東西棟である。SC1957を切っているが、SB0235との前後関係は不明。建物方位はN-4.5°-W。梁行全長510cm、柱間は北から180cm・180cm・150cm。桁行全長600cm、柱間は東から180cm・180cm・240cm。P11が柱筋からやや南にずれる。柱穴は円形あるいは方形状で、最も大きいP8が幅100cm、最も小さいP10が径50cm。深さは27~45cm。P3・7~11から土師器、須恵器の破片が出土した。

2) 積穴住居

調査区西南側で3基検出した。いずれも古代の住居で南側の第3次調査地点にかけて集落を構成する。

SC0976 (第75図・図版15) V-32区。ほぼ南北に長軸をとる長方形状の住居で、北側壁は丸味をおびる。長さ4.53m、幅2.80m前後、床面までの深さ38cm。南側壁下10cmに南北幅0.50cmの平坦面を作り、床面は南北長3.78m、東西幅2.40mとなる。西側壁中央直下の床面には竈と考えられる黄褐色土粘土と浅いくぼみが残り、また東側壁中央直下の床面には長さ0.65m、幅0.55m、深さ10cmの楕円形状ピットがある。柱穴としては床面中央にある径0.40m、深さ6cmの1穴が想定されるにとどまる。覆土は灰褐色土で、深さ25cmでわずかな色調の違いにより上下層に分かれる。出土遺物はない。

SC1780 V-W-33区で検出した方形状の住居であるが、南側が調査区外となり、全形はつかめない。現状で東西幅3.35m、深さ20cm前後。床面には径30cm、深さ35cmのピットがあるだけである。SB0233を切る。出土遺物はない。

SC1957 (第75図・図版15) V-32・33区、SC0976の西側で検出した長方形状の住居である。南から東側にかけて後世の遺構に切られ側壁をとどめず、またSB0235・0236の柱穴で側壁を部分的に破壊されているが、SC0976とよく似た平面形態を呈する。南北長6.10m、東西幅4.30m前後、床面までの深さは10cm未満。床面中央には長さ0.80m、幅0.65m、深さ22cmの楕円形のピットがあり、この住居に伴う柱穴と考えられる。床面には他に小ピットがある。出土遺物はない。

3) 土坑

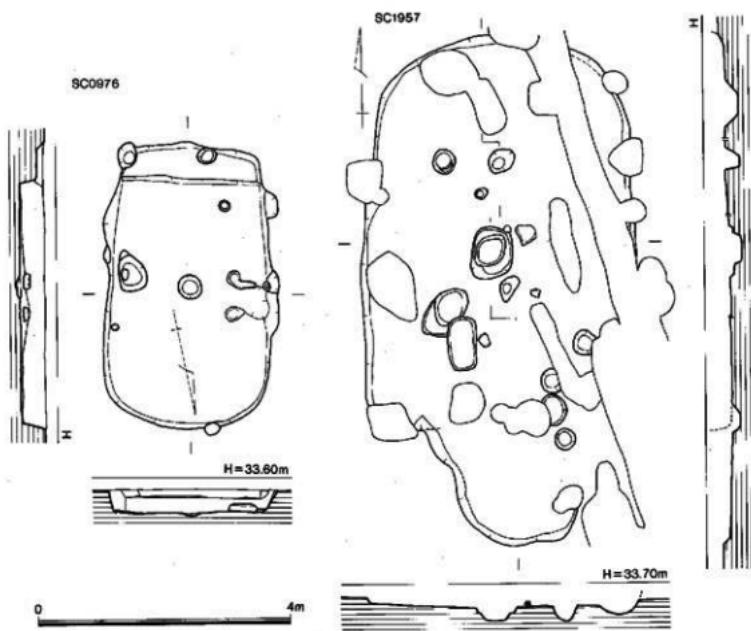
調査区南北を中心に多数の土坑があるが、その性格は不明なものが多い。主な18基を取り上げた。

SK0413 (第76図・図版16) X-33区。東西長2.36m、南北幅1.95m前後の不整円形土坑である。側壁は一部オーバーハングし、底面には凹凸がある。検出面から底面までの深さ45cm。覆土は6層に分かれるが、灰色粘質土が主体となる。出土遺物はない。

SK0415 (第76図・図版16) V-31区。北西-南東に長軸をとる長方形状の土坑で、長さ2.81m、幅2.32m。東側壁には段がつき、底面は長さ2.06m、幅1.50mの規模をもつ。検出面から底面までの深さ66cm。10層に分かれる覆土は全体に汚れ、しまりに欠ける。土師器、白磁片などが出土した。

SK0432 (第76図) W-30区。長軸をほぼ東西にとる楕円形の土坑で、長さ2.21m、幅1.50m、深さ20cm。西から南側壁下の深さ10cmに平坦面を作る。底面には凹凸がある。土師器系切り皿など土器類少量と鉄滓が出土した。

SK0433 (第76図) SK0432の北西隣で検出した北西-南東に長軸をとる楕円形の土坑である。長さ1.83m、最大幅0.90m。底面は北側に傾斜し、北端での検出面からの深さ16cm。覆土は褐色土と黄色



第75図 SC0976・1957実測図（縮尺1/80）

上が混じる。土器片、須恵器の細片少量と鉄滓が出土した。

SK0434 (第76図・図版16) SK0433の西側2.5mで検出した不整方形の土坑である。上面幅2.30前後で、側壁はオーバーハングとなる。底面は東西幅1.50mの不整形で、西にやや傾斜する。検出面から底面西端までの深さ110cm。土器片皿、鉄滓などが出土した。

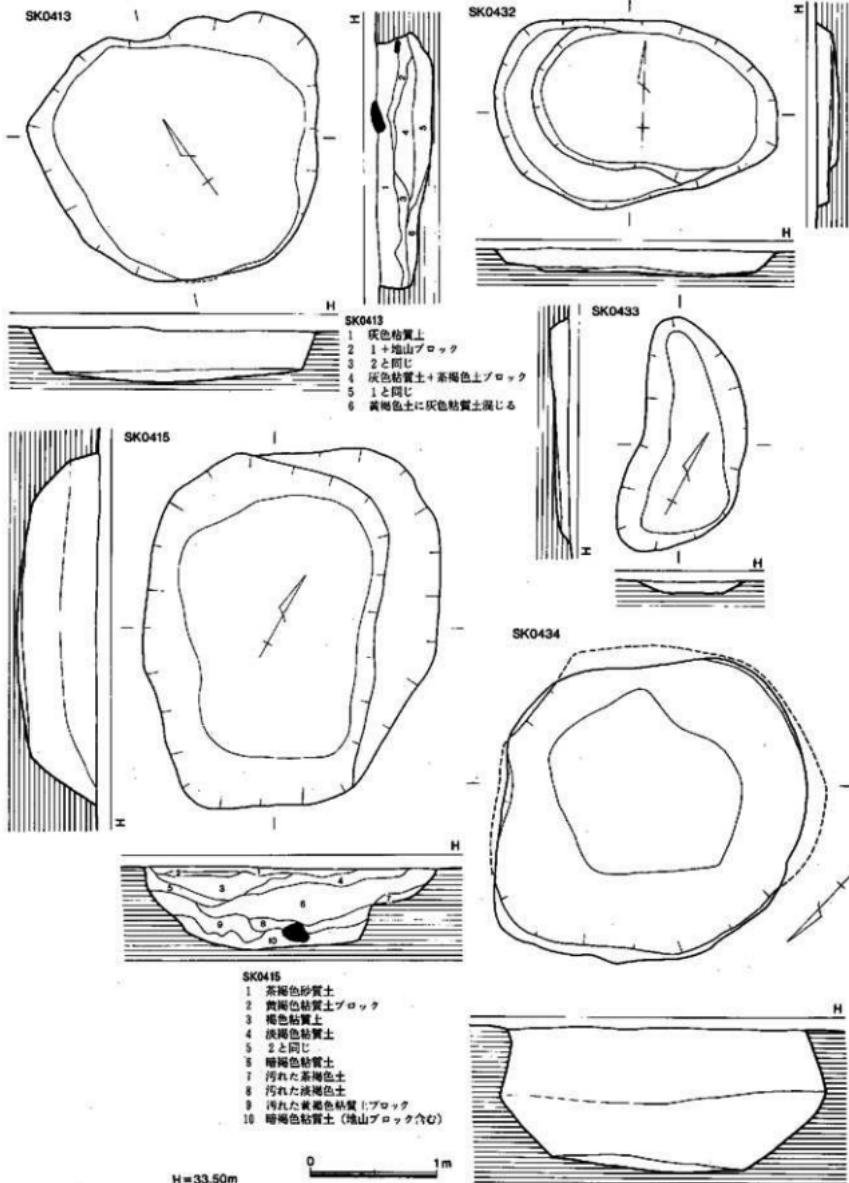
SK0478 (第77図・図版16) X-29区、K0087壺棺墓の上面で検出した長軸をほぼ東西にとる不整楕円形の土坑である。長さ1.80m、最大幅1.17m。東側壁下23cmに平坦面を作り、西側に一段下がって底面となる。検出面から底面までの深さ38cm。底面には長さ25cm程度までの角礫が敷き詰められている。覆土は灰色砂質土。土器片、須恵器細片などが少量出土した。

SK0486 (第77図・図版16) X-26区。東西に長軸をとる長方形土坑で、長さ1.13m、幅0.71m、深さ26cmをはかる。検出面下深さ10cmから底面まで5cm未満の円礫から幅20cm前後の角礫までが充满する。陶器片、鉄滓などが若干出土した。

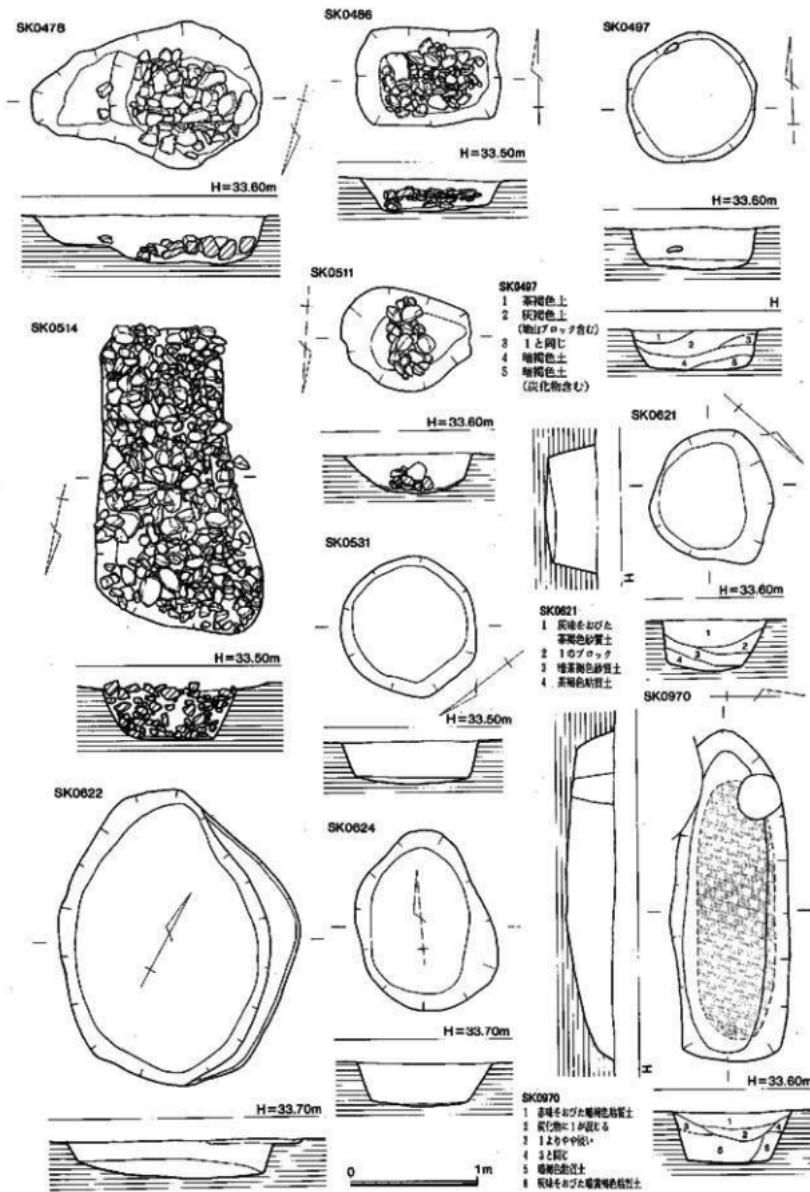
SK0497 (第77図・図版16) X-31区、D0908木棺墓の上面で検出した径1.20m、深さ33cmの円形土坑である。覆土は5層に分かれる。黒色土器、須恵器片などが少量出土した。

SK0511 (第77図・図版17) X-29区のK0083壺棺墓およびD0481木棺墓の上面で検出した東西に長軸をとる不整楕円形土坑である。長さ1.02m、幅0.83m、深さ32cm。底面には礫が堆積する。覆土は灰色砂質土。弥生土器片2点だけが出土した。近世以降の上坑である。

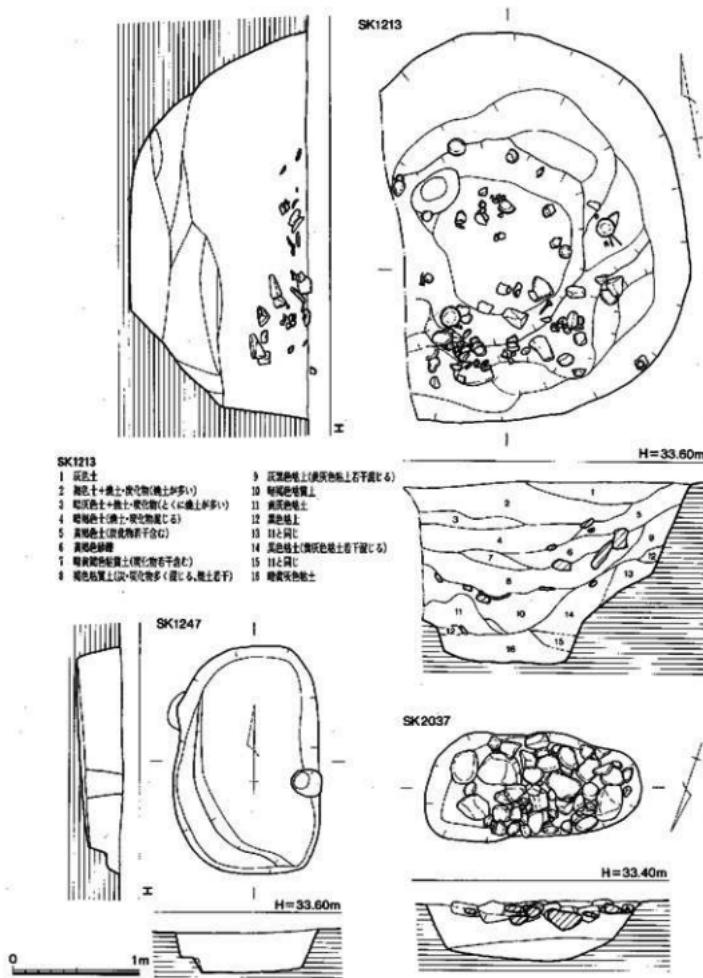
SK0514 (第77図・図版17) X-29区。SK0511の東5mで検出したほぼ南北に長軸をとる長方形



第76図 SK0413・0415・0432・0433・0434実測図 (縮尺1/40)



第77図 SK0478・0486・0497・0511・0514・0531・0621・0622・0624・0970実測図（縮尺1/40）



第78図 SK1213・1247・2037実測図(縮尺1/40)

状の土坑である。長さ2.35m、幅はやや開いた北側壁で1.32m、深さは40cm。坑内には検出面から底面まで幅25cm以下の礫が充満する。近世の陶磁器類などが出土した。

SK0531(第77図) W-32区。0505古墳の主体部を切る僅1.10m前後、深さ32cmの円形土坑である。出土遺物はない。

SK0621(第77図・図版17) T-32区。幅1.05m前後、深さ42cmの不整円形土坑である。底面は凹凸がある。覆土は4層に分かれる。土師器系切り皿、白磁などの破片が出土した。

SK0622（第77図・図版17）U-33区。長軸を北西-南東にとるやや西側が膨らんだ楕円形土坑で、長さ2.33m、幅1.90m、深さ30cm。東側壁下4cmに平坦面を作る。弥生土器（第47図）や中世土師器などが出土している。SD0670を切る。

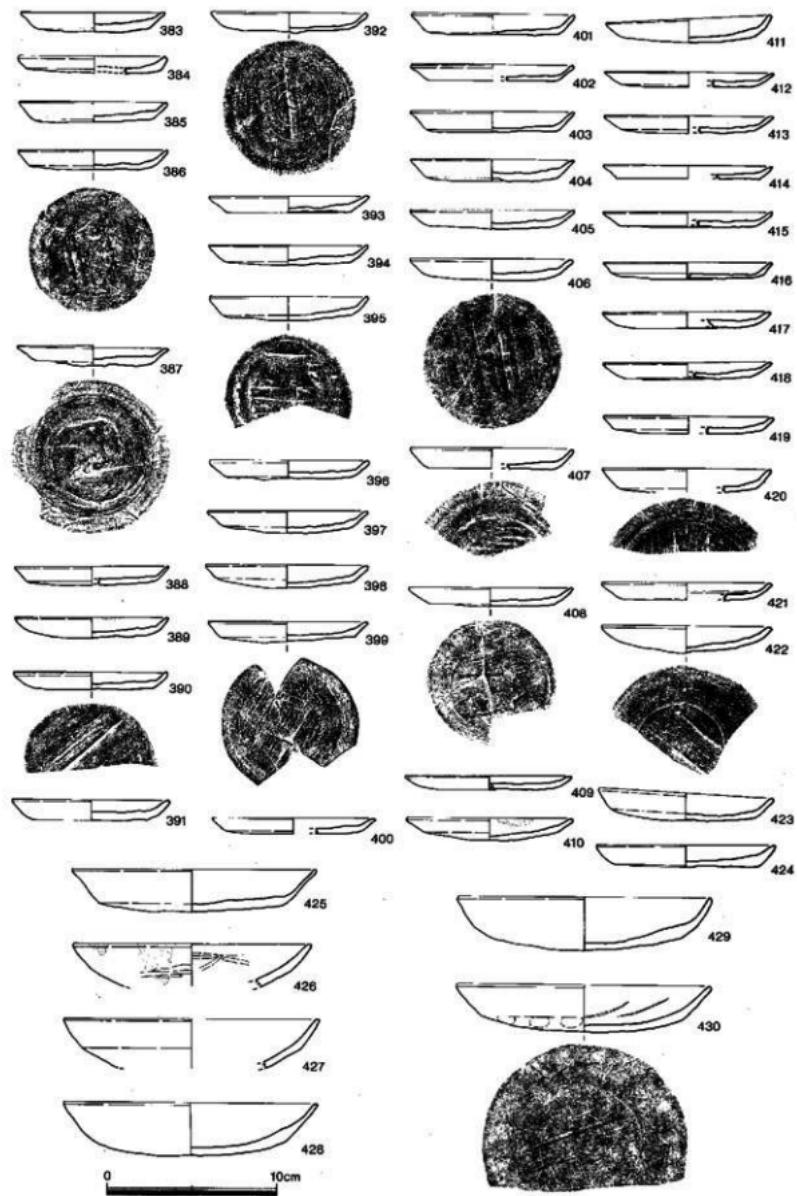
SK0624（第77図）U-33区、SC0662の上面で検出した南北に長軸をとる楕円形土坑である。長さ1.44m、幅1.10m前後、深さ35cm。土師器糸切り皿、須恵器などが少量出土した。

SK0970（第77図）X-30区。長軸を東西にとる砲弾形の土坑で、長さ2.61m、幅0.95m、深さ40cmをはかる。覆土は6層に分かれ、検出面から深さ15cmにある第2層の炭が坑内のはば全域を覆う。弥生土器の小片が少量出土したが、土坑は中世以降のものと考えられる。

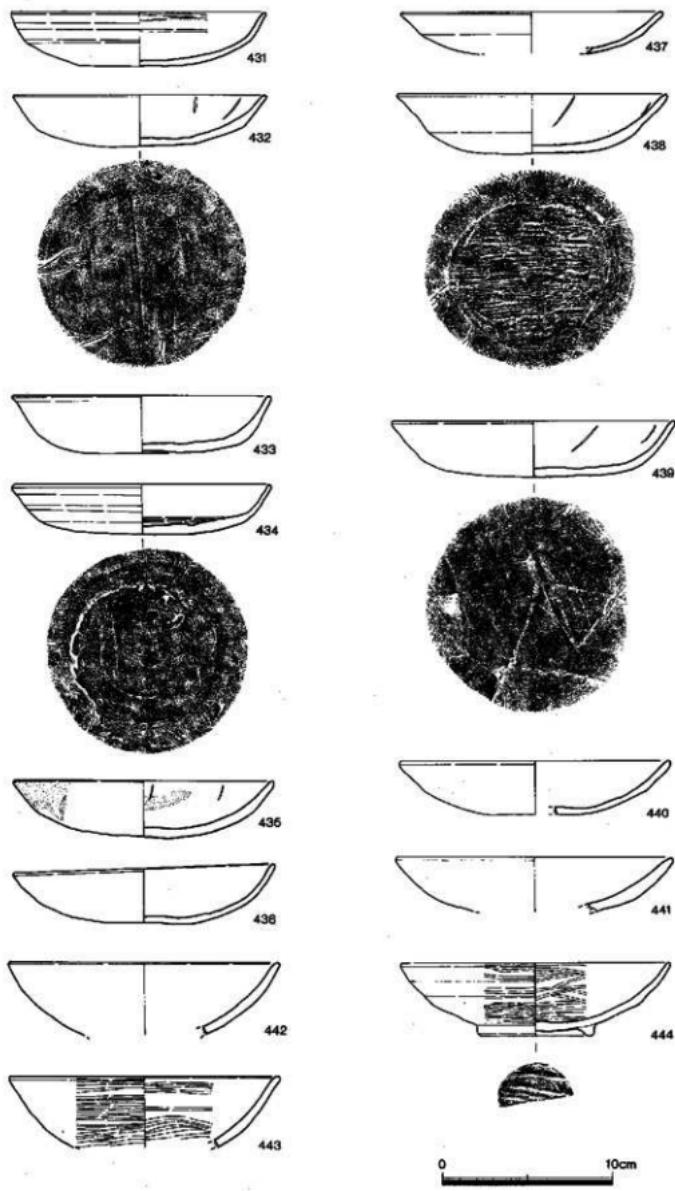
SK1213（第78図・図版17）T-31区、SC1220堅穴住居の上面で検出した円形状の土坑で、西側壁は調査区外となる。南北幅3.02m、深さ140cm前後。東南側壁下から北側壁下にかけて不整形の平坦面が階段状に三段続く。検出面から一段目までは60cm、一段目から二段目が25cm、二段目から三段目が26cm、三段目から底面までが17cmの比高差をもつ。底面は南北幅1.10mの不整円形で、その北側部分を中心に小礫を敷き詰めている。覆土は16層に分かれるが、このうち上層としてとらえることのできる第2～8層には炭化物や焼土を多量に含んだ層が多く、また第2層には完形の上師器皿、壺をはじめ多くの遺物が含まれていた。第9層以下には炭化物や焼土は含まず、また遺物の出土もほとんどない。この遺構は井戸が認められないことや、側壁に設けられた階段状の遺構や底面に敷き詰められた礫からみて溜井の可能性が高い。その廃棄にあたっては、第9層以下の下部を埋めた後、火を用いた祭祀を行ながら埋め��け、第2層で土器などを投げ入れ埋め立てを終了したものと考えられる。

出土遺物（第79～83図・383～486）土師器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、中国・朝鮮製陶磁器、石製品、鉄器などがあり、そのほとんどが第2層から出土したものである。

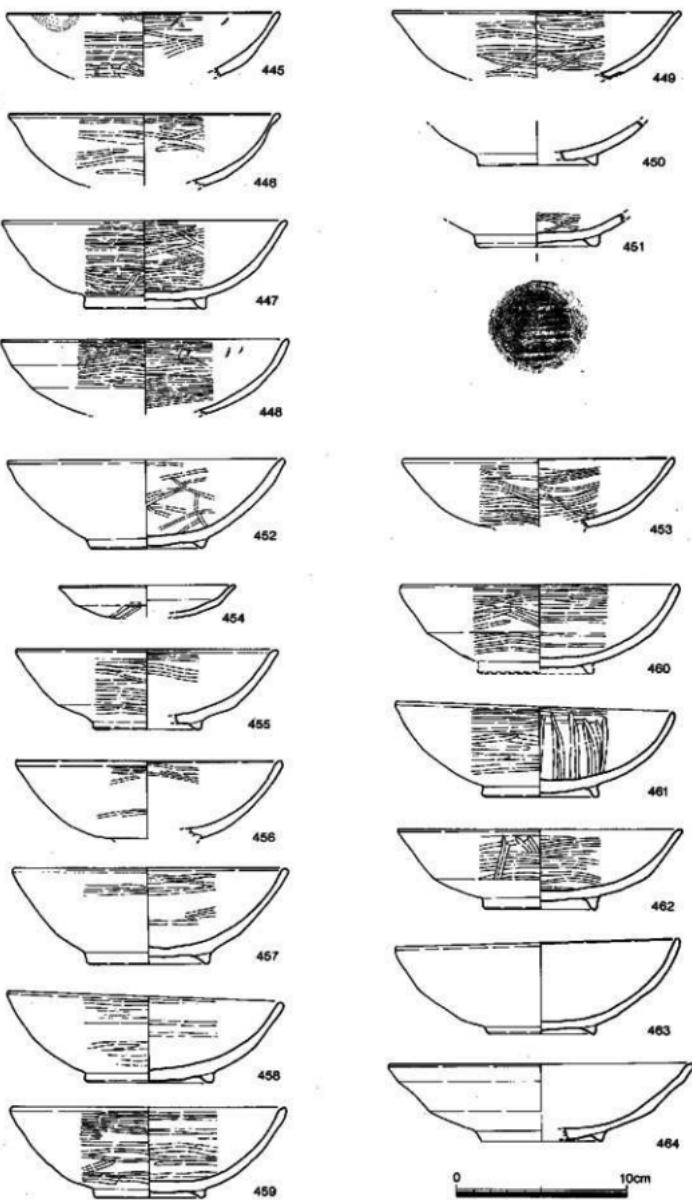
土師器（第79～81図383～451）第79図の383～424は皿である。383～390は口径が8.3cm～8.9cmに収まり、器高は1.0cm～1.25cmとなる。口縁部は横ナデ、内底部はナデ調整を施す。外底は全てヘラ切りを行い、板状圧痕がみられる。389は口縁部に煤の付着があり、灯明皿として使用したものであろう。391～422は口径が9.0cm～9.9cmで、器高は0.8～1.55cmとなる。内外面の調整も同じである。外底は392のみが糸切りである。他はヘラ切り離しである。板状圧痕は391、412、417を除いて、全てに認められる。392と410には口縁部に煤が見られ、灯明皿として使用。423・424は口径がそれぞれ10.2cmと10.4cmとなる。器高は1.65cmと1.3cmである。423の内面には回転ヘラナデとナデが見られるが、外底には板状圧痕はみられない。424の外底は糸切り離しが施され、板状圧痕がある。第79・80図の425～441は壺である。425～432は口径が13.9cm～14.9cmまでのいわゆる15cm未満のもので、器高は2.5cm～3.9cmまでに収まっている。口縁～胴部内外面は横ナデ、内底はナデを施すが、423は内外面ともにヘラ磨きとなる。外底はヘラ切り離しで、板状圧痕がある。430と432の内面にはコテ当てがみられる。426と431の口縁部には煤が付着している。灯明用と思われる。433～438、440は口径が15.05cm～15.9cmに収まる16cm未満のものである。器高は2.5cm～3.55cmに収まるものである。外底はヘラ切り離しで、板状圧痕がある。439と441は口径が16cmを超えるもので、器高も3cmを超える。439の内面にはコテ当て、外底はヘラ切り離しで、板状圧痕が施されている。第80・81図の442～451は碗である。442～445は口径が15.7～15.9cmの16cm未満のもので、器高は3.8cm～4.3cmまでに収まる。内外面ともヘラ磨きを施す。444の外底には板状圧痕がある。445の内面にはコテ当て、外面口縁部には煤が付着している。447～449は口径が16.6cm～16.8cmに収まるものである。器高は3.95cm～5.2cmである。内外面ともにヘラ磨きを行う。447の口縁～胴部の内面の一部には煤が付着している。448の内面はコテ当てが施される。446は口径が15.8cm、残高が4.3cmで、内外面ともにヘラ磨きである。450と451は底部のみが残存する。451の



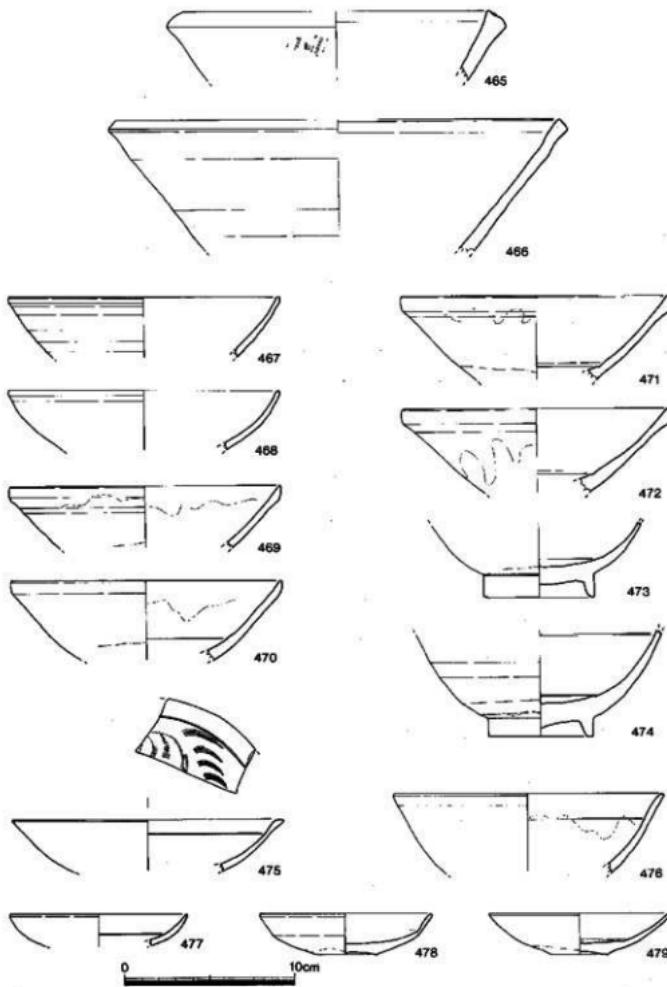
第79図 SK1213出土遺物実測図1 (縮尺1/3)



第80図 SK1213出土遺物実測図2 (縮尺1/3)



第81図 SK1213出土遺物実測図3 (縮尺1/3)

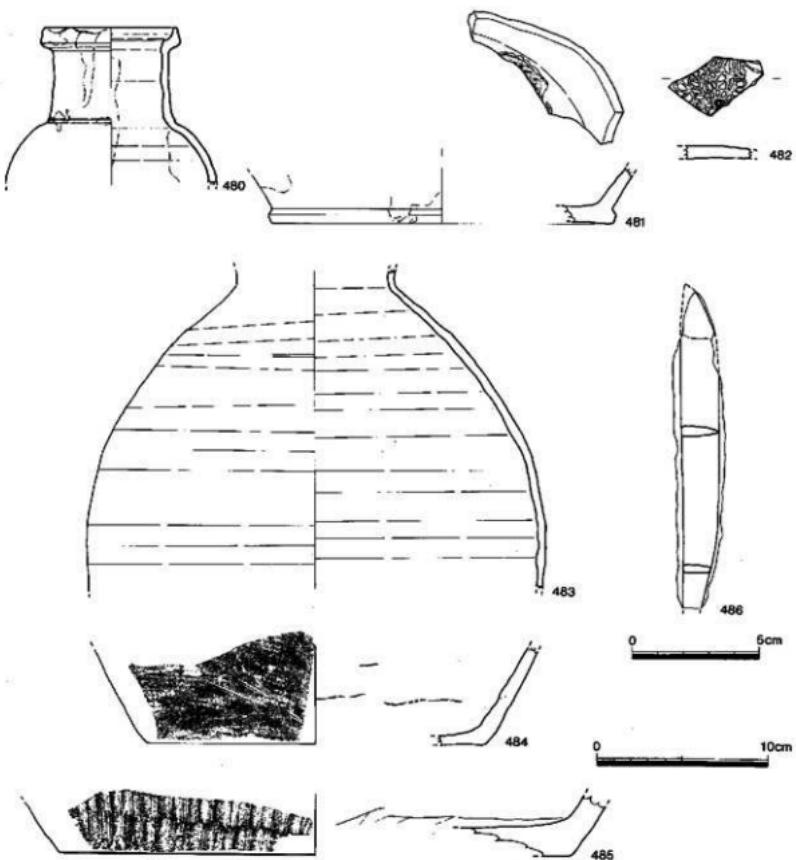


第82図 SK1213出土遺物実測図4 (縮尺1/3)

内面にはヘラ磨きがみられ、煤も付着している。外底には板状圧痕がある。

黒色土器（第81図452・453）452はA類の碗で、内面は黒色を呈する。一部に淡褐色をおびる。口径は15.2cm、器高は5.2cmを測る。内面には調整方向が一定しないヘラ磨きが施されているが、外面は摩滅して不明。外底には板状圧痕がみられる。453はB類の碗で、内外面ともに黒色を呈する。口径は15.8cm、残高は4.05cmを測る。外面にヘラ磨きを施す。

瓦器（第81図454～464）454は皿で、外面胴部～底部にかけてヘラ磨きを施す。口径10.2cm、器高



第83図 SK1213出土遺物実測図 5 (縮尺486は1/2, その他は1/3)

1.85cmを測る。455～464は碗である。455は口径が16cm未満のものである。456と467は口径が18cm未満のもので、その他の456～463は口径が16.0cm～16.7cmに収まるものである。外面調整は463の不明と464の横ナデ調整を除いて、他は全てヘラ磨きを施す。457と462には煤の付着が認められる。焼成は454が良好であるが、455、456、462は焼きが甘く、457～461と463、464ではやや軟質である。

須恵質土器（第82図465・466）これらは鉢の口縁～胴部にかけての破片である。465の外面に刷毛目痕がみられる。胎土には砂粒が多く混じり、焼成は良好で淡灰褐色を呈する。復元口径は17.8cmを測る。466は外面を横ナデ、内面は横ナデとナデ仕上げとなる。砂粒も比較的多く混じる。焼成も良好で灰色を呈する。復元口径は26.1cmを測る。

中国陶磁器（第82・83図467～482）467～479は白磁である。467～476は碗である。そのうち467～470はⅡ類の碗で口縁先端部に小さい玉縁をつくる。釉は灰白色を呈する。口径は15.8～15.9cmを測



第84図 SD0492実測図 (縮尺1/40)

る。471・472はIV類の碗で、外面胴部下位は露胎で、釉は灰白色か淡灰色となる。467～469以外は内面に沈線がみられる。口径は15.6cm～15.9cmに収まる。473と474はV類の碗である。外面胴部下位から底部までは露胎で、それ以外は全て施釉である。高台の外面は直ぐに削りだす。475と476はVI類の碗である。475は口径が15.9cmの浅い碗で、内面に沈線と横描文がみられる。釉は灰緑色ぎみの灰白色である。476は口径が15.8cmで、内面に沈線が巡る。釉は淡褐色がかった淡灰色の発色である。477～479は皿である。477は内面に沈線が巡る。施釉では底部は不明だが、全面に及ぶ。半透明のガラス質で、やや緑色した淡灰色を呈する。細かい氷裂がみられる。口径は10.4cmである。478は胴部で折れ、口縁に達する。外面胴部下位から底部までが露胎以外、他は全面施釉である。ガラス質で、透明感もあり、淡灰緑色を呈する。口径9.9cm、器高2.45を測る。479は胴部がわずかに折れる。外面胴部下位から底部にかけて露胎である。内面には沈線がみられる。ガラス質の透明感のある淡黄褐色の釉には非常に細かい氷裂がみられる。口径は10.6cm、器高は2.4cmとなる。480～482は陶器である。480は把手を欠くものの水注と思われる。口縁～胴部までを残す破片で、口縁をつまみ上げている。復元口径が7.6cmを測る。胎土は茶褐色を呈し、砂粒が多く混じる。器壁は薄く、焼成は良好である。外面には暗褐色のスリップが掛けられ、一部には鉄釉が斑状にみられる。内面は鉄釉を施す。481と482は磁灶窯系の盤の底部片で、同一固体である可能性もある。内面に花文のスタンプが施されている。胎土は砂粒が少なく、淡灰色を呈する。内面には釉が施されている。481はガラス質だが不透明の暗褐色の釉である。482も同様だが、わずかに緑色をおびた褐色を呈している。外底は露胎である。

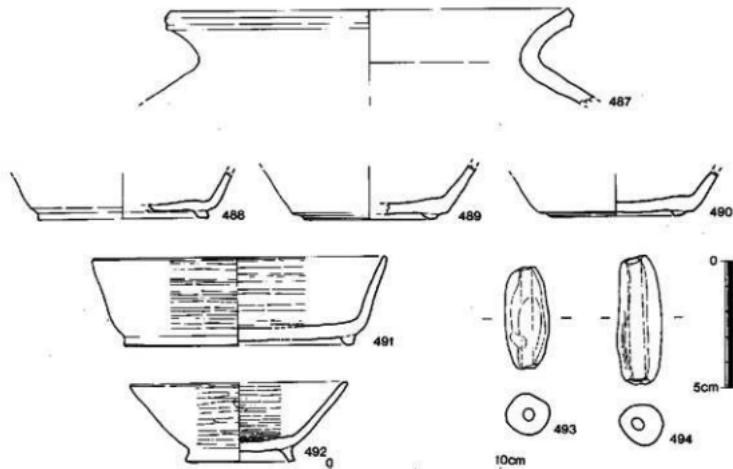
朝鮮製無釉陶器（第83図483・484）483の口縁部は欠損するが、頸部から胴部にかけて膨らむ壺の破片である。胎土には少量の砂粒が混じるが、精良に近く、暗茶褐色を呈する。粘土紐を巻き上げ、横ナデ調整を施しているが、器面の凹凸は明瞭である。内外面ともに灰黒色を呈する。484は平底をもつ壺の底部片で、復元底径は20.0cmとなる。胎土には砂粒が混じり、灰色を呈する。外面には平行タキの痕跡があり、内面および外底は横ナデとなる。焼成は良好で、外面胴部のみが灰色をしている。他は灰黒色である。内面には接合痕がみられる。

石製品（第83図485）485は滑石製石鍋の底部片で復元底径30.0cmを測る。内外面ともに削り痕が明瞭であるが、内面はさらに表面を滑らかに施している。外面には煤が著しく付着している。

鉄製品（第83図486）486は鉄刀子で、先端部と基部の一部が欠損している。全体に錆で被われているが、刀子自体の状態は比較的良好である。残長12.5cm、幅1.45cm、厚さ0.45cm、重さ29gを測る。

SK1247（第78図）T-33区、SC1247の上面で検出した長軸を南北にとる隅丸長方形の土坑である。長さ1.80m、幅1.15m、深さ37cm。東南側壁に沿った深さ18cmのところに平坦面を作る。覆土は暗褐色土と灰褐色土が混じる。SK1337中世土坑を切る。弥生土器片などが出土した。

SK2037（第78図）U-27区。長軸をほぼ東西にとる椭円形土坑で、長さ1.70m、幅0.88m、深さ48cm。坑内上面は幅10～30cm程度の疊で覆われる。SD1915・2100を切る。近世以降の土坑である。



第85図 SD0492、その他の出土遺物実測図（縮尺493・494は1/2、その他は1/3）

4) 溝状造構

V区南端から北に走るSD0980、その東側約50mを平行して走りZ-27区で西に折れるSD0690をはじめ検出した溝の多くが近・現代のものである。ここでは古代と中世の溝2条についてみていく。

SD0492（第84図）調査区北端のY-23区から南に約9m走り、東に折れ約23m走って立ち上がる溝である。幅2.00m前後、深さは35~55cmでL字状の溝の内側が浅くなる傾向にある。覆土には砂層と粘土層が互層となり、また底面も凹凸がみられるところから、滯水があったことがうかがわれる。溝はさらに北側にのび、方形状の区画をなす可能性がある。8区内でこの溝の内側からの同時期遺構は検出していない。8世紀代と考えられる。

出土遺物（第85図487~490）いずれも須恵器である。487は甕で、胴部外面平行叩き、内面には青海波の当具痕がある。口縁部は内外面とも横ナデ調整。全体に摩滅が著しい。488~490は壺で、低い断面台形の高台が付く。内外底の中央がナデ、他は横ナデ調整をおこなう。

SD0640 U区南端調査区外から北方向に約34m走り、U-30区SC0952の上面で立ち上がる幅0.40m、深さ10cm前後の溝である。U-31~33区部分が2mほど西に突出したようになる。出土遺物はないが、ともに中世の土坑であるSK0667、SK0662との切り合い関係から、中世の溝と考えられる。

5) その他の出土遺物（第85図491~494）

491・492は上師器。491は低い断面台形の高台が付いた壺である。体部および底部は内外面ともヘラ研磨を行う。赤褐色を呈し、外底には黒斑がある。復元口径17.3cm、器高5.2cm。492は細くてやや外に張った高台の付いた甕。体部および内底はヘラ研磨、外底はヘラ切り離しの後ナデ調整。器表は赤褐色を呈する。復元口径12.8cm、器高4.7cm。493・494は土鉢。493の長さ4.0cm、幅1.7cm、重量11g。494の長さ5.1cm、幅1.8cm、重量13g。とともにナデ調整で仕上げる。491はSK1680、492はSK0910、493は検出面、494はP-1522から出土した。

図版



8区全景（西上空から）



1 8区北側（上空から）



2 8区南側（上空から）

図版2



1 8区南西側（北東から）



2 8区南西側（北から）

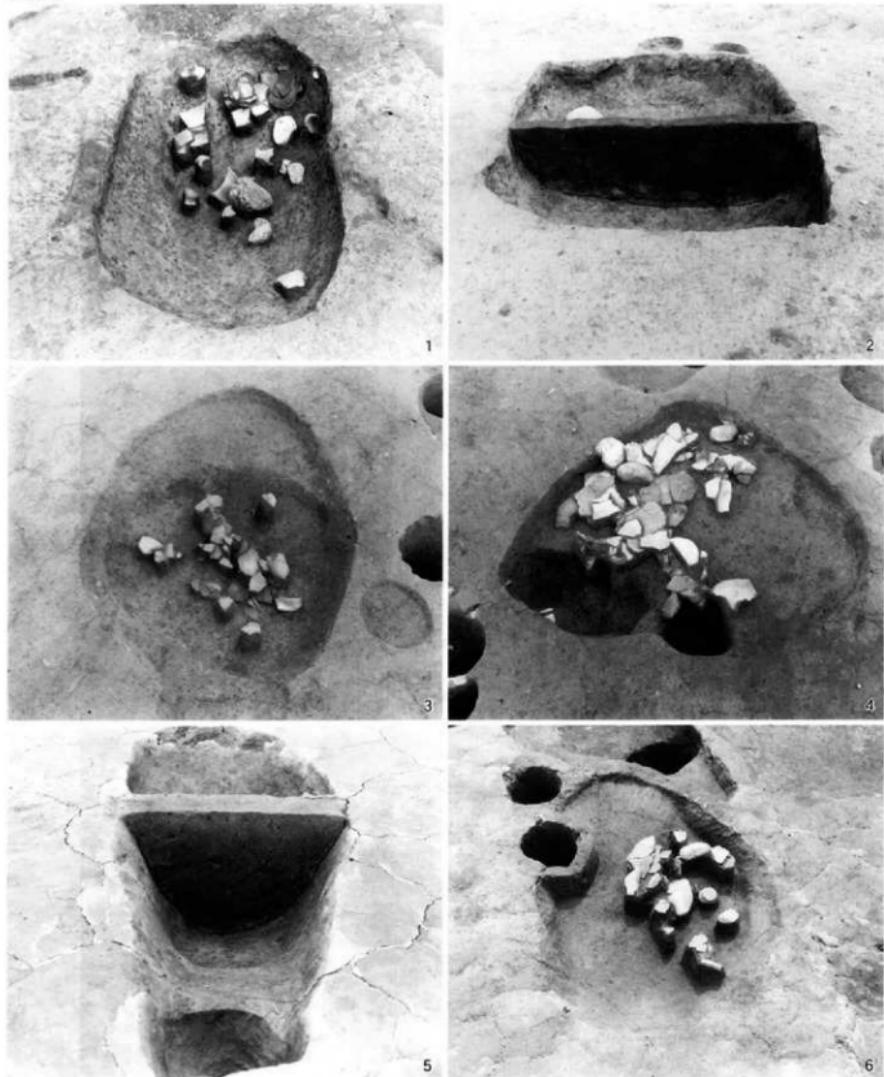


1 8区北側（南から）



2 8区西北側（北から）

図版 4



1 SK0411 (南から)

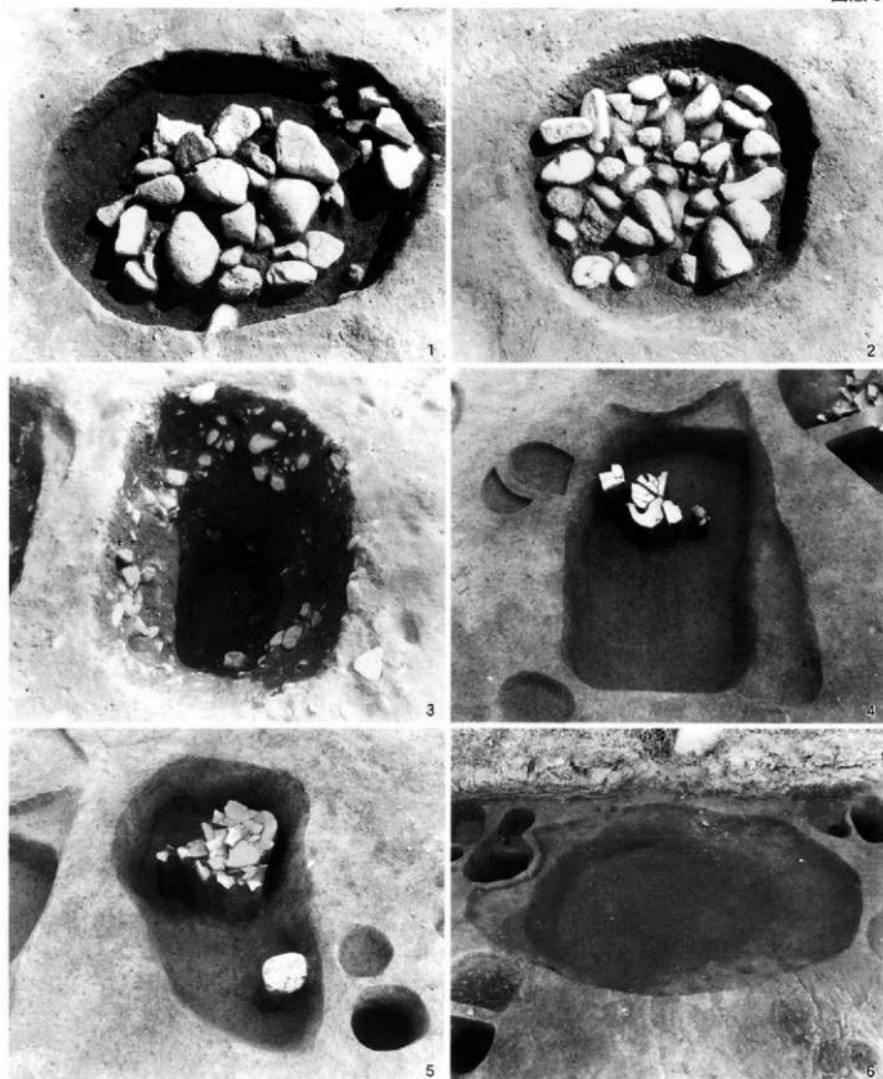
3 SK0416 (東から)

5 SK0422 (東から)

2 SK0412 (南西から)

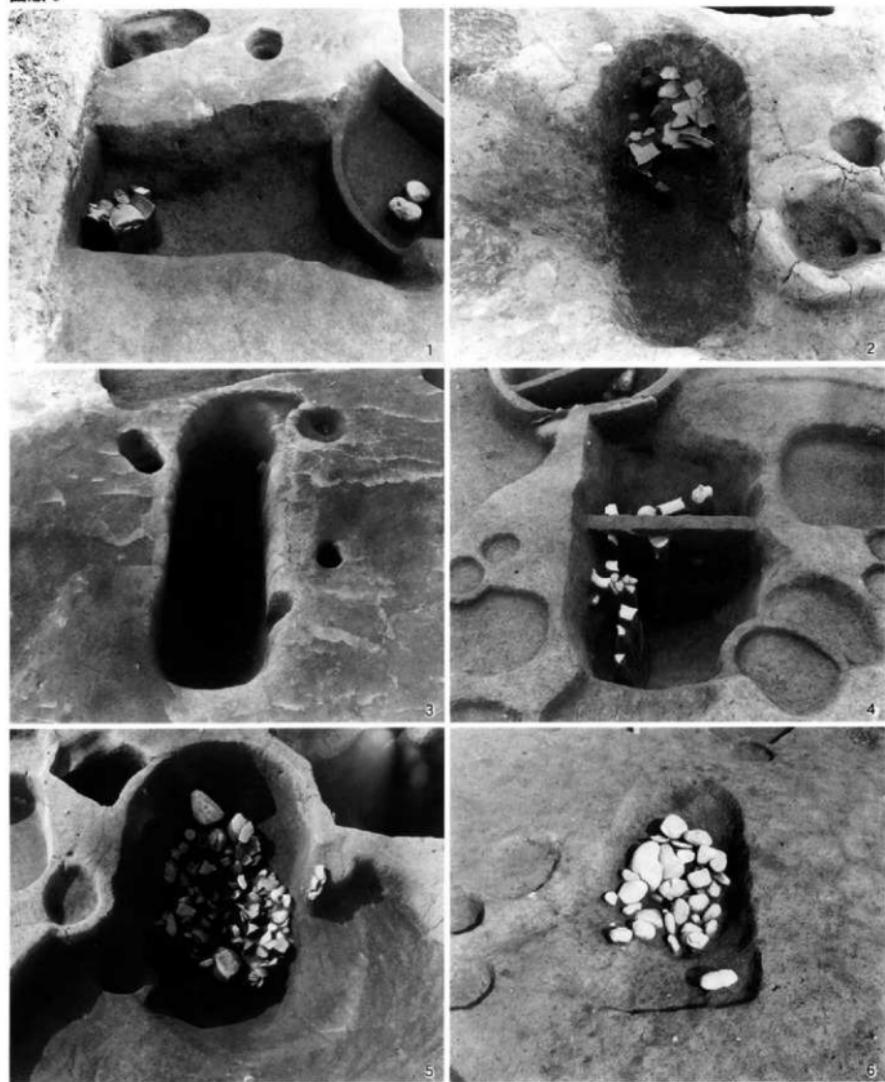
4 SK0417 (南東から)

6 SK0479 (北西から)

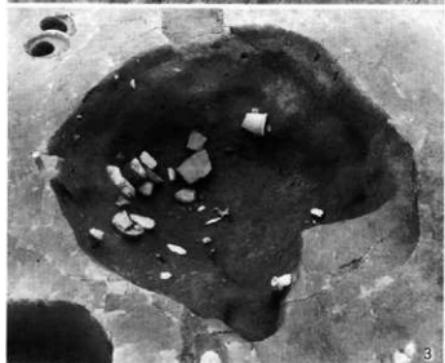


1 SK0483 (北から)
2 SK0485 (北から)
3 SK0515 (北から)
4 SK0524 (北から)
5 SK0525 (北から)
6 SK0526 (南から)

図版 6

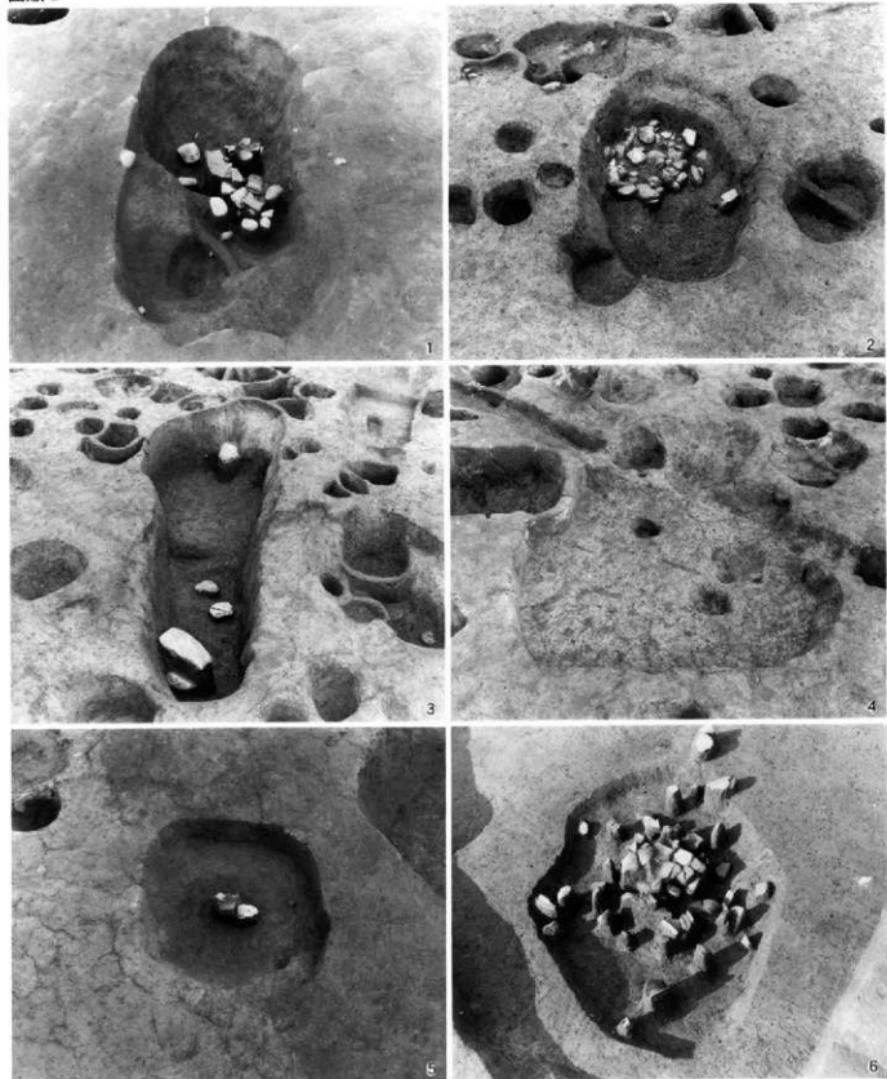


- | | |
|----------------|----------------|
| 1 SK0530 (西から) | 2 SK0532 (北から) |
| 3 SK0533 (東から) | 4 SK0534 (北から) |
| 5 SK0542 (東から) | 6 SK0637 (西から) |

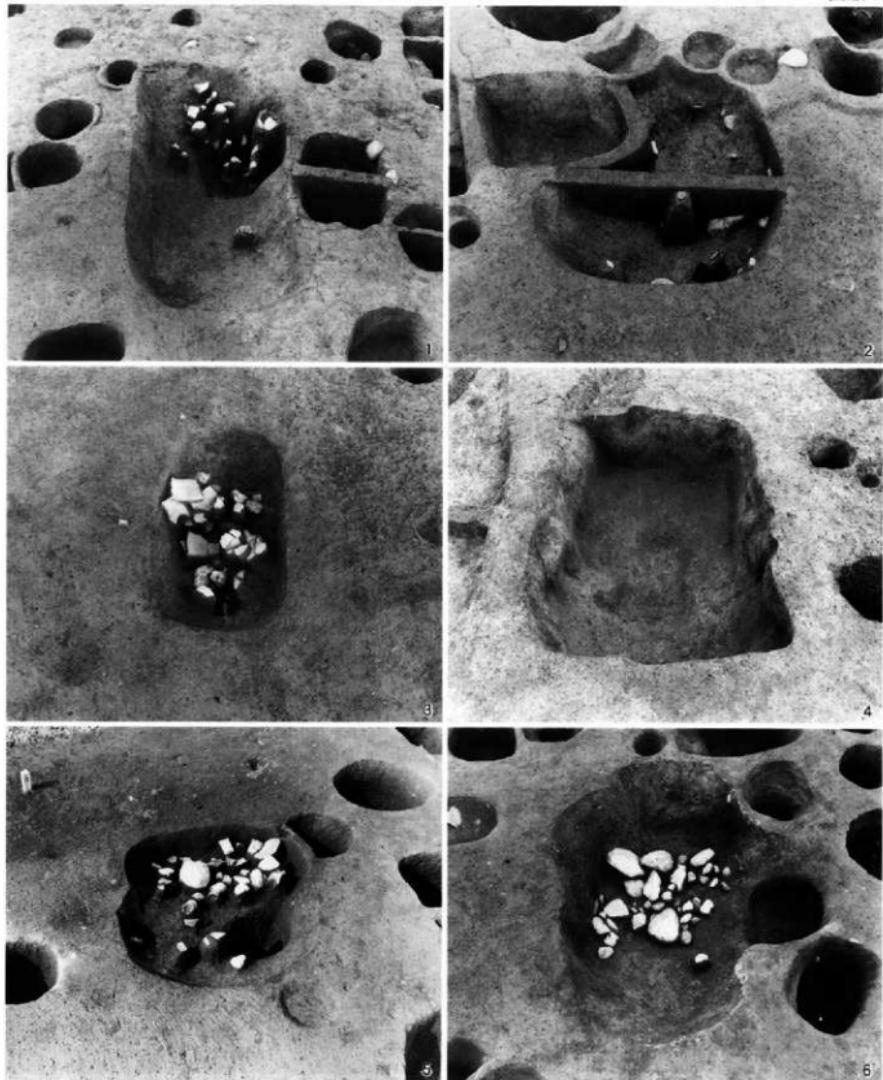


- | | |
|----------------|----------------|
| 1 SK0648 (西から) | 2 SK0654 (北から) |
| 3 SK0655 (北から) | 4 SK0656 (北から) |
| 5 SK0664 (西から) | 6 SK0665 (北から) |

図版8

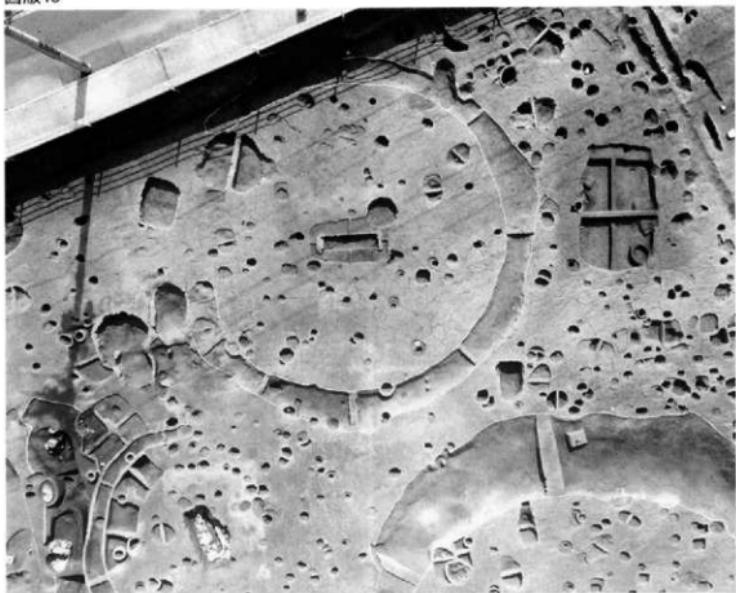


1 SK0671 (北から)
3 SK0675 (北から)
5 SK0909 (南東から)
2 SK0672 (東から)
4 SK0677 (西から)
6 SK1218 (南東から)



1 SK1365 (西から) 2 SK1372 (北から)
3 SK1583 (西から) 4 SK1750 (北から)
5 SK1969 (東から) 6 SK2000 (東から)

図版10



1 0501・0503号古墳（上空から）



2 0502・0504・0505古墳（上空から）



1 0501号古墳（東から）



2 0502号古墳（東から）

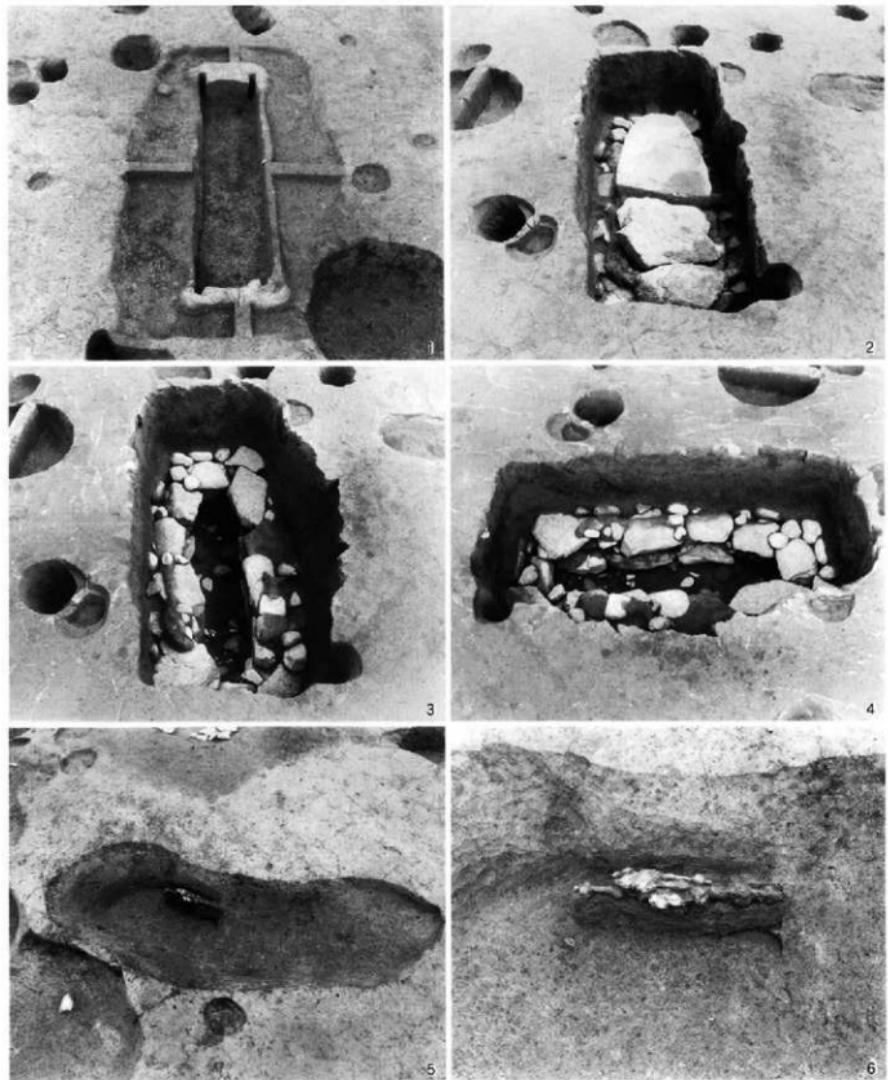
図版12



1 0503号古墳（北から）

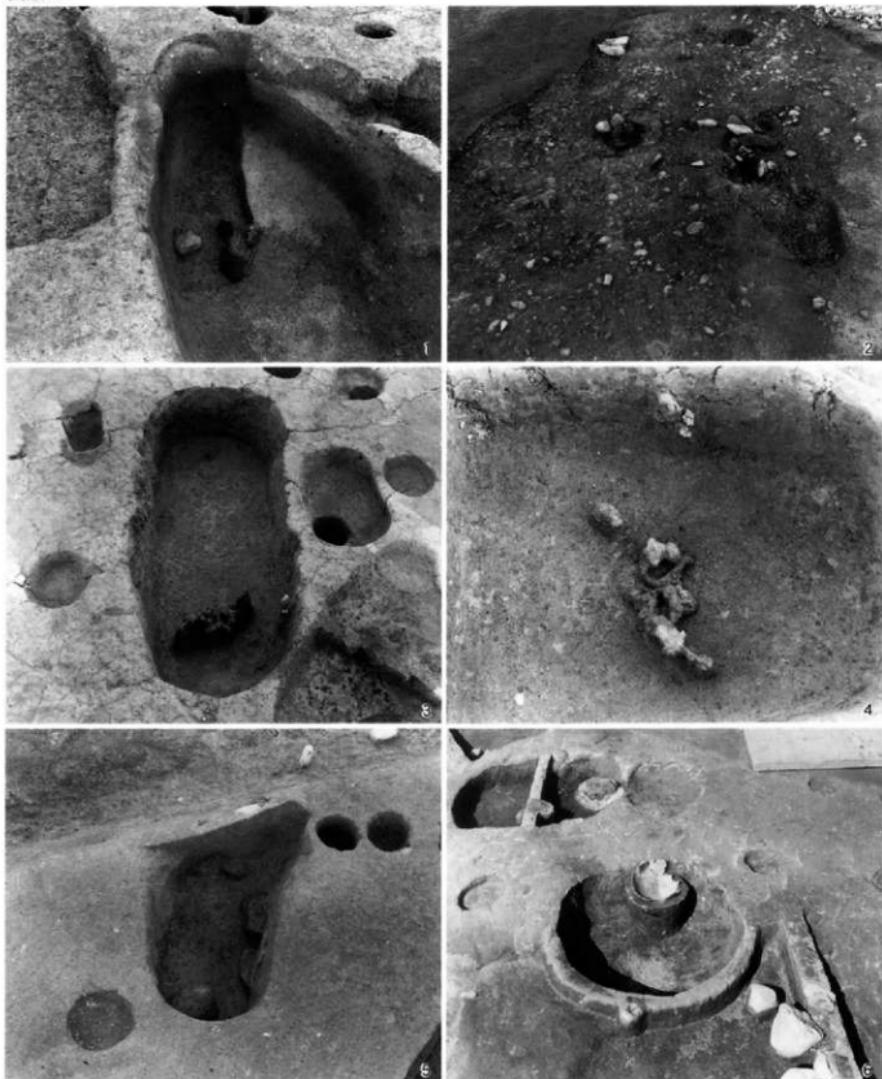


2 0505号古墳（西上空から）



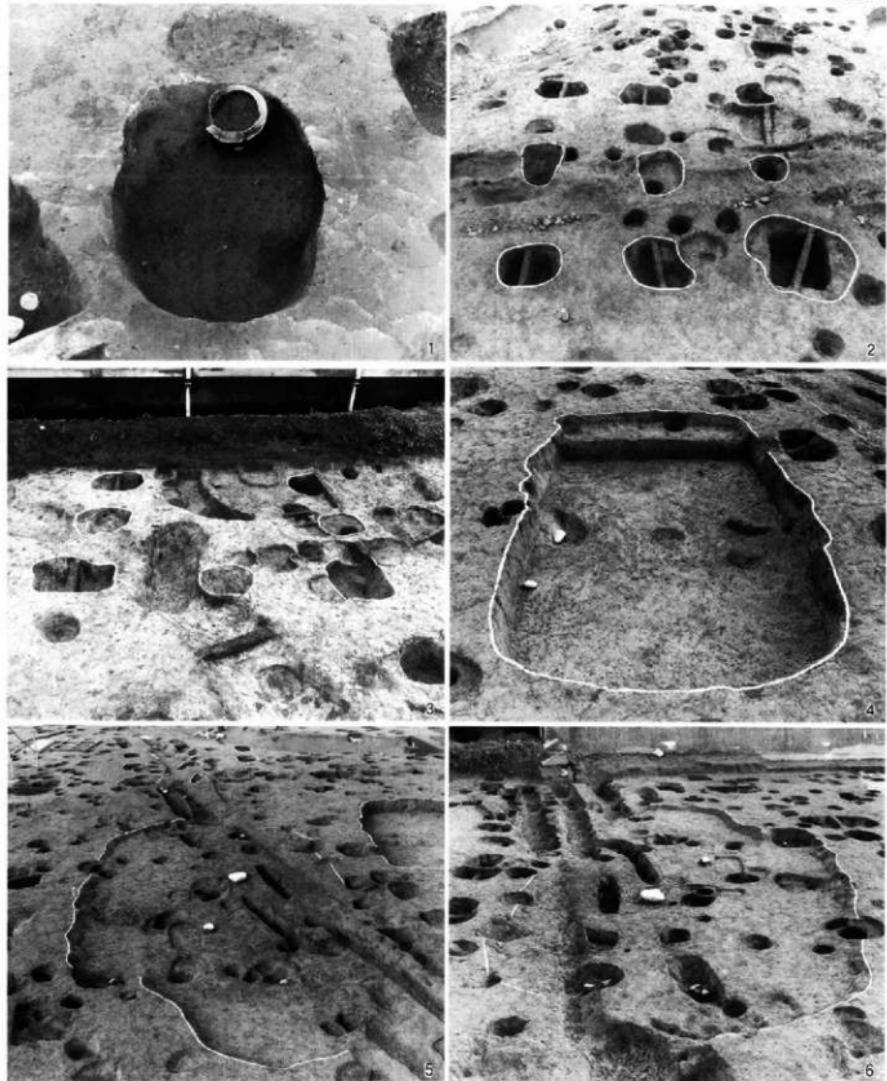
1 0501号古墳埋葬主体部（西から）
2 0503号古墳埋葬主体部（開棺前、北から）
3 同前（開棺後、北から）
4 同前（開棺後、西から）
5 0504号古墳周溝（東から）
6 0504号古墳周溝遺物出土状況（東から）

図版14



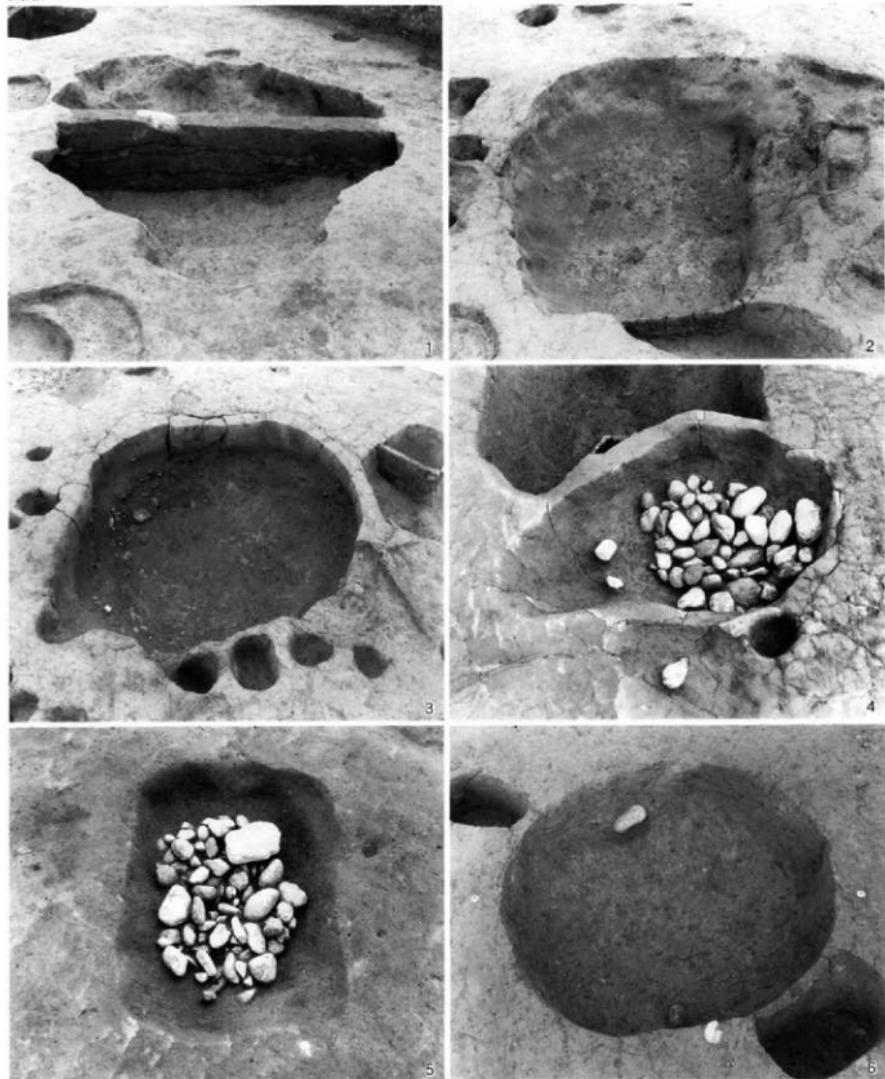
1 SX0995 (南から)
3 SX0418 (西から)
5 SK0520 (西から)

2 0505号古墳埋葬主体部抜き跡部分 (南から)
5 SX0418遺物出土状況 (北から)
6 SK0661 (南から)

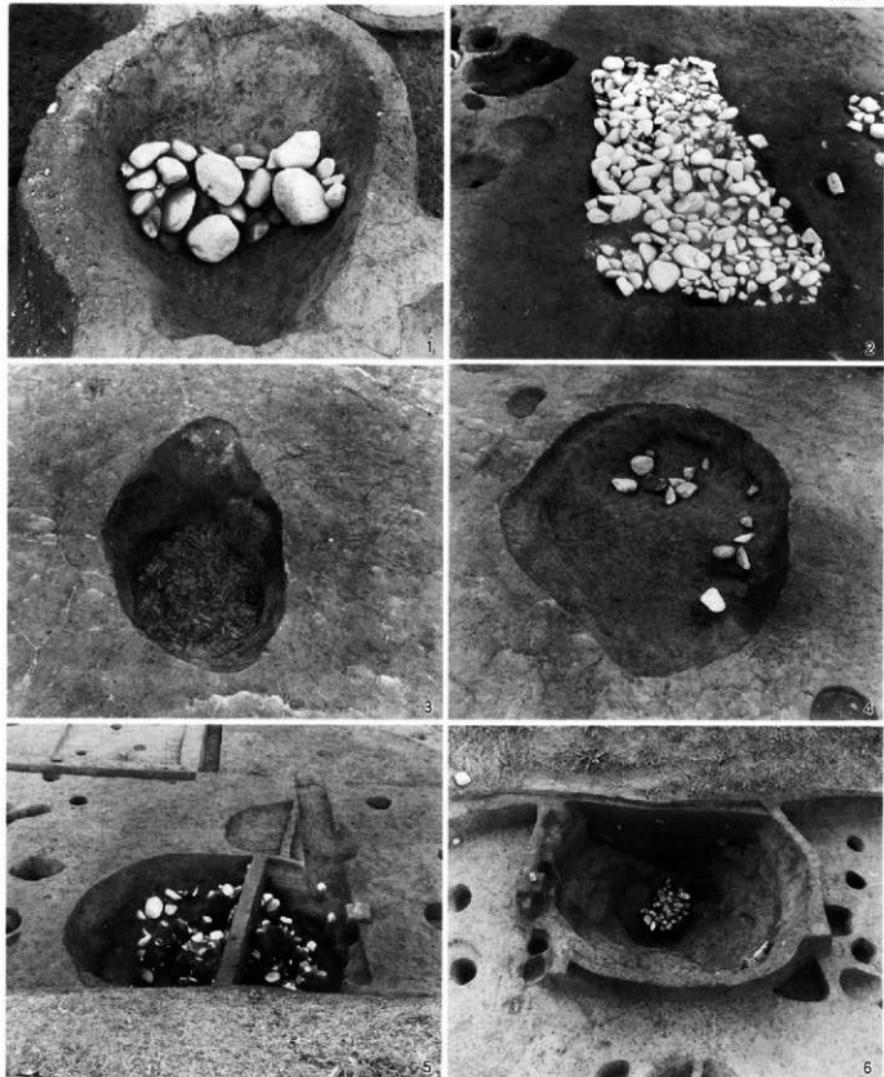


1 SK0687 (西から)
2 SB0231 (西から)
3 SB0233 (北から)
4 SC0976 (南から)
5 SC1957 (南から)
6 同前 (北から)

図版16

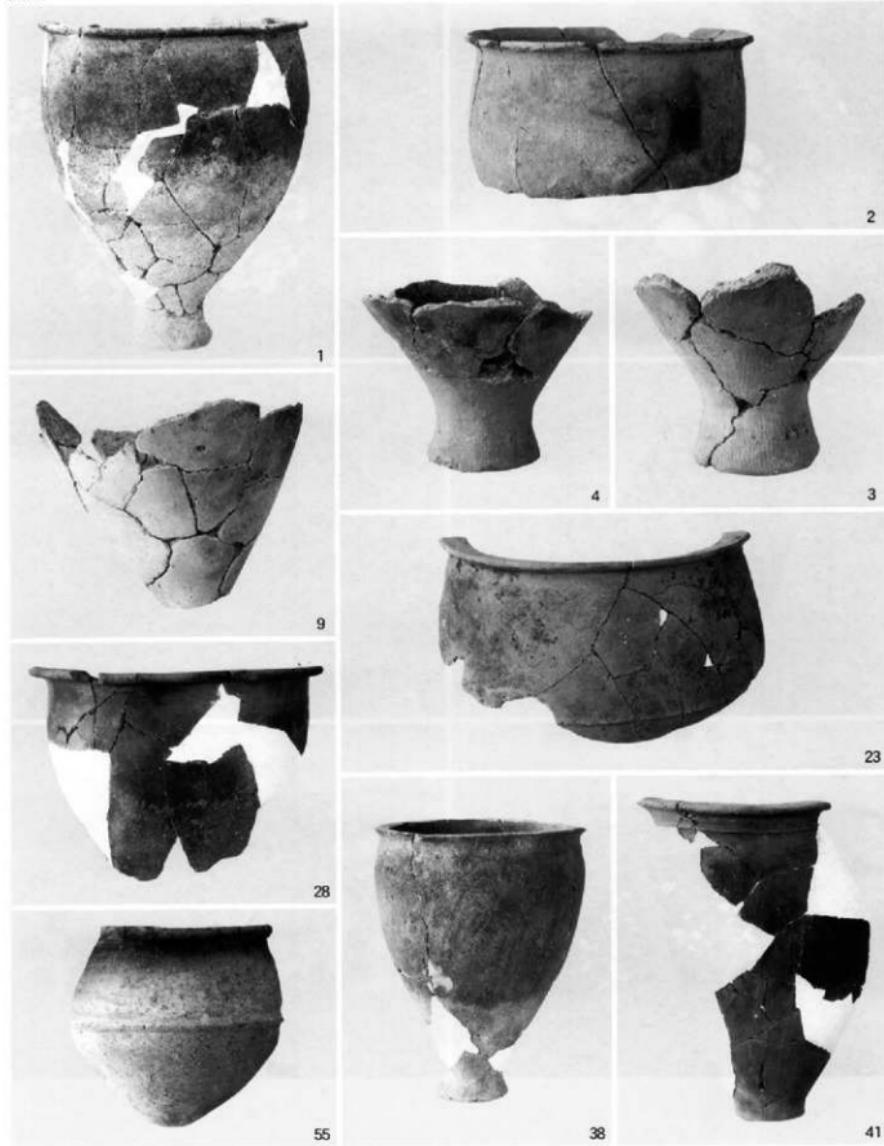


1 SK0413 (西から) 2 SK0415 (南から)
3 SK0434 (北から) 4 SK0478 (北から)
5 SK0486 (東から) 6 SK0497 (南から)

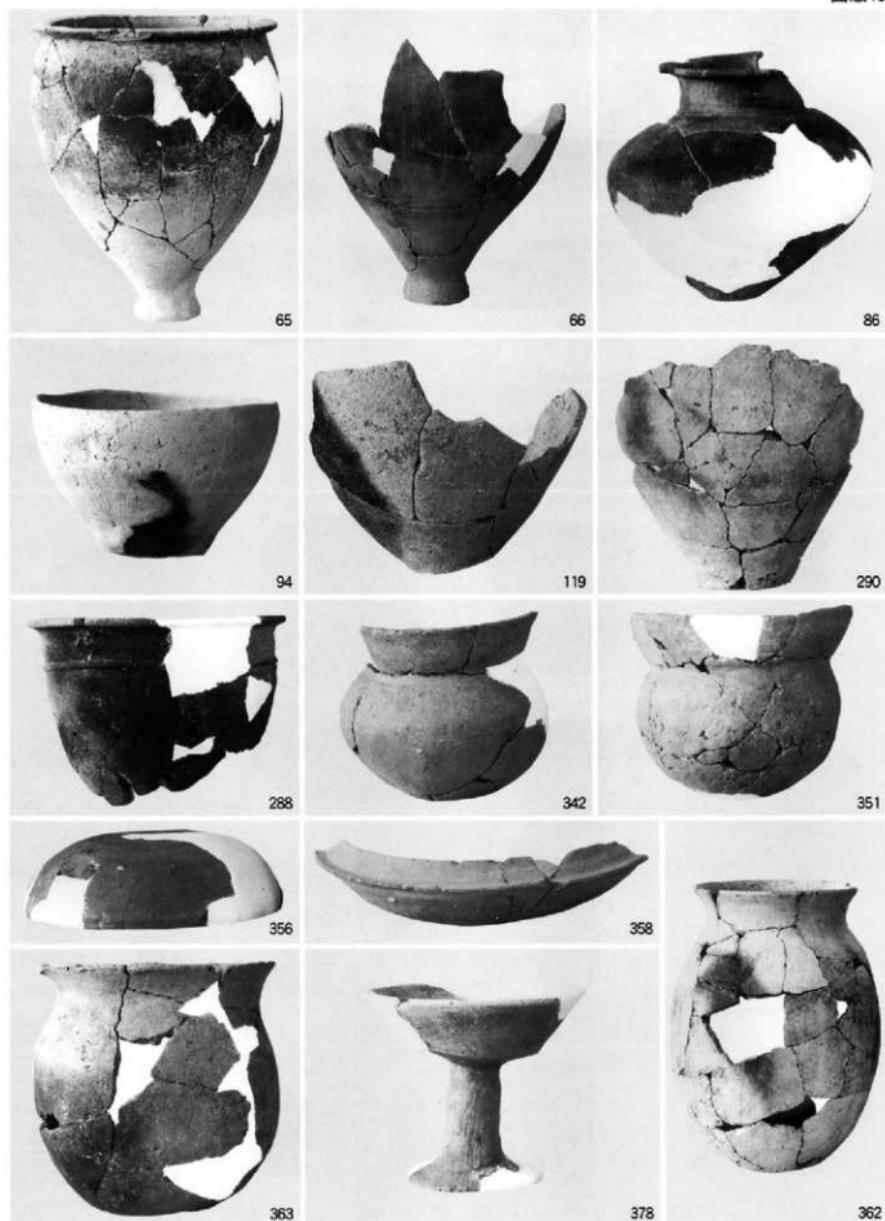


1 SK0511（西から）
2 SK0514（北から）
3 SK0621（南東から）
4 SK0622（北から）
5 SK1213（上面、西から）
6 同前（完掘後、東から）

图版18

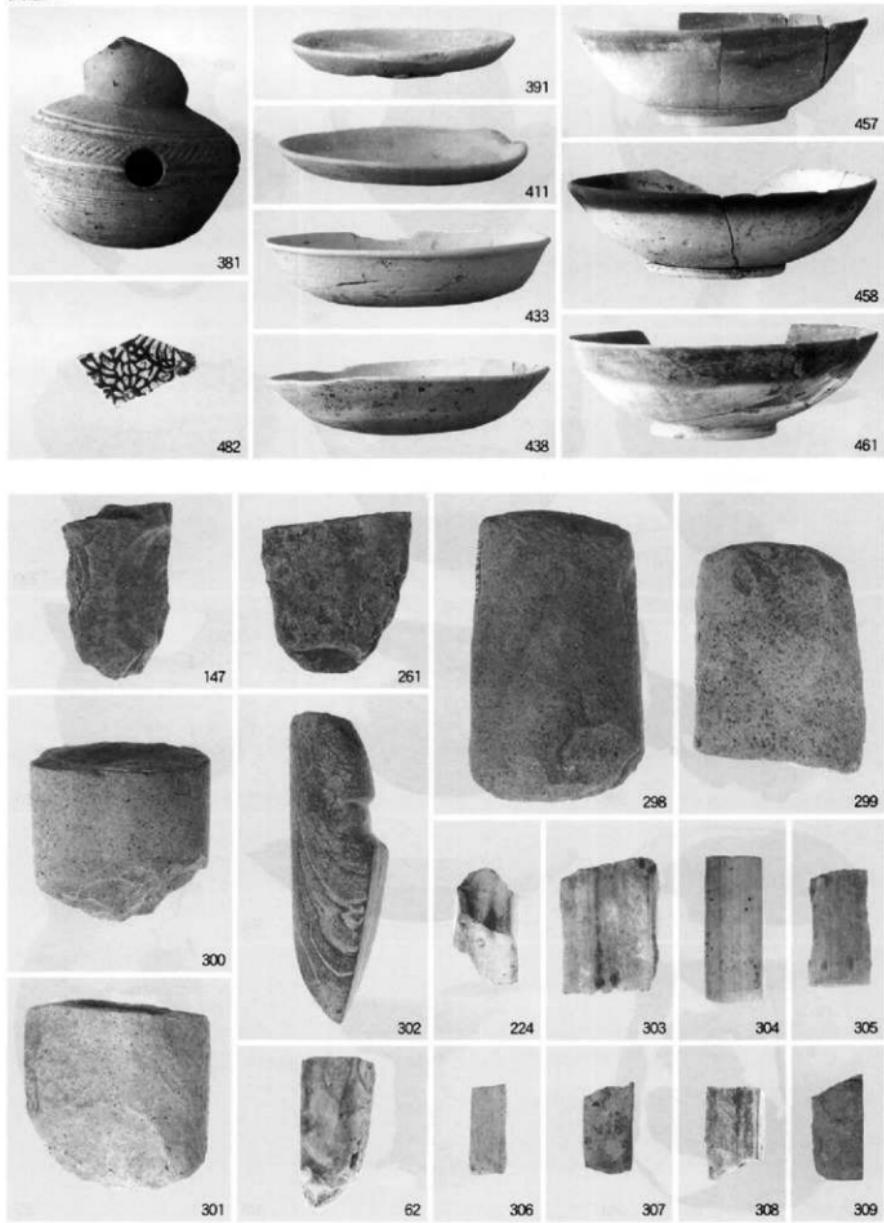


出土遗物 1

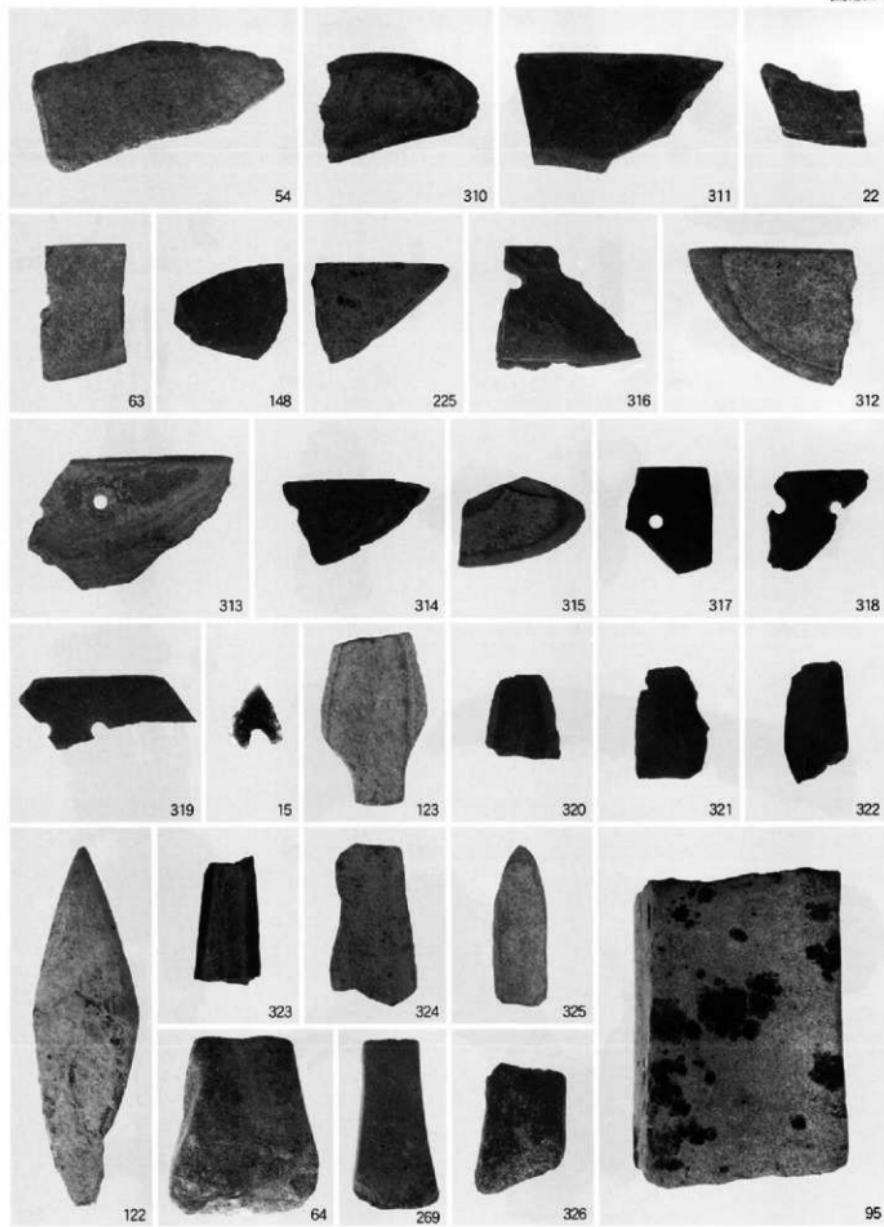


出土遺物Ⅱ

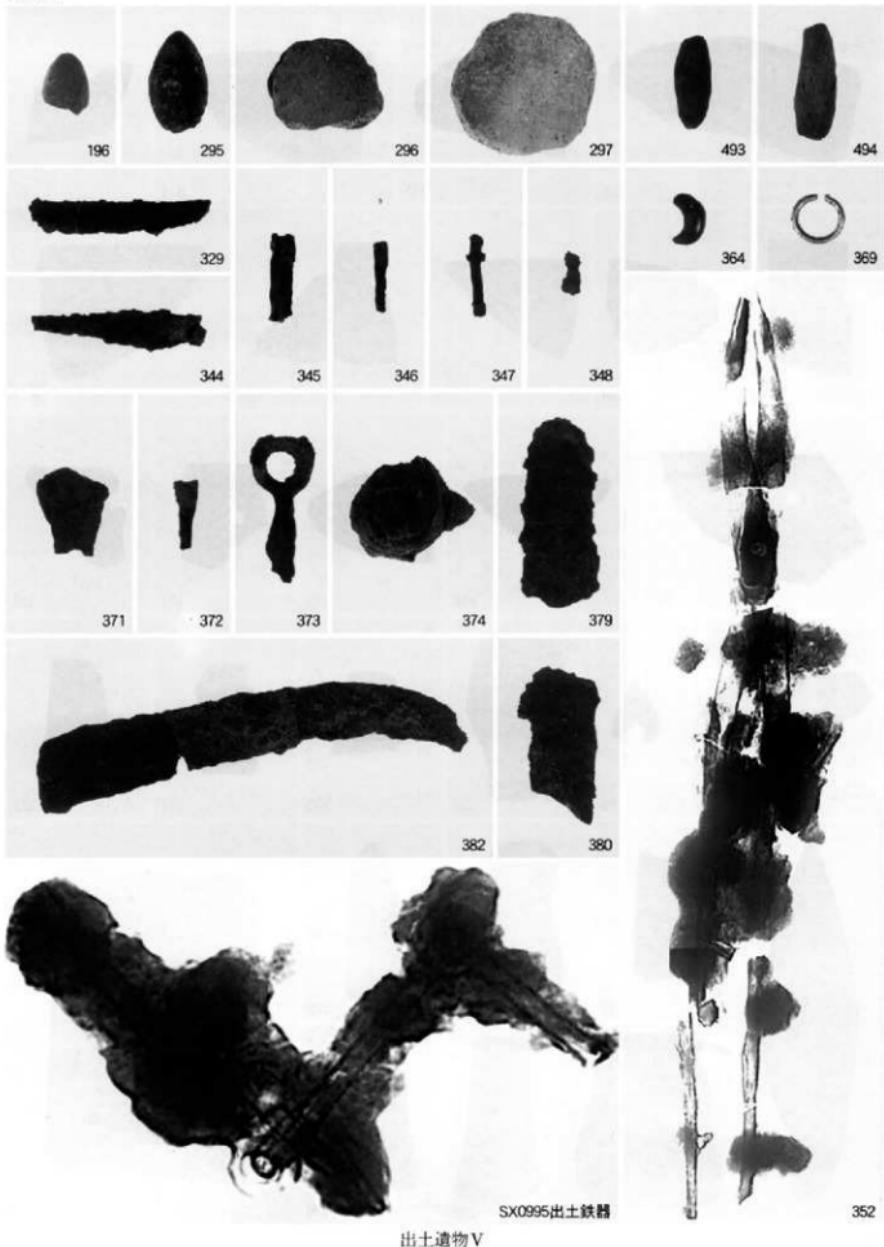
図版20



出土遺物Ⅲ



図版22



福岡市埋蔵文化財調査報告書 第685集

入 部 XI

2001年3月30日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印 刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目6-41

福岡市埋蔵文化財調査報告書第685集

『入 部 XI』

付 図

東入部遺跡群第2次調査8区遺構配置図(縮尺1/200)